
異世界のサムライ

薩摩隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のサムライ

【Nコード】

N8885L

【作者名】

薩摩隼人

【あらすじ】

時は幕末、薩摩藩邸に一人の男がいた。その男は持ち前の好奇心で部屋の中にある不思議な鏡にダイブ！そしてその先にあったのはなんとゼロの使い魔の世界！

原作どころか近未来のことすら知らないサムライが己の腕と度胸、そして刀一振りでゼロの使い魔の世界を駆け巡る！！

これは完全に作者の趣味が混ざってます。また、この小説は絶対

タバサ至上主義です。それが嫌な人はお気を付けください。
それではどうぞ、楽しんでってください！！

プロローグ（前書き）

時は幕末、薩摩藩邸に一人の男がいた。その男は持ち前の好奇心で部屋の中にある不思議な鏡にダイブ！！そしてその先にあったのはなんとゼロの使い魔の世界！

原作どころか近未来のことすら知らないサムライが己の腕と度胸、そして刀一振りでゼロの使い魔の世界を駆け巡る！！

これは完全に作者の趣味が混ざってます。また、この小説は絶対タバサ至上主義です。それが嫌な人はお気を付け下さい。それではどうぞ、楽しんでってください！！

プロローグ

〳〵1866年・京都薩摩藩邸〳〵

「ふわあゝ、．．．暇じゃ」

薩摩藩邸の縁側。いまここに暇を弄んでいる男がいる。

男の名前は高倉大次郎^{たかやまだいじろう}。薩摩郷土として生まれた男だ。歳は十と八。髪は総髪で容姿はそこその美形。性格も短気な部分があるが、それを除けば気さくで誰隔てもなく接するため人気は高い。しかし、体つきはそこら辺の武士よりしっかりしている。それもそのはず、彼は野太刀自顕流の達人で、その剣戟は岩をも砕くといわれている。

「はあ．．．暇だし、そこら辺を散歩するかのう」

大次郎は本日は非番で、暇でしょうがないため邸内を散歩することにした。

〳〵それからしばらくして〳〵

「．．．．．」

いま、大次郎は自分の部屋にいる。邸内も散策して暇だったため六畳半と意外と広い部屋で一人読書でも仕様と考え部屋に戻ると、

「これは．．．なんじゃ？」

見たこともない物体がそこにあつた。ぱつと見は鏡のようだが縁に施されている装飾は見たことがないものばかりで、おまけにでかいしかも普通映されるべき風景が映されていない。大次郎は『誰かの悪戯かもしれないと思ったが、

「・・・・こげに立派な物を悪戯の道具にするはずない・・・・か」

鏡の縁に装飾されているものはすべてが金剛石らしく、おそらく全部売れば数百両は下らないだろう。かといってただの鏡として片すにはおかしすぎる。

「・・・・・・」

しばらく考えた末、とにかく近くにあつたまごの手―（手が背中に届かないため購入）を鏡に当ててみた。

「うお！？どがいなつとるんじゃ！？」

孫の手の先端は鏡に当たらずそれどころか、逆に飲み込んでいる。しかし、反対側を覗いても孫の手の先端は突き出ていない。

「・・・・・・」

大次郎は見た目によらず結構好奇心が高い。いま大次郎の頭の中にあるのは、

『こんなかには何があるんだろうか？』

それだけだった。そう思うといても立つてもおれづ、早速身支度を整える。

振り分け荷物に荷物を詰める。下着や矢立―（携帯用の筆記用具）手ぬぐいに財布―（中には小判を十枚に小銭が少々）風呂敷に研ぎ石や刀の手入れ道具一式。手甲脚半に代えの草鞋も用意する。その他必要と思われるものすべてを詰め込んだ。

「これでよし……あとは」

大次郎は立ち上がり、刀掛けに掛けてある愛刀と脇差を腰に差した。長さ二尺九寸―（87cm）の薩摩拵えの大刀と、一尺九寸―（57cm）の脇差を左腰に差した。

「よし、いくか……とそのまえに」

大次郎は鏡の前で止まり、机のほうに歩いていった。そして机の上においてある紙に何かを書いて、

「それじゃ……どーんと来い！」

大次郎は鏡の中に飛び込んだ。

これから新たな旅が始まるとも知らずに。

〳〳手紙の内容〳〳

『暇なんでちよつと出かけてきます。帰りは遅いと思いますが心配しないで下さい。』

あと、半次郎さあの大好物である草団子食べたのはおいです。

それでは、
高倉

大次郎』

この手紙を発見した被害者である半次郎は大声で大次郎の名前を叫び血眼になって探すそうな・・・・・・。

第一話（前書き）

ん、何かグダグダです。もっと文才が欲しいな（涙）

第一話

〃大次郎が鏡に飛び込んだ頃のトリスティン魔法学院〃

「やったわ、タバサ！私が召喚した使い魔は火トカゲよ！」

静かに本を読んでいるタバサと呼ばれた蒼髪の少女が顔を上げた。タバサの目の前いたのは、男子なら初めてならもちろん、何回あっても目を送ってしまう、メロンが如く大きな胸を揺らしながら赤髪の少女・・・みなさん知っての通りのキュルケだ。

「そう・・・おめでとう」

タバサは無表情で素っ気なく言ったが、友人であるキュルケはタバサが自分のことのように喜んでいるのがわかった。

「ありがとう！次はあなたの番よタバサ！」

「・・・わかってる」

タバサは立ち上がり、担当教師であるコルベールの元まで歩いていった。

「それでは、ミス・タバサ。あなたの番ですよ」

「・・・はい」

周りにいる生徒が注目している。成績優秀なタバサがどんな使い魔を召喚するのか気になるのだろう。

その視線を独り占めしている当の本人は、そんな視線も意に介さず、別のことを考えていた。

・・・はたして偽名で私に答えてくれるだろうか？

「どうしました？ミス・タバサ」

「・・・いえ、なんでもありません」

考えてもしょうがない。タバサは呪文を唱え始めた。

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を・・・召喚せよ！」

タバサの呪文が終ると、目の前に鏡が現れた。

そして、中から二つの塊、一つは巨大な蒼い、タバサと同じ髪の色をした風竜だ。

もう一つは、

「ん？ここはどこじゃ？」

出てきたのは長い黒髪を後ろでまとめ、整った顔立ちをしている男だった。それならまだいい。

男は、ハルケギニアでは見たこともない服を身に付け、腰には見たこともない剣が二本差してある。

「……そう、我らが主人公高倉大次郎だ。」

『ふ、複数召喚だと！？』

『しかも片方は変な服を着た平民だぞ！！』

「どうやら、」

剣一（本当は刀）らしきものを持っている「平民

のように、認識されているらしい。

そんな声を上げている生徒を他所に、コルベールが、

「はいはい、静かに！ミス・タバサ。続けて『コントラクト・サーヴァント』を行ってください」

「……この際、どちらにした方が……？」

「両方です。召喚されたということはあなたの呼びかけに応えたのですから……。例えば平民でもそれは例外ではありません」

「わかりました」

タバサは蒼い風竜と変な服を着た男に近づいた。

「（ふむむ……ここは一体どこじゃ？）」

大次郎は頭をフル回転させて現状の把握をしようとする。
まず、目の前にある物を確認しよう。

まず景色、広い原っぱが広がる。

次に建物、遠くに見たこともない石造りの建物が建っている。おそらく、西欧の建物だろう。

そして周りにいる人間。顔立ちからすると、大次郎よりも下だろう。差料―（刀のこと）がないところを見ると町民か何かだろうか？ それにしては随分といい着物……。なか？ 男子は袴を履いておらず、女子にいたっては短い着物（それとも袴？）を着ているのだ。さらによく見ると、

「（髪の色が違う……。？）」

大次郎は今まで黒い、あるいは白い髪しか見たことしかない。しかし、どうだろうか。目の前に広がる人間の髪の色は、金、赤、桃色、色とりどりの色に大次郎は目がチカチカしてきた。

そんな大次郎の前に一人の少女が歩いてきた。

大次郎は地面に座ってるため、少女の顔を見るため顔を上げ……。見惚れた。

空のように蒼い髪

海のように澄んだ瞳

そして極めつけは、その触れれば割れてしまいそうなほど白い肌だった。

今までいろんな女性を見てきた。つい目で追ってしまいそうな女性も幾度があった。

しかし、どうだろうか。目の前にいるこの少女は。この少女と今までは女性とでは比べ物にならないくらいだ。そして、守りたいと思った。なぜか知らないが無性にそう思った。

「……じつとして」

タバサがそう言うが、大次郎はタバサに見惚れて固まってるため動く心配はない。

タバサは呪文を唱える。

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

タバサが呪文をとき終わり、杖を振るう。そして大次郎に顔を近づかせ、

唇に接吻をした。

「・・・・・・・・・・は？」

イマ、ナニヲナサツテ、イルノデショウカ？

大次郎即座に頭の中で現在おきてることを確認中だ。

1、自分が（たぶん）西欧にきている。

2、さきほどあつた蒼髪の少女に見惚れていた。

3、その少女に接吻されている。

4、三色団子食べたい。

・・・・・・・・最後ののは抜いて・・・・・・・・だ。わかっているのは、

「お、おおおおおおおまはん！なに、しちゅうが！？」

大次郎はキスされてしばらく呆けたが、すぐに目を覚まし顔を真っ赤にさせながら喚く。
すると左手の甲に急に痛みが走った。

「ぐっはあ！？なんだ！？左手が急に・・・・・・・・！！！」

「『使い魔のルーン』が刻まれてるだけ。大丈夫」

「『るーん』がどういう意味なのか知らないがとにかく変なものを刻むな！」

しばらく続く激痛に耐え、大次郎は冷や汗を拭きながら自分の左手の甲を見た。

「なんじゃ？これは……？」

一見見はなにやらわからん線だが、おそらく文字らしい。どういう意味かは知らないが……。

そしてツルツパゲの中年であるコルベールが近寄ってきて、大次郎の腕を興味深そうに眺め、

「ほう、これは珍しいルーンだ。ちょっとスケッチさせてもらつよ」

「すけっち？なんじゃそれは？」

コルベールは大次郎を驚いた顔で見た。スケッチを知らないのが不思議だったらしい。

「え、……まあ簡単に言うと観察……つまり、君のそのルーンを紙に写したいんだがいいかね？」

「ああ、そういうことか。そいならいくらで『ドスツ』『ゴフツ！』」

コルベールに左手を見せようとした大次郎。しかし、タバサの予想だにしない攻撃（鳩尾に頭突き）を貰い、少し逝きかけた。さらに頭を摺りこませてくるから痛いわ痛いわ。

「えーと、おまはん。何をやって……」

「……やっと見つけた」

「は？」

少女の嬉々とした声に戸惑いながら大次郎はタバサを見る。そして

「私の・・・私だけの『イーヴァルディ』・・・」

そう言っただけでタバサはさらにきつく抱きしめてきた。大次郎はさらに戸惑っただけだった。

これが、主人である雪風のタバサと、使い魔になる薩摩藩士高倉大次郎の出会いだった。

第二話（前書き）

相変わらずグダグダです！

文才が欲しい！！（涙）

第二話

トリスティン魔法学院

タバサは変なものを召喚してしまったと思った。

風竜はまだいい。これから先の足にもなるし、戦力にもなる。しかし問題は目の前にいるのは男。自分がさきほど召喚してしまった平民だ。しかもただの平民ではない。身に着けているものは見たことのない物ばかりで、特に腰に差してある二本の剣は拵えもみたことがない。

こんな平民を使い魔にして何になるだろうか？

はつきりと、そう思ったが召喚してしまったのはしょうがない。何かの任務の時に囷にでも使おうと思い、タバサはコントラクト・サーヴァントをすることにした。

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

呪文を説き、男の口にキスをする。男は呆けた顔をしたが、しばらくして顔を真っ赤にさせて、

「お、おおおおまはん！何しちゅう！？」

顔を真っ赤にさせながら男は喚く。そしてルーンが刻まれるときだ。

「ぐっは！？な、んじゃ！？」

男は急に襲ってきた痛みに悶え始める。しばらくすると痛みがなくなったのか、冷や汗を流している男は自分の左手を見つめている。どのようなルーンが刻まれたのか。タバサはスツと男の左手を見た。そこに書かれていたのは、

『イーヴァルディ』

タバサは目を見張った。その文字は、小さいころから憧れて、どんなことから守ってくれて、助けてくれる勇者の文字。タバサは気づいたら男に抱きついていた。

「私の・・・私だけの『イーヴァルディ』・・・」

男は何が起きているのかまったく判らず、ただ抱きついてきたタバサを受け止めるだけだった。

〃トリスティン魔法学院・タバサの部屋〃

「え」と、いったいどうすれば・・・」

先ほどハルケギニアに来てしまった高倉大次郎（十八歳独身）。彼は困惑していた。なぜ、困惑しているのか？それは、

「え」と、とりあえずおまは「タバサ」・・・タバサどん」

「なに？」

「とりあえずちょっと離れてくれんか？動きづらいのじゃが……」

そう、彼大次郎の腰には先ほど彼を召喚した少女、タバサがくっ付いているのだ。大次郎は動きづらいので離れることを要求。

「やだ」

「いや、そこをなんとか……」

「たとえば、炎で攻撃されても絶対に離れない」

「いや、そのときはおいが逃げてると思うのじゃが……」

さきほどから、このようなやり取りが続いている。この部屋に来るまでの間も同じようなやり取りが二十回ほど続いた。

大次郎はため息を尽いて、諦める。そしてタバサを抱えたまま床に座った。

「なぜ、床に座るの？」

「床以外の座るものがあるんか？」

タバサが不思議そうに見てくる。大次郎もまた、不思議そうにタバサを見る。

タバサはイスかベッドに座るかと思い。大次郎は床に座るものだと思う。まさに文化の違いが現れた瞬間だ。

「そこにあるイス。あるいはベッド」

「イスはわかるが『べつど』とはなんじゃ？」

「寝るための台。そこにあるやつ」

「ほほう、こいがべつどちゅうもんか？」

イスはまあ、知らない訳でもないが、ベッドは初めてみた。大次郎はそのままベッドに座った。

「うお！？沈んだぞ！？」

ベッドの柔らかさに驚いた大次郎はそのままベッドの上で跳ねてみた。今まで感じたことも無いスプリングに大次郎は楽しんでいる。

「あなたはベッドで寝たことないの？」

タバサは不思議な感じで聞いてくる。その質問に大次郎は、

「ん？ああ、こげん柔らかいもんで寝たことはなかあ。それ以前に、オイの国では畳・・・つまりは床じゃのう。布団を敷いて寝たんじゃ」

「・・・国？」

タバサは聞き返した。大次郎はああ、と呟くと、

「そういえばまだ名乗ってなかったのう。オイは薩摩藩士・高倉大

次郎じゃ……と、いえば聞こえはええが、本当は半農半土の下級郷士じゃ」

半農半土とは普段は畑を耕し、いざ戦となれば真つ先に戦場に向かう侍のことだ。大次郎もその出身で、幼き頃より野太刀自顕流を学び、畑を耕した。文字も両親が読めたので親に習い、苦労はしていない。

それを聞いたタバサはキョトンと首を傾げながら、

「やっぱり平民？」

「いや、平民ではないのう」

「それじゃ、貴族？」

「貴族でもなか」

タバサはわからないという風にまた尋ねてきた。

「じゃあ……あなたは一体なに？」

そのたずね方につい、理性が緩みかけてしまう。しかし、理性というネジを締めなおしてタバサの答えに答えた。

「おいは平民でもなければ貴族でもなか。オイは……侍じゃ」

「サムライ？」

タバサはますます判らんといいた風だった。今度は逆に大次郎が説明することになった。

「まあ、サムライというのは――」

タバサにサムライのことを細かく教える。

サムライとは文武を極め、すべての者の模範になるもの。

サムライとは守るべきものを守る者。

サムライとは主君に仕え、死ぬまで付き従うもの。

そして、

「サムライとは忠義に生き、忠義に死すもの……。少なくとも
オイはそう教わった」

タバサは大次郎の話に聞き入っていた。そして、また強く大次郎を
抱きしめた。

「やっぱり……。あなたは私の『イーヴァルディ』……」

「……」

しまった！逆効果だったか！離れてもらうためにちよつと虚実を混
ぜたとはいえ、まさか逆効果だったか……。てか、よくよく
考えたらあの説明に彼女が離れる要素があつたか？

意外と馬鹿な一面を持っている大次郎であつた。大次郎は即座に言
い訳を考える。

「いや、でも、あの・・・オイは文武の『文』のほうができんし・・・」

「私はかまわない」

即答された。大次郎は即座にほかの言い訳を考える。

「いや、あの、えっと・・・」

言い訳を考えてるとき、ふと、疑問に思ったことを述べた。

「そういえば・・・『イーヴアルディ』とはなんじゃ？」

その疑問にタバサは答えた。

「『勇者』のこと・・・どんなことから守って、助けてくれる人のこと。サムライと同じ」

ああ、なるほど、と思った。確かに根本的にはサムライと同じだ。・・・て、納得している場合ではなか！

「し、しかしじゃ！おいは果たしておまは「タバサ」・・・タバサどんの勇者とやらにはなっちよるのか？」

途中のタバサの名前発言に語尾が弱くなる。そしてその発言を聞いたタバサはこう続けた。

「あなたが・・・ダイジロウが私の目の前に最初現れたときはそうは思わなかった」

まあ、それはそうであろう。召喚したと思ったら、目の前に見たこともない服を身に纏った男が一人。しかも平民（本当はサムライ）ときたもんだ。

それはそう思われても仕方が無い。

「ではなぜ……？」

大次郎はタバサに尋ねる。タバサは大次郎の目をまっすぐ見て、

「左手に出たルーン。これはイーヴァルディという意味」

たったそれっぽっちで……。大次郎がそう言おうと思ったが、止めた。タバサの顔がものすごい真剣なのだ。

そしてタバサは、

「そして、さらに確信したのは、あなたの『サムライ』の話聞いたから」

……話さなきゃ良かったかな？

そう思ってしまう大次郎だった。

「まあ……。ええわ。それより気になることがあるんじゃないか……」

「なに？」

大次郎は今まで聞こうと思っていたが、聞けなかったことを聞いた。

「ここは一体どこなんじゃ？そしてオイはなぜ、ここに来たんじゃ？」

タバサは驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの表情になると話しを始めた。

「説明する」

タバサはこちらの世界を細かく説明した。

ここはハルケギニア大陸と呼ばれるところだと言う事。

ここはその大陸の一つの小国で、トリスティンという国だという事。

ここはその国の学校で、メイジを育てるための魔法学院だということ。

そして、

「今日は二学年に上がるための進級テストで、召喚の儀式を行なう日。それで、その召喚に……」

「おいがきたということ……か」

コクリと首を縦に振る、タバサ。その動作までもが可愛いと思ってしまう大次郎。そんな大次郎に今度はタバサが、

「そう言うあなたは、どこから来たの？」

「ん？おいか？おいは……………」

今度はタバサに自分の国のことを説明することにした。

自分は薩摩の生まれだということ。

自分はさっき言った通り、薩摩藩の下級郷士だということ。

自分は、京の都にある薩摩藩邸にいたこと、

そして、

「その藩邸にある、自分の部屋にいったら鏡があって入ってみたら……………」

「こっちに来ていた……………」

大次郎が頷く。そして互いに首を捻る。

「西欧のことは全然しらんが……………魔法とのおう」

「薩摩なんて国、聞いたことがない……………」

互いに首を傾げる。わからん事ばかりだ。しばらく考えたが最初に音上げたのは大次郎だった。

「ええい、やめじゃやめ！考えてもしょうがなか！そいに、もう夜中じゃ、寝ることにすつど！」

「同意。私ももう眠い」

時間的にはまだ夜の十時だが、二人とも世界と文化が違うとはいえ、科学が進んでない国同士、寝るのは早いらしい。そこでふと、大次郎は疑問に思う。

「あー、タバサどん。おいはどこで寝ればよか？」

そう寢床の問題だ。大次郎は別にどこでもいいのだが、女子の部屋だからそうはいかない。

すると、タバサは座っているベッドをたたく。そして短く、

「うう」

と、告げた。

・・・はて？今なんと言いました？

大次郎は目の前にいるタバサの言ったことを整理した。

ベッドと呼ばれる、寝るところ。部屋に一つしかなし。

そして、大次郎が寝るところ。そのベッド。

・・・まさかね。大次郎は頬を引きつらせながら、タバサに尋ねた。

「あゝ、タバサどん」

「なに？」

「つかぬ事を聞くが、おまはんはどこで寝るんじゃ？」

できれば別々で・・・と淡い期待を求む大次郎ではあった・・・
が、

「ここ」

もう一度座っているベッドを叩く。

・・・はあ！？

「ちょ、待ちい！おまん正気か！？」

「大丈夫。至って正常」

「どこの世界に同じ寝具の中に夫婦でもないもん同士が入るっちゅうのに正常の精神をもっとるいうんじゃ！？」

大次郎の鋭いツツコミは果たしてタバサに届くだろうか！？

「ここにいる」

どうやら届かなかったらしい。

大次郎は夫婦でもない、ましてや好いてるもの同士ではない男女が一緒に同じ寝具に入るのはおかしいと思い、否定。

対するタバサは、やっと夢見る勇者が目の前に来たので、一緒に寝たいと思う気持ちのため立案。

これは・・・文化というより、かなり、個人的な言い合いだ。

くくそれからしばらくしてくく

「・・・・・・・・」

「（はあ、おいはつくづく女に甘いわい）」

結局、タバサの強い願いで、タバサの『一緒に寝る法案』が採用された。

ついでに言う決まり手は、

『私と一緒に寝るの・・・・・・・・いや？』（+涙目&上目使い）

そのあまりにも、強烈な攻撃に、負けた大次郎は、一緒に寝ることに・・・・、

でも、

「（ああ、一緒に寝ることは認めたさ。それは間違いない。でも、でも、じゃー!）」

「あの、タバサどん？ちよつとくつつき過ぎでは……?」

「これでいい」

「いや、よくないと……」

今はいったい、どうなっているのか？それは、

「いや、しかし、そんなに強く抱きついておると……」

「やだ。絶対に離れない」

今の体勢は、横になっている大次郎の腰に寝間着姿のタバサが抱きついているのだ。

「そこをなんとか……」

「やだ。例え、盗賊に襲われても離れない」

「いや、そんな時はおいが盗賊を蹴散らして思うんじゃが……」

先ほどと似たような言い合いを続けたが、結局のところ大次郎の負けとなった。

タバサは満足したのか、そのまま目を瞑り、

「おやすみ」

一言言つて、そのまま眠った。大次郎はそんなタバサを見た後、あ
ることを考えていた。

「・・・・・・（おいが、勇者のう）」

思い出すのは幕末にいた頃の京都。昼夜問わず、血飛沫が飛び、死
体が転がる街中。そして、その中に身を投じていた・・・・・・自分自
身を思い出していた。

「・・・・・・『人斬り』もこっちでは勇者扱い・・・・・・か」

自嘲的な笑みを浮かべ、大次郎も眠りについた。

第三話（前書き）

相変わらずグダグダです（泣）

第三話

くくトリスティン魔法学院・タバサの部屋くく

「う、うん」

唸っているのは昨日、こちらの世界にやってきた薩摩藩士・高倉大次郎だ。彼はさきほどからうんうん唸っているのだ。

「う……半次郎さあ……」

どうやら、藩邸にいたころのことを思い出していたのだろう。中村半次郎（のちの桐野利秋）とは年は同じで、一緒に京都まで来た仲だ。

大次郎は眉に皺を寄せながら半次郎の名を呼ぶ。はたしてどんな夢を見ているのか……？

「は、半次郎さあ！そいはちゃう！そいは『芋』じゃのうて『モグラ』じゃ！」

……どんな夢だったのだろうか？内容は次郎のみぞ知る。

「む……？なんじゃ夢か……」

大次郎はそのまま辺りを見回し、

「はて……ここはどこじゃったかのう？」

多少戸惑いを含んだ言葉をしているが、案外ノンビリとしたしゃべ

り方だ。そして、起き上がろうとすると、

「む？なにやら腰に巻きついておるような……………」

大次郎は寝たまま、自分の腰の方へと視線を移す。

そこにいたのは、

「あゝ、確か……………タバサ……………どん。じゃったの」

そう、腰に巻き付いていたのは、蒼い髪をした美がつく少女だった。メガネを外しており、昨日見た幼い表情がさらに幼い顔になっている。

大次郎はそんなタバサをジッと見つめながら、

「（ホンに綺麗じゃのう……………」

初めて会ってからそんな感想しか出てこない。他の感想を言え、と言われたら少なくとも『可愛い』から下はないと思う。

そんな幼い寝顔をしているタバサの目がパチリと開いた。そして大次郎の顔をジッと見つめて、

「やつぱり……………夢じゃなかった……………」

綺麗な笑みを浮かべながら、さらにキツク抱きしめるタバサ。

「あ、ちょ、タバサどん……………」

戸惑いながらもその抱擁を受け止める。離れるように言おうと思ったが、あまりの嬉しそうな表情だったため、言いよどんでしまった。

「ん．．．おはよう。ダイジロウ」

「ん、ああ．．．おはよう」

抱擁されながらの挨拶。大次郎は初めての経験をした。

くくそしてその抱擁が行なわれること五分くく

タバサは抱擁でご満悦したのか、そのままクローゼットに歩を進めた。

「何をしとんじゃ？」

おそらく普通の現代っ子なら着替えると考えるが、生憎と大次郎は現代っ子ではない。まさかクローゼットの中身が服だとは思っても無い。

そんな大次郎を真つ赤な顔をして見るタバサは、

「着替える」

一言、そう言った。

「ほうか、ほうか。着替えるんか．．．ん？」

なるほどなるほどと腕を組みながら頷く。そして気付く。

タバサどんの前にある棚。どうやら着物入れのようだ。

タバサどんは今着替えようとしている。

そしてそのまん前においがいる。

・・・・・・・・！？

「し、失礼しもうした！！」

急いで部屋から飛び出る。部屋の中では顔を赤くしたタバサが無言で着替えを始めた。
そして、ポツリと呟く。

「ダイジロウになら・・・・見られてもいいかも・・・・」

その呟きがされたとき、外からクシャミが聞こえたとかどうか・・・・。

くくしばらくしてくく

「お待たせ」

「う、うむ」

部屋の外で待っていた大次郎は、多少顔が赤い。さきほどのことがまだ頭の中から離れないらしい。
タバサも多少顔が赤いが、大次郎ほどではない。

「そ、そいで、これからどうするんじゃ？」

その気持ちを紛らわせるかのように、タバサに話しかける大次郎。この男、実はかなりの初心なのだ。歳も十と八だが、未だ女性との経験がない。現代では珍しくないが、当時としてはかなりの変わり者だ。

「朝食。一緒に来て」

「あいわかり申した」

大次郎は前をテクテク歩くタバサの後を追う。その時不思議な感覚に担われた。よく感じた感覚だ。

「ああ、護衛か」

「？どうしたの急に」

「い、いや、なんでもなか」

タバサは不思議そうな顔をして首を傾げたが、その後すぐに前を向いて歩き出した。大次郎は内心ほっと息をついた。

「（ふう・・・、まさかこんなところで思い出すとはのう）」

京都にいたころ、当時は街の治安が悪く、何かとあると斬り合いが起こっていた。そんな中を大次郎は生きてきた。『人斬り』と呼ばれて恐れられても、国を救いたいと思う一心で、刀を振るった。そんな中にも、やはり護衛という任務もあった。

「（そういえば、こん風に西郷さあを前は半次郎さあが守って、後ろはおいが守ったんじゃないのう）」

薩長同盟が結ばれてない前のこと、西郷は下級武士にも関わらず、藩の重臣のように扱われていた。

そんな西郷を狙うものも多かった。そのたびに前では半次郎が、後ろは大次郎が守っていた。

そんなことを思っていたせいかな、

「あら、タバサじゃない。おはよう」

「!?!」

後ろからタバサに話しかけられた声に反応して、大次郎が後ろを即座に振り向く。そして、腰の刀に手を伸ばし、殺気を放つ。

「ちょ、ちょっと！何よいきなり!!」

後ろにいたのは女だった（まあ、女子寮なので男子がいたらまずいが……二人除いて）。髪が真っ赤で褐色の肌をした少女、キユルケだ。本来ならその頭部からしたも見ろのだろうが、今の大次郎にはキユルケはただの敵と認識しかないため、そんなのには興味なしといった感じだ。

「ちょ、タバサ！これ確かアンタの使い魔でしょ！助けてよ!!」

「大次郎。彼女は大丈夫。私の親友」

タバサが大次郎に言う。大次郎はその言葉を聞き、刀から手を離し、殺気を消す。キユルケはふうつと、ため息を尽いてその場にへたり

込んだ。

大次郎は慌ててキュルケのそばに近寄った。

「す、すいもはん！まさかタバサさあのご友人とは知らず……」

「い、いえ、いいわよ。大丈夫だから」

キュルケは顔を引きつらせながら言った。先ほどの殺気に腰を抜かしてしまっただろう。

「ほんに申し訳なかあ」

「いや、本当に大丈夫よ。でも、いきなりあんな殺気を受けたら流石に腰を抜かしちゃったわね」

大次郎のその申し訳なさそうな表情をしていたため、キュルケはかすかに笑みを浮かべてしまった。

「？どがいしましたか」

「いや、ちょっとね」

さきほどと全く違う態度に、キュルケは思わず笑みを浮かべてしまった。

「でも、凄いわねあの殺気。かなりの場数を踏んでるでしょ？あなた」

「は、はあ……一応」

大次郎は苦い顔をして曖昧に答えた。確かに場数は踏んでいる。それは間違いないだろう。しかし、それはキュルケが思っている『戦場』の場数ではない。『人斬り』として働いた場数だ。

「ふふふ、私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フオン・アンハルツ・ツエルプストーよ。キュルケでいいわ」

「おいは薩摩藩士・高倉大次郎じゃ。大次郎でよか」

「サツマ？聞いたことは無いわね。どこにあるの？」

「あゝ、どこつちゅうと……」

昨日もタバサに言ったが、もともと別世界から来た大次郎。外国の知識もないのに、ましてや異世界の知識など持ち合わせていない。そんなのにどう説明すればいいのか？

「まあ……東の島国の一つじゃ」

結局わからなかったので適当にはぐらかした。キュルケは「あら、そうなの」と、案外簡単に引いた。

「ふふふ、でも平民でこれぐらい強いんならアナタも安心ね、タバサ」

キュルケが言うとタバサは、

「違う」

否定の言葉が出た。キュルケは驚いた。目の前にいる男はどこから

どう見ても平民……しかも見慣れない服装をしていて、けつた
いな剣（無論、刀だ）を腰にぶら下げているのだ。まず、間違いな
く平民と断定できるのに、それを否定したのだ。

「え、じゃあ……もしかして貴族？」

平民じゃないなら貴族。この国のものはみなコレぐらいでしか人間
を判断しない（もちろん、エルフや翼人もいるがそれは例外として
いる）。

しかし、タバサの口からはまたもや否定の言葉。キュルケは遂に、
首を傾げてしまった。

「それじゃ……なんなの？」

キュルケの質問にタバサはざっくりと答える。

「彼は……サムライ」

「サムライ？」

聞きなれない単語だった。タバサはキュルケに大次郎が言ったこと
と全く同じ内容を話した。

キュルケは最後まで聞くと、頷いた。

「ふーん。そうなんだ。やっぱり凄いはねタバサ。それに比べたら
ゼロのルイズの平民なんか……」

キュルケは面白そうに話し出す。でも、大次郎もタバサも興味は
ないため、適当に相槌を打つ。その時、

「きゆるきゆる」

「ん？・・・うわぁ！？」

大次郎は足元で鳴き声が聞こえてきたため、下を見た。そして飛び上がってしまった。

「あら？フレイム、だめよ驚かしたら」

「な、なんじゃ！？こ、この・・・」

紅い身体をして尻尾の先は炎が上がり、口からは火の粉が舞っている。サラムンダーのフレイムだ。

大次郎はそんなフレイムをワナワナと震えながら指差し、

「なんじゃ、この可愛い生き物わー！ー！ー！」

「・・・え？」

大次郎はフレイムに飛びつき、抱きしめた。これにはさすがにタバサも驚いたらしく、読んでいた本から視線を上げて、大次郎を見た。

「愛いのう、愛いのう！なんと愛らしい生き物じゃ！」

「きゆるきゆる」

大次郎の抱擁にフレイムも嬉しいらしく鳴き声をあげる。大次郎はものすごい生き物好きで、藩邸の中には大次郎が拾ってきた生き物で賑わっていた。

「驚いた・・・フレ임がこんなに私以外の人に馴れるなんて・・・あら？」

キュルケが驚いたように大次郎とフレ임を見ていたが、隣から何やらオーラを感じた。そして、見てみれば、

「・・・・・・・・」

タバサが睨むように大次郎とフレ임を睨んでいる。しかし二人（正確には一人と一匹）は幸せのなかにいるのかまったく気にしていない。

そんなタバサを数秒見ていたキュルケはあることに結びつけ、『ハーン』と嫌な笑みを浮かべて、

「なーにタバサ。あんたフレ임に妬いているの？」

「・・・・・・・・違う」

「そういうことは目を見て言うものよ」

目を泳がせながら否定するタバサに、キュルケはイタズラしようと考える、

「あ、ダイジロウが他の女を口説いてるわよ？」

「っ！？」

タバサは泳がせていた視線を瞬時に大次郎に向ける。しかし、

「愛いの〜」

「きゆるきゆる」

しかし、其処には先ほどと同じように大次郎とフレイムがじゃれ合っているだけだった。

「キュルケ……」

タバサはキュルケを睨む。しかしキュルケは笑いながら、

「冗談よ冗談！でも、タバサにも遂にねえ……」

キュルケはニヤニヤと笑いながらタバサを見る。しかし、心の中では本当に喜んでいるのだ。今まで浮いた話どころか、近寄ろうとする男一人いなかったのだ。タバサにとっては大進歩だ。

「ま、他の子に取られないようにしなさいよ。私は絶対にとつたりはしないから」

「……」

コクリと、顔を赤く染めながら頷く。タバサは心の中でキュルケはやっぱり親友だと再確認したのだ。

「さあ！食堂に行くわよ。タバサ、ダイジロウ、フレイム。てか、二人（？）ともいつまでも遊んでなにの」

二人（？）を引き離す。二人とも不満の顔つきだったが、渋々離れることにした。

そして、一向はそのまま食堂へと向った。

第三話（後書き）

次回はギーシュの香水を拾うところまで書く予定です。

第四話

くくトリスティン魔法学院・アルヴァーズの食堂くく

「・・・・・・・・でかいのう」

大次郎たち一行（途中、フレイムが使い魔の広場に行ったためフレイムはいない）は現在食堂に来ていた。

「こげん広かあところは初めて見たわい」

「そうなの？」

大次郎が辺りをキョロキョロ見ている横で、タバサが聞いてきた。

「おいの家はこん機がちょうど横に並べて二つぐらいじゃったからのう・・・・・・・・。下手すると机一つ分しかなかったかのう」

「狭い家だったの？」

「まあ、半農半土の中ではええ生活はしとったかのう」

大次郎は故郷にいたことを思い出していた。毎日毎日、畑を耕し、剣術の稽古に励む。そんな毎日だった。そんな毎日を変えたのが、あの時代、幕末だ。大次郎はすぐさま参列に加わり上京した。

・・・・そして、国を救いたいという思いで、腰に下げた刀を振り回し、京の都を血に染め、いつの間にか周りからは『人斬り大次郎』などと呼ばれるようになった。

「ダイジロウ？大丈夫？」

大次郎が前のことを思い出していると、タバサが心配そうな顔で顔を覗いてきた。

「ん、ああ、なんでもなかあ。さ！そいよりも飯にすつど！おいは腹が減ってしょうがなかあ！」

大次郎はちよつと無理に笑みを浮かべた。タバサはその言動に不審を抱いたが、腹の虫がなったので大次郎とともに、自分の席へと向かった。

そして、タバサは自分の椅子に座り、となりの椅子をポンポン叩いて、

「ここに座って」

「う、うむ」

大次郎はピカピカと磨かれた椅子に腰掛けるのに気が引けたが、腰の大刀を引き抜き自分の右隣に立てかけた。

ちよつと椅子がふわふわして落ち着かないが、まあ悪くない。

大次郎は目の前に広がる料理に視線を移した。普通なら

『うお！？美味そつな料理だなあ！！』

と、そんなありアクションを取るのだが、

「ん？なんじゃこの料理は？」

目の前に広がる豪華絢爛の食事にも関わらず、まるで奇怪なものを

見つけたような目で料理を見つめる。ここでも文化の違いがでた瞬間だった。

「これは極楽鳥の蒸し焼き」

「ごくらくちよう？なんじゃそりや？」

「簡単に言つと、鳥蒸し焼き」

「ああ、なるほど」

蒸し焼きとはなんぞ？と思つたが、なんとなくわかつた大次郎。その後も見たことのない料理に大次郎が質問。タバサが回答、といった風になことが何回か繰り返された。すると、唱和が始まる。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝いたします」

「こいはどちらかというと、農民に感謝するべきではなかか？」

唱和を聞いた大次郎は呟く。この食事は何も空から降ってきたわけではない。女王陛下も畑を耕してみんなに配つてゐるわけではない。

「ま、おいには関係なか・・・いただきます」

大次郎は両手の手のひらを合わせてお辞儀をする。その行動にタバサが首を傾げながら見る。

「それはなに？」

「ん？ああ、おいの国の食事をする際に行う……まあ、一種の儀式じゃな」

「どういう意味があるのかしら？」

タバサとキュルケは興味を異国の文化に興味を持ったのか、目を少しばかり輝かせながら聞いてきた。大次郎はちよつと困つたような顔をして、

「うゝん……、おいも詳しいことは知らないんじやが……。
簡単に言つと『自分たちのために犠牲になつた生き物』への感謝を
込めた言葉かのう」

「生き物への感謝？」

「ああ、こん料理は何も最初からこげん形ではなかったじやろ？も
ともとは、生きた生き物を殺してそれを食らうんじや。そして、そ
れを糧としておいらは生きていくんじや。感謝するならこの食べ物
になつた生き物たちに感謝するべきじや」

大次郎の話に二人は何やら感動したような顔立ちになっていた。

「そうね……よくよく考えたらそうわよね。私の大好物の極楽
鳥の蒸し焼きだつて、極楽鳥を殺して調理するものね」

「確かに」

二人は机の上の料理を見つめる。周りにはもう残して話し込んでい
る生徒もいる。こうして見ると、恥ずかしい。二人はそう思った。
タバサは元々残す気などないが、キュルケはなんだかかんだって

残すことが多い。今まで気にしていなかったが、だとすると自分たちはかなりの生き物の命を奪つといて残しているのではないか？そう思ってしまう。

「ん、んじゃ、判ったところでさっそく飯にしようかの」

「ええ、そうね」

「同意」

そして三人は手を合わせ、

「いただきます」「」

三人は始祖ブリミルでもなく、女王陛下でもなく。目の前の食事に感謝の言葉を述べた。

～～～教室～～～

食事を終えた三人は教室にいた……が、

「ぶふう、美味かったの……食べ方はようわからなかったけど」

大次郎は西欧の文化に打ちしかれていた。

「それはしょうがないんじゃない？文化の違いだってあるんだから」

「そう、文化の違い」

「そう言ってくれると嬉しいのう」

そう、大次郎が打ちのめした西欧文化……それは食事のマナーだ。

「だいたいなんじゃ。汁物は啜って飲むもんじゃろう」

「こつちではスプーンで掬って飲むのよ」

「だいたいなんじゃ。あのモチツとした食べ物はそのまま食いちぎるもんじゃろ」

「パンは小さく千切って食べるものなのよ」

「だいたいなんじゃ！ なして箸じゃないんじゃ！」

「『はし』つてものが、なんだかわからないけど、こちらではナイフとフォークで食事食べるのよ」

「く……。これが文化の違いか……！」

大次郎は机にうつ伏せになった。しばらくはその状態だったが、少し顔を上げ、

「して……。なげにこん教室にいるやつらはおいらのほうを見ちやるんじゃ？」

さきほどから、大次郎たちに何やら色んな視線を感じるたのだ。

「ああ、気にしないでいいわよ。私はいつも通りだし」

「いや、おまんは別にいいとして……おいとタバサどんに変な視線が……」

そう、大次郎が感じていた視線は奇異、侮蔑、好奇心のような視線だ。それを己自身とタバサに向けてられていることに気付いた。

「まあ、成績優秀なタバサが平民を召喚して。その使い魔が変な服を着た平民だもの。それは変な視線で見られるわ」

「変とは失礼じゃのう……まあ、異国じゃから仕方ないの」

大次郎は比較的落ち着いて答える。この男はいたって能天気のため、こういう状態でもいい状態で考える。今も『まあ、変わった旅行気分』といった感じだ。

キュルケはそんな大次郎を苦笑しながら見ていた。

「随分と落ち着いているわね……、ところで気になってたんだけど」

「ん、なんじゃ？」

キュルケの質問に大次郎が反応する。

「その剣見たことない掬えと形状だけど……あなたの国の剣？」

キュルケはどうやら大次郎が腰に下げている刀に興味を示したらしい。さすがは軍人の家系……といってもメイジだが。

「ああ、こいか？ハハハ、こいは剣じゃのうて刀と言っんじゃ」

「カタナ？」

タバサもそこで参戦。タバサも気になるらしい。

「うむ。おいの国ではそう読んでいての、時代や長さなんかで呼び方が違うんじゃ」

大次郎がいた当時は、日本刀とよんでいなかった。日本刀とは異国の異人が、わかりやすいように付けられたような名前だ。

「へー、でもその『カタナ』ってちょっと細いわね。反りはあるけど、突き専用？」

中世ヨーロッパで一般的だったのはレイピアといった刀身の細い剣や、大剣のような斬るよりも叩くのを主体にした剣が一般的だった。

「いや、刀は突くこともできるが、どちらかというと斬るのが主体じゃ」

「え？こんな細いの？」

キュルケは驚いたように聞いてきた。タバサも多少なり驚いているらしい。

「ああ、しかも名刀と呼ばれる刀じゃッたら鉄をも両断するといわれちよる」

実際、日本刀で鉄を斬れることは証明されている。また、鉄ではなく岩であるが、昔ある剣客が闇討ちに会い、斬られそうになったとき返り討ちにしたという話があり、その際に近くにあった地蔵を斬ったという話も残っている。

「ふん、あなたの刀はどうなの？」

キユルケはちょっと興味のある視線を送りながら聞いてくる。しかし大次郎は苦笑しながら、

「ハハハ、残念じゃがおいの刀はただの無銘刀じゃ。まあ、強度と切れ味はかなりよいがの」

実際大次郎は刀を三本駄目になっている。大次郎のあまりにも凄まじい斬撃に刀が耐えられなかったのだ。今の刀は四代目だ。

「それでもすごい切れ味なんですよ？ちょっと見てみたいな」

キユルケがそんな願望を話してそれを苦笑しながら聞いていた大次郎に声が掛けられた。

「お、おい、あんた！」

「ん、おいかえ？」

呼ばれて後ろを振り向いた大次郎はすぐに怪訝な顔になる。そこにいたのは見たこともない服を着た少年がたっていた。

「あ、あんたも日本人か！？」

「ん、ああ……一応そうなるのう」

大次郎は頭を掻きながら呟く。以前、坂本龍馬も似た言葉を言っていたのを思い出して、一応相槌を打った。すると、少年は興奮したように詰めより、

「いやー、よかった！俺、不安だったんだよ！それにしてもあんた、時代劇俳優なのか？刀まで持って」

何やら一気にまくし立てる少年に大次郎はちよつとムツとした。いきなり話しかけてきたと思えば、勝手に話しまくり、最終的にはまるで侍が刀を持つことがおかしいみたいな発言をしたのだ。

「侍が刀を持って悪いかえ？第一、おまんはなんぞ？いきなり話しかけてきたと思えば、一人で盛り上がり、あまつさえ名乗りもせんとは」

大次郎のその様子を見てか、少年は慌てて挨拶をしてきた。

「あ、ああ、すみません。俺は平賀才人っていいいます。あの、あなたは？」

才人は大次郎の只ならぬ気配に負けてか、口調も丁寧にして名乗ってきた。名乗られたなら名乗るが礼儀、大次郎はその場で頭を軽く下げて、

「失礼しもうした。おいは薩摩藩士・高倉大次郎といいもんぞ。今は縁あってタバサどんの使い魔とやらをやらせてもらっちよる」

「は、はあ、どうも……俺はこっちのルイズの使い魔をやって

ます」

才人が後ろを指すと、そこには何やら変なものを見るような目で大次郎を見ているルイズがいた。

そして大次郎に

「ちょっとあんた！ここは貴族だけが座っている場所よ！あんたみたいな平民が座っていいような場所じゃないの！」

ルイズは大次郎が自分たちと同じ椅子に座るのが嫌だようだ。しかしささずタバサが、

「私が許可した」

本から視線を逸らさず、タバサがルイズに告げる。何やらルイズが反論しようとしたが、教室に先生が入ってきたため渋々自分の席に着いた。

大次郎は隣のタバサに、

「のう、何やら判らんがオイが座ってちやまずいんじゃないかえ？おいは別に床でも一向に構わんが……」

「大丈夫。問題ない」

そう言ったあとタバサはそのまま本の世界にのめり込んだ。よほど好きなんじゃろうなあ……。と素直にそう思った。

そして正面の教卓で一人の太っ……ふくよかな女性が立っていた。そしてその女性は教室を見回し、

「おやおや。ミス・タバサとミス・ヴァリエールは変わった使い魔

ですね」

どつと、教室が笑いに包まれた。ルイズは何やら縮こまってしまったが、タバサは相変わらず本を読んでいる。すると、一人の男が野次を飛ばしてきた。

「おい、タバサ！お前も『ゼロのルイズ』みたいにそこら辺から平民を拾ってきたんじゃないか！？」

「おいおい、風竜なんて凄いいもん召喚したのになんでまた平民なんか用意したんだ！」

そんな罵声を受けたタバサだが、まったく動じずに本を読み続ける。それが気に食わなかったのか一人の生徒が、

「ふん！あれじゃないか？まともに友人も作れないからそこらに歩いている平民を友達にしたんじゃないか？それに夜の方が寂しいものだから『ドガッ！』……は？」

壁際にいた男の壁に数センチしか離れていないところに、大次郎が放った小柄が刺さっていた。

そして大次郎が冷たい視線でその男に一言言った。

「おい、おまん……。次にタバサどんを侮辱してみい……。そんなときは、おいがおまはんを叩つ斬ちやっる」

「へ、平民の分際で……」

その男子生徒は全身を震わせながらも、精一杯の虚勢を張った。しかし、大次郎のその高圧的な気迫と冷酷なまでの視線で震え上がった。

ている。他の生徒も大次郎の殺気に震えている。
そんなとき、タバサが本を閉じて、

「大次郎。大丈夫、それより授業」

「ん、ああ、そうじゃのう。すっかり忘れてたわい」

それを聞いて、大次郎は殺気を治め、タバサはまた読書を始める。

「そ、それでは授業を開始します」

シュヴリーズはちよつと震えながら授業を開始した。

くく開始から数十分くく

四系統がどうの、鍊金がどうのという話を聞いているうちに大次郎は、

「・・・・zzz」

寝ていた。大次郎にとっては魔法なんてどうでもいいので、自分のためにならんのなら寝たほうがマシとのことだ。

そんな大次郎の袖を引っ張るものが一人、

「んが？・・・・ああ、なんじゃタバサどんか。どがいした」

大次郎が袖を引っ張られ、そちらの方に視線を向けるとそこにいたのは、

「タバサどん……なげにして机の下に隠れるんじゃ？キウルケ
どんまで……」

二人だけではなかった。周りを見ると他の生徒も同じほうに机の下
に隠れているのだ。大次郎は何がなんだか判らずに戸惑っていると、

「ちょ、ダイジロウ！早く机の下に潜り『ドゴンッ！』きゃあ！」

急な爆発音。キウルケはまた頭を引っ込めてしまった。

「うお！？すごか爆発じゃのう！！」

袖で顔を煤から守っていた大次郎に、

「あ、危ない！」

「ダイジロウ……！」

キウルケとタバサは驚いたように声を上げる。なぜか？それは大次
郎に机が吹き飛んできたのだ。しかし、大次郎は飛んできた机を一
瞥して、

「ふわあ〜」

欠伸を一発かました。タバサの魔法が間に合わず、机はまっすぐ大
次郎に向かっていった。そして、寸前で当たりそうになり、タバサ
とキウルケが目を瞑った瞬間、

シャキンッ、

軽い、金属音が響いた。そしてすぐに何かが転がる音が二つ鳴った。

「・・・・・・・・え？」

タバサだったか、キュルケだったか。それともっと別の誰かか。とにかく今自分達の目の前に起きた事が信じられないという顔をしていた。

なぜか？それはいま自分達の目の前で大次郎に当たるはずだった机が綺麗に『両断』されたからだ。

「むう・・・・・・・・。ちと踏み込みが甘かったかのう」

大次郎は右手を握ったり開けたりして言った。
しかし、『まあ、いいか』と言って辺りを見回し、

「こいは・・・・・・・・またえらい事になっちよるの」

苦笑しながら言った大次郎の言葉で、周りが気付く。

「ああー！！ば、僕のラッキーが蛇に食われてる！！」

「お、おい！マリコヌル！？やばい、マリコヌルが白目？いて泡吹いてるぞー！！」

「え？てか、あれ？何かマリコヌル息してないような・・・・・・・・」

「誰か！！早く水のメイジをー！！」

「しつかりしろマリコヌルー!!」

どうやら、マリコヌルは先ほどの爆風を受けて瀕死の重傷を「畜生！タバサの使い魔に当たりそうになった机が急に真つ二つになってその片方がマリコヌルに……!!」……、どうやら爆風だけが原因ではないらしい。

しかし、マリコヌルなんぞどうでもいい、それより今日の前に起きた現象のほうが大事という者が二人いた。

「ちょ、ダイジロウ！いまの何したの!？」

「ん？何がじゃ？」

「とぼけない。さつき机が当たりそうになったとき、なぜ机がイキナリ二つに分かれたの？」

キユルケとタバサは興味深々といった感じで聞いてくる。まあ、触れもしないで急に机が二つに分かれたのだ。驚いてしょうがない。ああ、そのことが。と大次郎はこともなげに答える。

「ああ、さつきのは『抜き』っちゅう、野太刀自顕流の技の一つじゃ」

「『ヌキ』？『ノダチジゲンリユウ』？」

「それはなに？」

二人とも聞いたことのない言葉に首を傾げる。大次郎は苦笑をして、

「まあ、とにかく出んか？ここではまともに話しができんからの」

辺りの騒音で、オチオチ話もできない。それもわかったのか、キユルケも苦笑を浮かべる。タバサは相変わらずの無表情だが、どこかしら同意の顔だ。三人はそのまま教室を後にした。

第五話

くくトリスティン魔法学院・食堂くく

さきほどのルイズの爆発した教室から出た三人はそのまま食堂に向かい、話しをすることにした。大次郎はタバサとキュルケに野太刀自顕流について語っていた。

どのような剣術なのか、

どのような構えなのか、

どのような技があるのか、

どのような心構えなのか、

二人は大次郎の話を食い入るように聞いていた。聞いたことのない異国の剣術、これが二人をのめり込ませたのだ。

大次郎の話を聞き、三人はそこで一旦休憩することにした。

「でも、すごいわねくあなたの国の剣術わ」

「聞いたことのないものばかり」

「まあ、異国じゃからの。知らんのも無理はなか」

大次郎は多少微笑みを浮かべながら話をしていた。自分がしている流派を語る。これほど嬉しいことはない。

「ねえ、私実際にその技を見てみたいわ」

「私も」

キウルケとタバサの羨望の眼差しが大次郎を襲う。

「あ、ああ。後で見せよう。まあ、ソレよりもまず・・・」

大次郎は円の前に広がる料理を見て、

「こいを片付けてからじゃ」

「そうね」

「同意」

食堂にはすでに生徒が集まっている。机の上には豪華な食事が並んでいる。

そしていつもの様に唱和が始まる。

「偉大なる始祖ブリミルよと女王陛下よ今朝もささやかな糧を我に与えたもったことを感謝いたします」

しかし、そのなか。二人の女性と一人の使い魔はその唱和に参加せず、手を合わせ

「「「いただきます」」」

と、一言言って食事を始めた。

くく 食事中くく

「決闘だ！」

「ん？一体なんじゃ？」

デザートであるケーキを、フォークで苦戦してスプラッタなものを製作している大次郎は、いきなり響いた声に多少驚き、辺りを見回した。

「上等だあ！やってやるよ！！」

続いて聞こえたのはさきほど話した……ルイズの使い魔である平賀才人だ。

「何があつたのかしら？」

「決闘って言つてた」

キュルケは大次郎と同じく好奇心が強いらしく、身を乗り出すように声のした方を見る。タバサは事も無げに本を見ながら呟いた。そしてキュルケは騒ぎの中心にいる人物を見て、

「あら？あれってギーシュじゃない」

「ぎーしゅ？誰じゃそれは？」

大次郎は目の前のスプラッタケーキを口に運びながら、キュルケの向いた方に目を向けた。

「ほら、あの金髪の薔薇の杖を持ったヤツよ。相手は……あら、ルイズの使い魔ね」

「ヴェストリの広場で待つ」と言っ、ギーシュと呼ばれた少年は一言言い残し出て行った。

「面白そうじゃない！見に行きましょうよ！」

キュルケはタバサと大次郎を誘ったが、

「めんどろ」

「バカどもなんぞほつとけ」

二人揃って素っ気なく言った。タバサは文字通り面倒臭そうにいったが、大次郎はちよつと違った。

「あら、タバサはともかく、大次郎も興味なの？」

「殺し合いを見て何が楽しい？生憎、おいはそげな趣味はなか」

『人斬り』として働いていた大次郎にとって、殺しは身近な存在だった。ゆえに殺し合いの恐怖を知っている。

血が飛び、骨を断ち、臓腑がブチ撒かれ、殺した相手の断末魔が鳴り響く。

大次郎は目の前のスプラッタになったケーキを見て、過去に斬った人間を思い出してしまい眉を顰めた。

しかし、そんな大次郎たちをキュルケはニヤツ、と嫌な笑みを浮かべて二人の腕を掴んだ。

「一人で見に行くのも寂しいから一緒に行きましょう！」

「・・・・・・・・」

「ちよっ！？おま！？」

タバサと大次郎はキュルケと（強制的に）一緒に広場へと向かった。

くくヴァストリの広場くく

結局、キュルケに連れて来られた二人は渋々（大次郎は嫌々）ヴァストリの広場に来了。

「あら？まだ始まってないの？」

キュルケはつまらなそうに言った。よく見ると周りにはキュルケのような野次馬が群がっている。

タバサはもとより興味がなかったため、近くの木陰に腰掛けた。大次郎は近くに落ちてゐる小枝を広い、それを小柄で表面を削っている。本を読みたいのだが生憎と手元にない。タバサの持っている本を読もうにも字が読めないのだ。

くくしばらくしてく

「ルイズの使い魔が来たぞお!!」

一人の生徒の声が聞こえ、大次郎は手元の小枝から視線を才人に向けた。

「……ふん」

大次郎は才人の表情を見て、一瞥した。

「……『覚悟』が決まったような顔ではなか。

斬り合いにおいて大事なのは『覚悟』だ。

相手を斬る覚悟。

相手に斬られる覚悟。

相手に斬られない覚悟。

とどのつまり、用は『死ぬ覚悟』と『生きる覚悟』この両方が必要だ。『死ぬ覚悟』が足りなければ強力な斬撃は出ない。『生きる覚悟』がなければすぐに死んでしまう。

しかし、才人はそれらのような覚悟を決めたような顔ではない。決闘をただの喧嘩としか取られていないようだ。

そのような思いに耽っていると勝負が始まっていた。

「ん、あら、水月にいいのが入ったのう」

結構ぼろぼろだ。右腕が変な方向に向いている。でも、何度でも立ち上がる。

大次郎はその心意義だけは認めた。そしてギーシュが薔薇の杖を振るい、剣を作り出す。それを才人に投げ渡した。

「いいかい？それは剣だ。つまりは『武器』だ。平民どもが、貴族に一矢報いようと磨いた牙だ。未だ噛み付く気があるなら、その剣を取りたまえ」

大次郎はギーシュの鍊金を見て、一瞬驚いたがすぐに冷めた。敵に武器を渡すのは愚の骨頂。それが命取りになるかもしれないのだ。才人はその剣を掴み、立ち上がる。そして傍らのルイズに言い放つ。

「洗濯だって掃除だって、なんだってやってやるよ。でもなあ・・・
・下げたくない頭は下げられねえ」

そう呟くと才人の目に光が灯る。大次郎はその目を見て、ほくそえむ、

「やあつと、覚悟が決まったかえ」

大次郎はまた小枝を削り始めた。もう勝負は決まった。

才人は先ほどとは打って変わって、スピードが速くなっている。そして渡された青銅製の剣でワルキューレを両断していく。

ギーシュは慌てて六体のワルキューレを召喚した。全部で七体。どうやら一体で十分だと思ったのだろう。

ゴーレムが才人を取り囲む。そして、一気に踊りかかった。

誰もが才人が揉み潰されると思った。しかし、

「はああああッ!!」

才人は剣を振るった。目にも止まらぬとはよく言ったものだ。一気に五体のワルキューレが切り刻まれた。

ギーシュは慌てて最後の一体を盾にしたが、なんなく才人に切り裂かれてしまった。

「ひっ!」

ギーシュは顔面に蹴りを貰い、そのまま吹き飛んでしまった。そして才人が跳躍して、ザシュツと刺さる音がした。

「続けるか?」

剣はギーシュの右横に突き刺さっている。ギーシュは首を振り、震える声で、

「ま、参った」

辺りが歓声に包まれる。あの平民やるじゃないか!とか、ギーシュが負けたぞ!、などなど。大次郎はすでに五本目になる小枝を削っていた。

するとタバサが話しかけてきた。

「どうだった?」

「ん?何がじゃ」

大次郎が目を上げると、タバサがこちらを見つめている。しかし、タバサの質問の意図がわからないので聞き返した。

「さっきの戦い」

「ああ、あれか」

大次郎はそこで質問の意図に気づいたらしく、小枝を削りながらダルそうに応えた。

「最後の方はよか戦いじゃった。じゃっどん、剣筋はド素人。踏み込みもイマイチ。あれでは一流の剣客と戦ってもまず勝てん」

大次郎の親友でもある中村半次郎のことを思い出した。彼は軒下から垂れる水滴を地面に着くまでに刀を三度抜いて、三度納めることができるのだ。ましてや、野太刀自顕流の斬撃、速さは鍛えられたものなら文字通り稲妻の如き斬撃と速さだ。それに比べたら才人の剣など対したことではない。

「あなたと戦ったら？」

タバサが興味があるような視線を送る。大次郎はどう応えようか悩んだ。腕にはそれなりに自信はある。しかし自分が強いと言っのは、驕りだと思っている大次郎は、どう答えるか悩んでしまった。それで結局、

「さあ……の。やってみなければわからん」

カラカラと笑いながら言った。タバサは多少不満げな表情になったが「そう」と、一言呟き本に視線を向けた。

そのときだ。

「ぐはっ！！」

さきほどのギーシュと呼ばれた男の声が響いた。大次郎は何事かと覗いた。

「なんじゃなんじゃ？」

見ると、先ほどのギーシュと呼ばれた少年が黒い、さきほどのワルキューレとは比べ物にならないくらい頑丈そうなゴーレムに踏みつかされていた。

そして近くで金髪の、大次郎と同じくらいの年の男が立っていた。

「やれやれ、ギーシュ。平民に負けるとは何事だい？同じ土メイジとして恥ずかしいったらありやしない」

「う、うう。す、すみま、せん」

「謝罪が欲しいんじゃないよ。君は僕ら貴族の顔に泥を塗ったんだよ？それが判らないのかい？」

何やらよくわからないが、一つだけよくわかった。アイツ、

「ム力つくのう……」

敗者を虐げる。これはあつてはならぬこと。ましてや弱気者の上に立つものがしてはいけないことだ。
大次郎は隣にいるタバサに尋ねた。

「のう、タバサどん」

「なに？」

「あのム力つく輩は何もんじゃ？」

「グラン・ド・アーツ。土のトライアングル。三年生。暴力と権力を傘にしているとしている」

「……どこの世界にもあのような輩はいるのか」

大次郎はため息を吐く。そしてもう一度ギーシュとグランと呼ばれた男に視線を移した。

「諸君！はたしてこの貴族の面汚しを生かしてよいだろうか！？」

「言い分けないだろう！」

「殺してしまえー！！！」

「この恥さらしが！」

次々と罵倒が飛ぶ、大次郎の中に何やら沸々と湧き上がってくる。そして、小柄をしまい立ち上がる。そしてグランのところまで歩いていった。

「ちょ、ダイジロウ！？何やってんのよ！！！」

「ちょっとゴミ掃除に行くだけじゃ」

キュルケに呼び止められたが、大次郎は手をプラプラ振りながらグランとギーシュの元へと向かった。

「さあ、ギーシュ。覚悟は決まったかね？」

「す、すみません。だから、許して……」

「謝罪が欲しいと言ってるんじゃないかと、何回言えば済むんだい？もういい……死にたまえ」

グランのゴーレムは手に持った剣を振り上げ、一気に振り落とした。

ガキンッ！

「……え？」

ギーシュは間抜けな声を上げて、目を開けた。本来なら自分はその三年生のゴーレムの剣で両断されていたのだ。しかし、

「もうその辺でよかじやろう？」

男が一人立っていた。見たこともない服、女性のように伸ばした黒髪を後ろで括り、腰には見慣れない剣を差している男がそこにいた。彼は確か……。

「君は……ミス・タバサの使い魔の……」

「うむ、薩摩藩士・高倉大次郎じゃ」

男が名乗った後、中から黒い塊がグランの足元に落ちてきた。

「なっ!？」

グランも驚き、周りも驚いた。何せ、急に男が現れたと思ったら、空からさきほどギーシュを襲うはずだった剣の破片だった。一体何があったのか？

「な、馬鹿な!! 鋼鉄でできた剣だぞ!？」

そう、グランの二つ名は『鋼鉄』つまりは鋼鉄を操る土メイジだ。その彼の作った剣が真つ二つに折られておるのだ。

「ほう、それは鋼鉄じゃったんか？おいはてつきり鈍らで作った剣かと思つたわい」

大次郎は嫌味たっぷりの笑みを浮かべてグランに言った。そう、先ほどの現象は大次郎が行なったのだ。その顔と言い方で、犯人が大次郎だとわかったと、グランは顔を真つ赤にさせて、

「おもしろい・・・貴族である僕に、そこまで言つたんだ。それなりの覚悟はあるだろうね？」

「バカの喧嘩に躍起になるほどオイはガキじゃなか」

このやり取りを聞いていると大次郎が喧嘩を売ってるように聞こえるが断じて違う。これは大次郎の素なのである。しかし、この素のせいで幕末にいたころもよく喧嘩を吹っかけられたものだった。グランは顔を真つ赤にさせて、怒鳴り散らす。

「いいだろう！見たところ君もさっきの使い魔みたいな平民だ。ちようどいい、ギーシュとあの平民を血祭りに上げる前に貴様から血祭りにしてやるう！」

周りからまた、歓声上がる。今度はタバサの使い魔が戦うぞ！や、グランやっちまえ！など、さまざまな言葉が飛び交う。

大次郎は腰の刀を見て、

「命を無駄にする馬鹿にはキツイ灸を添えなければのう……」

そいなら、おいも一緒に、と自嘲気味の笑みを浮かべ、グランに視線を向けた。

「さあ、こい！おまんには最高にキツイ灸をを据えちやるわ！」

大次郎は拳を自分の手のひらに打ちつけ、気合を入れてグランとの決闘を始めた。

第五話（後書き）

やっとこさ主人公が決闘・・・の前ですね（笑）しかもオリジナルがませ犬。

次回は主人公が戦います。どうぞご期待下さい！！

第六話（前書き）

やっとこさ決闘入りました。

第六話

〓トリスティン魔法学院・図書館〓

さてさて、時間をちよつと遡つてここは魔法学院にある図書館。今、ここにいるのは奉職二十年の中堅教師のミスタ・コルベールがいた。二つ名は『炎蛇のコルベール』。『火』系統の魔法を得意としている。

さて、なぜ彼がこんな所にいるのか？それは先日に行われた『春の使い魔召喚』の際に、ルイズとタバサが召喚した平民と剣士（もちろん大次郎のことである）の両少年の左手に現れたルーンのこと。気がかかったのだ。両方ともに見たこともないルーン。それが気になつてしょうがないため、昨夜から図書館に籠っているのだ。

しかし、ルーンと同時に気になったこともある。それはタバサの使い魔の少年（青年？）だ。

「あの匂い……あれは血の匂いだつた」

コルベールは大次郎から漂つて来た匂いに覚えがあつた。過去に何度も嗅いだ、血の匂いだ。しかも、一人や二人の血の匂いではない。幾人もの人間を殺さないと着かない匂いだ。

そのときコルベールは咄嗟に杖を構えそうになつてしまった。しかしそのタイミングでタバサが大次郎に抱きついたので構えるタイミングをなくしてしまったのだ。

「おそらく彼は、かなりの使い手……それもとてつもなく」

見たことのない剣を持つ剣士。もしかしたらこの図書館にその秘密が隠されてるやもしれない……。そう思い、コルベールはルーン

を探すと同時にかれの武器や衣服が書かれていそうな文献を探していた。

しかし、それらしき文献は見つからず、諦めてルーンのこと集中することにした。

そしてなんと偶然か、彼は求めている答えが載ってそうな文献をみつけた。

「……これは!!」

コルベールは本を軽く読んだ後すぐにレビテーションで地面に降りた。そしてすぐさま学院長室へと走っていった。

くくヴェストリの広場くく

「準備はできてるだろうね？」

「ああ、大丈夫じゃ」

大次郎とグランは向き合う形で睨み合う。大次郎は両手をダラン、と下げた自然体。対するグランは杖を顔の前に立てている。いわゆる決闘のポーズだろう。

「そうか、それでは始めようか？君が貴族ではないとはいえ、一応儀式は儀式だ。名乗らせてもらうよ。グラン・ド・アーツ。二つ名は『鋼鉄』、鋼鉄のグランだ」

「薩摩藩士・高倉大次郎。今はタバサどんの使い魔をしておる」

互いに名乗りあい。グランが詠唱を始める。大次郎は動かない。さっきのギーシュに対する行動で、同じ人形を使うと踏んだからだ。

「ちようどええ……、タバサどんとキュルケどんに見せる機会ができるのはのう」

大次郎は小さく呟いて、手を開いたり握ったりといつでも戦闘できるようにした。

そんなことをしている内に、グランはゴーレムを一体作り上げていた。黒い、さきほどのギーシュの青銅のワルキューレではなく、鋼鉄でできた騎士のゴーレムだ。

「さあ、いくぞ平民。僕のゴーレムの力を得と味わえ！」

鋼鉄のゴーレムが手に持った剣を振りかぶり、大次郎目掛けて振り降ろした。

少し離れたヴァリアの広場。ここにいつも読んでいる本を閉じて、広場の中央を見ている少女と、広場の中央を心配そうに見ている少女がいた。タバサとキュルケである。

「た、タバサ……」

キュルケは自分の横にいる親友に話しかける。

「なに？」

タバサは広場の中央を見据えながら、隣のキュルケに聞き返した。

「いや、心配じゃないの！？いくらダイジロウが強いとはいえ、相手はトライアングルの、しかもあのグランなのよ！？」

そう、グランはそのあまりの惨忍なことで知れ渡っている。なにせ、イライラしているという理由だけで平民に暴力を振るう男なのだ。実際それで学園を去っていった平民は数知れない。そんな男がなぜ魔法学園にいれるのか？それはグランの家、アーツ家は伯爵の地位にいるからだ。下手に退学などにしたら後々大変なことになる。それに、グラン自身トライアングルクラスのメイジだ。ちよつと強い、では勝てない。

しかし、タバサは広場の中央を見据えたままポツリと告げる。

「大丈夫。ダイジロウは負けない。私はそう信じている」

タバサの断言にキュルケは呆然とした。タバサは「それに……」と続けて、

「それに？」

キュルケが促す、

「それに……『野太刀自顕流』の技が見れるかもしれない」

「……それもそうね」

先ほどまで聞いていた野太刀自顕流の話を思い出した。

『一撃で相手を倒し、避けられる前に斬る。剣で防いだら剣ごと叩

き斬る。一度剣を振らば烈火の如く。駆けること稲妻の如く。それが野太刀自顕流の剣じゃ」

活き活きとした目で語っていた大次郎。自分のやっている流派に誇りがなければできない顔だった。タバサもキュルケも、剣とは無縁の存在だったため、正直良くわからなかった。しかし、今このように目の前でその剣術が行われようとしている。

「そうね・・・楽しみだわ」

「・・・始まる」

キュルケは視線を戻すとグランのゴーレムが大次郎に剣を振り下ろす瞬間だった。が、しかし大次郎はまだ腰の刀に手を掛けていない。

「ちよっ！？ダイジロウ！早く剣を・・・」

キュルケが叫ぼうとしたそのとき、

「キエエーーーーーッ！！！！！！」

咆哮が、辺りを包んだ。

グランは最初、何が起きたかわからなかった。生意気な平民を血祭りに挙げる。これが当初の目的だった。ゴーレムにもそのように命じた。

だから、本当なら今目の前に広がっているのは腕を切り落とされ、

泣いて喚いて謝る平民の姿だったのだが……。

「キエエーーーーッ!!!!!!!!!!」

いきなりの咆哮。最初は誰かの使い魔の鳴き声だと思ったのだが、それらしき使い魔は見当たらない。それに聞こえてきたのは今目の前に対峙している平民からだ。そしていつのまに抜いたのか、目の前の平民は左膝を深く折り、前かがみに沈んでいる。右手を跳ね上げ、その手には腰に差してあった剣が握られていた。

「……綺麗」

誰からともなく、その言葉が出てきた。そう、平民が持っている剣を見てそういったのだ。別段、特別な飾りがあるわけではない。大次郎の刀は実用重視の大刀だ。飾りつけのない刀だが、この世界に限らず異人なら誰でも言うだろう。

そんな感想を聞いていない大次郎は、スツと右足を引いて立ち、

「ふん、随分と弱い鋼鉄じゃのう」

ガシャンッ！

グランの前に黒い塊が落ちてきた。それを見ると、

「んな!？」

己の分身として呼び出した、ゴーレムの腕だった。剣を握っているところを見ると、振り下ろすときに斬ったと思われる。

野太刀自顕流『抜き』

刀を鞘に収めた状態で構え、斬りこむと同時に体を沈ませ刃を返し、真下から斬り上げる野太刀自顕流の唯一の抜刀術。以前、大次郎が爆発で飛んできた机を両断したときに使った技だ。以前は抜いて斬ったあとすぐに鞘に収めたが、今回はそのまま抜き上げたのだ。

「もう終わりか？」

大次郎の問いかけに、グランは現実に戻された。

「ま、まだだ!!」

右腕を斬り飛ばされたとはいえ、まだ充分に戦える。グランはゴレムを操り、左手で殴りかかろうとした。

しかし、

「キエエーーーー!!!!!!」

またもや咆哮。これは野太刀自顕流の独特の気合で『猿叫えんきよう』と呼ばれる掛け声だ。初めて聞くとド肝を抜かされる掛け声だ。

今度は肘が真っ直ぐに伸ばされ、刀の切っ先が天を衝くかのように掲げるような構えをとり、そして一気に袈裟に斬り落とした。

ガシャッ！ ドゴッ！

斬り下ろされた刀は鋼鉄をバターを切り裂く様に斬ると、そのまま地面に刀身を食い込ませた。

そして、鋼鉄のゴーレムは二つに別れ倒れた。

「・・・・・・・・」

その光景にグランばかりでなく、その場にいた者全員口を開けて呆けた顔になっている。

大次郎はそんなの無視して、グランに近づいた。

「う、うわああッ！！」

グランは急いで杖を振り、新たなゴーレムを作り出した。今度は三体。手に手に槍や剣を握っている。それを見た大次郎は即座に構えた。

野太刀自顕流『蜻蛉の構え』

これは名の通り、野太刀自顕流の独自の構えだ。これも独特なもので、戦場で野太刀を振り回すのに適した構えだ。基本は右に構えて斬り下ろす。あるいは左から振り下ろす。さらにいえば、野太刀自

頭流はほかに構えはない。この左右の蜻蛉以外は存在しなく、太刀筋も左右の袈裟斬り、あるいは抜き逆袈裟斬り意外は存在しない。

「キエエーーーー！！！！！」

猿叫を上げながら、ゴーレムに斬りかかる。最初は目の前にいるゴーレムに斬りかかる。

右袈裟に切り下ろす。鈍い金属音が響き、ゴーレムは両断される。

そして、左蜻蛉に構え、右斜め前に斬りかかる。

「キエエーーーー！！！！！」

今度は左袈裟、相手の右肩に刀が食い込み両断する。そしてすぐに刀を右蜻蛉に構え、

「キエエーーーー！！！！！」

左斜め前のゴーレムに刀を振り下ろす。これまた簡単に両断する。刀身が地面に食い込み、しばらくしてゴーレムが真つ二つになり倒れる。

野太刀自顕流『掛かり』・『打ち回り』

掛かりは野太刀自顕流の技の中で、大次郎がもっとも得意とする技だ。刀を蜻蛉に構え、腰を落として敵に駆け寄り相手に斬り掛かる。全体重と刀の重力を完全に刀に乗せて斬る。

『打ち回り』はそれを強化したもので、おそらく古今東西探してもここまで一対多を想定した実戦的な技はそうないだろ。稽古の際は

ランダムに設置された木の棒を切り倒すという稽古だ。これといった順番はない。その日、その時、好きなタイミングで好きなように斬り掛かる。つまりは自由なのだ。その場その場で対処する判断力を養うこともできる。

「う、うわああああッ！！！！！！」

大次郎の紫電の如き技に半ば狂乱したのか、グランは杖を振り、十六体のゴーレムを召喚した。どうやらこれで打ち切りらしい。やはり手に手に剣や槍を持っている。

しかし、大次郎はそんな物は気にしない。またもや蜻蛉に構え、

「#I I - - - ! ! ! ! ! !」

猿叫一声、紫電一閃。掛かりで斬りかかる。

ガシュツ、ガキンキンツ！！

一呼吸の内に三体のゴーレムを斬り倒す。その時、大次郎の後ろから剣を振りかぶり、振り下ろそうとしている。

あと少しで剣が大次郎に当たろうとしたとき、

「じゃらくさいわ!!!」

真下から抜き、要領で斬り上げる。刀はゴーレムの股から肩口まで切り裂いた。

うっ……！！！！

その場にいた男子生徒が股間を押さえる体勢になった。もし、自分にも同じことをされたら一生の一大事になるだろう。

しかし、グランは半狂乱状態なのでそんなの目に入らないのか、残っているゴーレムの十二体の内六体を大次郎を囲む。そして一斉に斬りかかってきた。

「危ない……!!」

おそらくキュルケの声だろう。誰でも今の状況は焦るだろうが、大次郎は冷静に対処する。素早く地面に落ちている鋼鉄製の槍を片手で掴み、

「ぬああーーーー!!」

丁度、相手の攻撃が届かない間合い。この一瞬について、大次郎は槍を円を描く様に振り回す。ゴーレムの頭が次々と碎き飛ぶ。

大次郎の腕力は常人の比ではない。その気になれば片手で大男を投げられることもできる。

大次郎は一回りした後、槍の中間地点を持ち、

「ふんッ!」

残り六体の内の近くにいるゴーレムに投げつける。鈍い、金属音と共に火花が散る。ゴーレムの頭を槍が貫き、粉碎した。

残り五体。大次郎は稲妻の如き速さでゴーレムに近づき、

「キエエーーーーッ!!!!!!」

猿叫を上げて、斬り掛かる。瞬く間に残りの五体を切り裂いた。全部が両断され、二つに分かれる。

大次郎は刀の切先をグランに向け、

「次は・・・おまんじゃ」

グランは今更になってわかった。

目の前にいるのは、ただの平民ではないと。

第一、最初に気付くべきだった。剣を帯びている所から、コイツは危険だと。

しかし、貴族のプライドが、今まで平民如きがと、見下ろしていたことが、コイツの危険を受け取る機能を壊していたのだ。

一歩、また一歩と近づいて来る。そのたびに、グラン自身も一歩づつ後ろに下がる。

一歩、大次郎が歩めばグランは一歩退く。

二歩、大次郎が進めばグランは二歩退く。

三步、大次郎が進めばグランが三步退く。

そんなイタチゴッコをしていると、

ドンッ

「!？」

背中が、背後の壁にぶつかる。もう、後がない。前に行けば、斬られる。でも後ろには逃げられない。左右に避けようものなら間違はなく稲妻の如く速さで近づき、斬られるだろう。

「ま、待て！お、俺の負けでいい！！だから命だけは・・・!!」

「・・・・・・・・」

グランは必死になって命乞いをする。もうそこに、貴族の誇りなど存在しない。あるのは死を恐れる弱い人間だ。しかし、大次郎は歩みを止めずグランに近づく。

「ほ、本当に頼む！い、命の代わりに金ならいくらでもやる！！だから・・・・・・・・!!」

どんなに頼んでも、どんなに好条件を出しても、大次郎は無表情のままグランに近づく。

そして、刀を振り上げ、

「チエエーーーー！！！！！！！！」

ガシャッ！！！！

グランは目を瞑り、手で顔を隠した。しかし、いつになっても痛みがこない。不思議になったグランは恐る恐る目を開けると、

「ヒッ……！」

顔の真横の壁に刀が深々と食い込んでいる。後数サント下だったら……。グランの肩に刀が食い込んでいた。そして大次郎が冷たい声で言い放つ。

「……二つ誓え」

あまりの迫力と実力を目の前にしたグランは、コクコクと頭を縦に振った。

「まず一つ。今後民を傷つけるな」

「……！！！！」

首を激しく縦に振る。それを確認した大次郎は続ける。

「二つ……今後弱者を虐げることは許さん。もししたら……」

わかつちよるよなあ？」

「は、はい！肝に銘じます！」

「そいならよか・・・ゆけい」

「は、はいいつ！！！」

グランは最初の威厳はどこへやら。途中、何度もコケながら寮へと戻っていった。

大次郎は壁から刀を引き抜き、刀身を眺める。

「・・・チツ」

軽く舌打つ。切っ先の所々が刃毀れはしほを起している。これは少しばかり・・・いや下手したらかなり修復に時間が掛かる。しかし、大次郎は気にも留めた風もなく鞘に収めた。そして自分の主のところに戻っていった。

道が開く、その顔には様々な表情がある。

恐怖、

侮蔑、

殺意、

好奇心、

畏怖、

そしてその中の何人かは『心酔』した視線を寄越していた。

そんな視線に気づいてかどうか、大次郎はそのまま真っ直ぐに主であるタバサとその友人であるキュルケのもとへとやってきた。

「どじゃった？」

自分の主に問いかける。タバサはいつもの無表情だったが、

「すごかった」

ぼつりと一言いった。それでも大次郎は充分なのか、ニコリと笑い、

「ほうか」

と、一言言った。その顔を見たタバサはちょっと顔を赤くしてスタスタと自分の寮へと向かって歩いていった。キュルケはちよつと微笑みながらその後を追ひ、大次郎もその後を追いかけた。

三人が去った後の広場は、静寂が包んでいた。

〳〵学院長室〳〵

「……勝って……しまいましたね」

「……うむ」

コルベールとオスマンは、『遠見の鏡』で一部始終を見ていた。

「最初の『ガンダールヴ』の少年にも驚かされましたが……彼はまた一段と驚かされましたな」

コルベールはちょっと興奮気味に話した。が、オスマンは考え込むでいるようだ。

「どうしたんですが？ オールド・オスマン。何か不可解な点でも？」

コルベールが気になり、問いかける。コルベールは「ふむ」と呟くと、コルベールに問いかけた。

「のう……ミスタ・コルベール。君から見て『彼』をどう見る？」

「もちろん始祖ブリミルの使い魔の再来です！ そして謎のルーンを持った剣士の到来ですぞ！ これはもう興奮して夜も眠れませぬ！」

そう、不思議なことに大次郎のルーンである『イーヴァルディ』に関する文献がどこにも載ってないのだ。ただでさえ『ガンダールヴ』が出てきたというのに、謎の今まで出てきたことのない謎のルーンが出てきたのだ。コルベールはそれでもすごく興奮しているのだ。

「そう、興奮しなさんな。第一わしが聞いているのは『ガンタールブ』の少年ではなく、『イーヴァルディ』という謎のルーンを持った剣士のほうじゃ」

コルベールは一瞬きよとしたが、瞬時にそんなのを忘れて、

「確かに彼のルーンは謎が多くて面白いですな！これはさらに研究を……」

「わしは『炎蛇』としての君の意見を聞きたいのじゃが」

オスマンが言うと、コルベールは先ほどとは一転、文字通り『蛇』のような目になった。

「……私の憶測ですが、おそらく彼は……多くの人間を斬殺しています。それにさっきの囲まれたときに槍を使った戦法。そして、あの見たこともない強力な剣術。あれは相当の修羅場を通っていないればできない業です。おそらく彼一人で傭兵三十人分の戦闘力を持っていると思っても過言ではないでしょう。しかも、彼は本気を出していません」

「うむ……。それにアーツの子せがれはまかりなしにもトライアングルメイジじゃ。一介の剣士に負けるはずはないのう……」

二人は考えた。謎のルーン『イーヴァルデイ』。そしてかの剣士……。はたしてその正体とは……？

「まあ、それはおいおい調べれば良いじやろう。とにかくこのことは他言無用じゃ。特に王室にはのう」

「はて？それはなぜですか？世紀の大発見ですぞ！伝説の使い魔『ガンダールブ』のルーンを持った少年に謎のルーン『イーヴァルデイ』を持った剣士！」

「だからじゃ。お主はさつき自分で言ったことを忘れたのか？」

オスマンは諭すようにコルベールに告げる。先ほど言った自分の言葉。それを思い出したらしい。

「たった一人で傭兵三十人の戦闘力、しかも手を抜いてじゃ。それが本気になってみい、おまけに未知のルーンまで持っておる。もしあのルーンが戦闘に特化したルーンじゃッたら……どうなると思う？さらには彼はガリアの留学生のミス・タバサの使い魔じゃ。下手に荒事を起せばガリアと一戦交えなければならんわい。そうなればトリステインなんぞ一日もせん内に滅びてしまうわい」

「た、確かに……」

「じゃから、この件は他言無用じゃ。分かったのう？」

「はいっ！」

「しかし、あの男といい。謎のルーン『イーヴァルディ』といい……一体何者なんじゃ？」

「さあ……私も流石にわかりませんな……ただ、イーヴァルディという」と

そこで一瞬音がなくなった世界のようになった。

「『』という意味ですがね」

「うむ………だとしたら大変なことじゃがのう………」

「まあ……まずありえないでしょうがね……」

二人はありえないと思った。しかし、本当にそのルーンの意味通りだったら……このトリステインだけでなく、ハルケギニア全土に間違いなく、驚愕が走るだろう。

『イーヴァルディ』その意味は……、

自由自在に剣を振るい、

ありとあらゆる魔法を使う勇敢な剣士、

すべての悪と立ち向かう正義の勇者、

通称、

『魔法剣士』

はたしてそれは、真実なのだろうか？はたまた、虚実なのだろうか

？はたしてそれは・・・まだ、わからない。

第七話（前書き）

今回はちょっと空白の一週間を書こうと思っています。もちろん一日づつ書くつもりはありません。長くなるから。

少し、改稿しました。

第七話

〃〃決闘の夜・タバサの部屋〃〃

「ダイジロウ」

「ん、なんじゃタバサどん」

大次郎が刀を抜いて砥石で研いでいるとタバサが話しかけてきた。話しかけられた大次郎は刃毀れたところを何度も見ながらタバサに聞き返した。出来るだけ刃毀れを減らしているのだ。そんな時にタバサが話しかけてきた。

しかし、しばらくの沈黙の時間が流れる。

「あゝ、タバサどん？どがいしたんじゃ？」

「あなたは・・・」

そこまで言ってタバサは言いよんだ。タバサは気づいたのだ。大次郎は過去に人を『斬った』ことがあるのだと。しかも、一人や二人ではない。十や二十・・・いや、下手したらもつと人間を斬ったのではないだろうか。

だからタバサは聞こうとした。でも、やめた。人には誰にも言いたくないことが一つや二つあるものだ。自分自身がそうであるように。

「やっぱ、なんでもない」

だから、聞くのはやめた。何があろうと彼は彼、高倉大次郎には代

わりは無い。それでいいのだ。

「?まあ……、えんなら別にええが……」

大次郎は怪訝な顔になったが、しかし、どうでもよくなったのかすぐに欠伸をした。そして、刀を鞘に収め。

「さて、時間も時間じゃ。はよ寝るぞ」

時間はもう十時を過ぎている。当時では充分夜更かしの時間だ。

「うん、そうする」

そうしてタバサはベットへ、大次郎は床に「何をしているの?」……いけなかった。

「い、いや……。やはり夫婦でもないもん同士が一緒に寝具に入るのは……」

大次郎は昨夜とまったく同じことを言った。しかしタバサは、

「やっぱり……。私と寝るの……。いや?」+上目遣い&涙目

「うぐ……。!」

大次郎は多大な精神的ダメージ(いい意味の方で)を食らった!そして、『反抗』を奪われた!

「う……。まあ、しょうがなか……。うん、しょうがなか」

大次郎は腰の刀と小太刀を引き抜いて、枕元に立て掛けた。そして、ベッドに横になり、寝ようとしたが

もふッ

「あー、やっぱり今晚もかや？」

昨晚もそうだった為、なんとなくは予想はしていたが……、まさか本当だとはおもわなんだ。

「当たり前。これから毎晩もこう。そういうわけで、お休み」

「ちょ、毎晩じゃと！？そいではおいの精神が……!!」

「zzzz」

「寝ちよるがな……はあ」

大次郎はちょうつと呆れ気味にタバサを見た。

「ほんに……こげん『人斬り』のどこがええんやら……」

そこまでいって、大次郎も眠りについた。静寂が辺りを包み。その日は終った。

〳〵次の日の朝・タバサの部屋〳〵

「……なぜにおいは、こげん女に弱いんじゃないか？」

ハルケギニアに来る前もそうだったが、大次郎は女に滅法弱い。以前なんかは親友である中村半次郎に『おまんは間違いなく嫁さあの尻に敷かれるの』と言われたことがある。

……本当にそうなるのでは？

「……ん……」

大次郎がそんなことを考えていると、腹部の辺りがモゾモゾ動く。どうやらタバサが身じろいだらしい。

下を見ると、タバサが寝ぼけ眼でこちらを見ていた。

「起きたかえ？」

大次郎はちよつと微笑みながらタバサを見た。すると、タバサが微妙に頬を染めて、

「おはよう」

と、挨拶をしてきた。

「ああ、おはよう」

大次郎も挨拶を返した。

くくくしばらくしてくくく

「着替える」

昨日の朝のように、起きてからしばらくタバサが大次郎に抱きついてた。そして満足したのか離れ、一言言っ、クローゼットの前にいった。

「う、うむ、そうか。はよ着替え」

そういつて大次郎はそそくさと部屋を出て行つた。……その際、タバサがちょっと残念そうな顔になったのは気のせいだろう。

〃〃タバサの部屋の前〃〃

「さて……どうしたものか……」

大次郎は部屋の中で着替えてるタバサの布が擦れる音が聞こえたが、すぐさま頭の端っこに押しやった。今はそれどころではない。

「まず、コイツをどげんとせなあな」

大次郎が今悩んでいることは二つ。まずひとつは腰に差してある刀のことだ。折れなかったし曲がらなかった。しかし、刃毀れが激しい。今でこそ刃毀れは減つたが、まだ大小の刃毀れが残っている。

「いっそ、昨日のグランとか言う奴に直すよう（脅して）頼むかのう……」

そう考えたが、やめた。まず無駄だろうと思つたからだ。昨日あの剣を斬つた際に見た、切断面を思い出したからだ。

こちらの世界……というより、西洋の剣と日本の刀と構造が違うからだ。日本刀は硬い鉄（炭素が多い鉄）を外側に、柔らかい鉄（炭素が少ない鉄）を内側にして、柔らかい鉄を包むように硬い鉄で覆うのだ。これに反りなども加えるため、日本刀はよほどの鈍^{なまく}刀出ない限りはそんなポキポキ折れないし曲がらない。そして刃物界で最強の切れ味と呼ばれるのだ。だが、現在ではその考えが間違いとされ小林康広という昭和の刀工は一枚鍛えと呼ばれる鉄板一枚で鉄をも斬れる日本刀を打ったという。しかし、一方、西洋剣も一枚の鉄のみで鍛えてあるが、こちらはどちらかというと『斬る』より『叩き潰す』が正解だろう。

「昨日見た西洋剣は扱い難そうだったし、というか扱いを知らんから一刀からだめにしてしまっじやろうしのう……」

正直、大次郎が西洋剣を使うなら常に5本は必要だろう。

「まあ、それはいずれなんとかすればよか……あとは、稽古具じゃ」

大次郎とて人の子。稽古を劣れば弱くなってしまう。ゆえに藩邸でも稽古をしていたのだが……ここには稽古具が置いていない。

「木刀と横木も作るか……」

野太刀自顕流の木刀は自然木を乾燥させて作る。横木とは野太刀自顕流の稽古において使う道具だ。木の束を束ね、それを縄などで縛ってY字の股木（今はX字の台に乗せている）に乗せて使うのだ。なお、よく勘違いする人が多いのだが稽古をする際は『地軸の底まで斬れ』といわれ、横木はそれを受け止めるためにある。これは今度近くの林で取ってくればいい。

以上が大次郎の今の悩みだ。どうするかブツブツ呟きながら考えていると、扉がガチャリと開いた。タバサが現れた。

「お待たせ」

「やはり……………」

「…………お待たせ」

「……………いや、ここは……………」

「……………」

どうやら大次郎、タバサが来たことに気付いていないようだ。タバサはそれにイラッときたのか、

「しかし、やはり「エア・ハンマー」ぶはっ!？」

タバサの『エア・ハンマー』が大次郎を襲った。大次郎はそのまま二メートルぐらい吹き飛ばされてしまったが、すぐに立ち上がり

「タバサどん!!いきなり何をするんじゃ!？」

「ただなんとなく?」

「なげに疑問符がつくんじゃ!？」

そんな漫才もそこそこに、二人は食堂へと向った。

くく食堂くく

「新しい刀が欲しい？」

「稽古用の道具を作りたい？」

大次郎とタバサは途中で合流したキュルケと一緒に食堂で食事を取っていた。そしてタバサに何を考えていたのか聞かれ、正直に話した。

「うむ。刀は折れもせんかったし、曲がりもしなかった。しかし、刃毀れが激しくつてのう……。稽古具が欲しいのは鍛錬を怠りたくないからじゃ」

「あら？でもあなた十分強いじゃない」

「それでも、稽古は怠りたくないんじゃよ。稽古を怠れば、簡単に負けてしまうからのう」

今でも十分強いのに……。とキュルケもタバサもそう思ったが、彼なりにさらに高みを目指しているのだらうと。

「まあ、いいんじゃない？聞いた話じゃ、学院の近くの林に行けば採れそうだし。……。でも、問題は……。」

「刀……。」

「それよねえ……。」

タバサとキュルケは頭を捻った。ただ単に剣が欲しいなら、武器屋に行けば売っている。でも大次郎の刀はまず売っていないだろう。強靱で、鋼鉄をも切り裂くあの切れ味。少なくともタバサとキュルケは聞いたことがない。

「やつぱ．．．無理かえ？」

「．．．ちよつと望み薄ね」

キュルケは肩を竦め、タバサもちよつと肩を竦めている。大次郎は腕を組み、考え込んだ。はたしてどうしたらいいやら．．．。

「今度、虚無の曜日に武器屋に行ってみる？」

「武器屋？．．．ああ、刀剣商のことか。じゃっどん、異国にも刀は売っているのかえ？」

「判らない。でも、もしかしたらあるかもしれない」

「うむ．．．」

大次郎はさらに頭を捻った。タバサもキュルケも頭を捻った。はたして売っているだろうか．．．？
そんなことを三人で考えていると、

「ちよつといいかい？ミスタ・ダイジロウ」

「ん？オイかえ？」

呼ばれて後ろを向くと、そこには金髪で胸元にフリルを着けたシャツを着て、その胸ポケットには薔薇の造花が差してある少年……みなさんお分かりだろう、ギーシュ・ド・グラモンだ。その後ろにさらに数人の生徒がいる。

「ちよつと、なんなのよあんた達？ 雁首そろえて……」

「出入り？」

キュルケとタバサも呆気にとられた様な顔だ。ましてや、先頭に立っているのはギーシュだ。一体どうしたんだろうか？

「いや、タバサどん。出入りとは違うと思うんじゃが……」

大次郎は冷静に突っ込むも、中々マッチしているので苦笑を浮かべている。

「そいで？ おいに一体なんのようじゃ？」

「あ、ああ、実はだね……」

ギーシュは鼻頭を掻きながら、照れ臭そうに、

「いや……なに、僕らに……僕らに、君の剣術を教えてくださいませんか？」

「ん、剣術？」

大次郎は視線をギーシュの後ろの方に向けた。そこにはギーシュのようには恥ずかしげに頭を掻いているものもいる。

キュルケは驚いた感じで、ギーシュたちをみた。

「え、ちょ、あなたたちどうしたの？一体どういう風の吹き回し？」

「驚愕」

「タバサどん。それはいくらなんでも失礼では……」

キュルケとタバサが驚くのも無理ない。貴族、ましてやトリステイン貴族が進んで剣を学ぼうとする者はまずいないからだ。貴族主義の強いトリステインにおいて、自分から剣を学ぼうとするものはまず、晒いの対象にされる。それがこのように頼んできたのだ。驚かすにはいけない。

「ははは……。まあ、そう思われても仕方ないね。僕らだって、昨日までは剣を持つのは貴族じゃない。って思っていたけど……」

「

そこでギーシュがもったいぶり、

「昨日のミスタ・グランのゴーレムを瞬時に切り裂き、十をも超えるゴーレムをまるで稲妻のような速さで！そして炎のように激しい剣戟で倒したあの強さ！僕はそこに魅入られてしまったのだ！」

ギーシュは造花を右手で振りながら、演説を始める。大次郎はそれをちよつと真剣な顔で聞き、タバサとキュルケは相変わらず呆けた顔をしている（タバサは無表情だが）。

ギーシュの演説を聴き終わり、大次郎はしばし、沈黙を続けた。そしておもむろに、

「……三つ、誓え。そしたら教えちやる」

「ああ、誓うとも！」

「まず、一つ。弱気を虐げるな。こいは昨日のおまんなら意味がわかるじゃろ」

「あ、ああ、わかるよ」

大次郎の言葉にギーシュは苦い顔になった。昨日のグランにやられたことを思い出したのだろ。そして二つ目

「二つ。ちゃんと稽古についてこい。おいは相手が身分が高いからゆつて、手加減するつもりはなか。殴ることも蹴ることもあるじゃろうし、木刀で打った叩くこともある」

「もちろん！僕は平気さ！」

ギーシュの後ろにいる生徒たちも力強く頷いた。決心は固いらしい。そして三つ目。

「そして三つ目……こいが一番重要じゃ」

大次郎は真剣な目で語る。ギーシュはもちろん、キュルケやタバサまでもが唾を飲み込んだ。

「野太刀自顕流は確実に相手を斬り殺せることができる……もしこんなかに、遊び半分のが居ったら今すぐここから去れ」

剣術は遊びではない。古来、剣術は戦場でいかに生き残るために、

いかに主君を守るため、試行錯誤のなか生まれた技術だ。これは他の武術にも該当する。

聞かれたギーシュは、フツと微笑み、

「ふ、愚問だね」

「ほう、なぜ？」

大次郎はギーシュに聞き返す。なぜ愚問なのか？それが聞くためだ。

「……僕は今まで、魔法ができれば強いと思っていた。でも、君の戦いを見て考えが改まったんだよ。魔法だけでは勝てないと」

魔法だけでは勝てない。貴族が口にしていい言葉ではない。貴族とは魔法が使えるからこそ最強。しかし、ギーシュたちは大次郎の戦いでその考えが間違えと気付いたのだ。

「確かに、魔法は強力だ。でも、精神力が切れれば魔法は使えなくなるし、杖を失くせばメイジは平民と変わらないよ。それにいくら強力とはいえ、敵味方入り乱れているとほとんど使えないしね。魔法が使えないとき、魔法の代わりに使える牙……つまり武器を使えるようにしたいんだ。そうすれば、いざと言うとき守りたいものを守れるからね」

大次郎はギーシュの目を見た。そこには淀みのない、まっすぐな目だ。

「（こいつは間違いなく強くなる）」

そう思った。後ろに控えるもの達の目も見る。みんな真っ直ぐない

目をしている。

「よか、こん、弱い男でもええんなら、幾らでも教えちやる」

「ありがとう！感謝するよ！」

ギーシュは手を差し出してきた。これが握手だということは大次郎は知っていた。以前、坂本龍馬に「これが外国の挨拶ぜよ！」と言って、手をガツチリ握ったのだ。さすがの大次郎は呆気に取られたが、すぐに本来の気さくさを出し、龍馬と握手を交わした。

「そういえば、まだ互いにちゃんと挨拶をしちゃらんかったのう。おいは高倉大次郎じゃ」

「僕はギーシュ、ギーシュ・ド・グラモンだ」

ギーシュの後ろにいる生徒たちとも握手を交わす。

「そういえば、さきほどは何を悩んでいたんだい？」

「ん？ああ、実はのう……………」

ギーシュに先ほどのことを話す。稽古に使ったための道具のこと。自分の刀が刃毀れが激しいため、新しい刀が欲しいこと。すると、ギーシュはしばらく考えた後、

「うむ……、刀の方は……ちょっとキツイかもね。……でも稽古具のほうは安心したため！それらは僕らがどうにかしよう！」

「お？ほんまか？」

「ああ、もちろんだ！それなら使用人に頼んで……」

ボゴッ

大次郎はギーシュの頭を殴った。もちろん拳骨で。

「い、痛いな！！急に何をするんだい！？ダイジロウ！！」

「アホ！使用人じゃなく自分達でとってこんかい！」

大次郎はギーシュにクドクド説教を始めた。

曰く、そっちのほうが自分にピッタリの木刀が作れるや

曰く、そっちのほうが稽古具に愛着がわくのだの、

曰く、自分達で作ったほうがやる気も出る……。

等々、色々説教をして説き伏せた。ギーシュも周りにいる者もコクコクと頷いた。

「まあ、木はできるだけ硬いモンを選べ。そうしたほうが折れにくいからの。あ、あと木を伐り出す時は魔法は使うな。何も太い丸太みたいな木じゃなくてよか。木刀は自分の乳房の辺りの長さで、横木は長い木の束を……荒縄でええから止めるんじゃ。そいて股木で……」

「ま、まってくれダイジロウ。股木ちはなんだね？それに……」
食事をしながらだが、大次郎とギーシュは関係なく話しを続ける。
しかし、やはりと言えはいいのか……。実物を見せないとわからないようだ。

大次郎は腕を組み、しばらく考え、

「うむ……。そうじゃのう。よし、おいがこれから林に行つて木を伐り出してこよう」

「そうしてくれるのは嬉しいけど……。授業はどうするんだい？君はミス・タバサの使い魔だし」

「いや、おいは授業を受けてもさっぱりわからんからのう」

大次郎は授業を受けたとしてもチンプンカンプンなのだ。別に魔法は使えないし、自分には無縁のものなのだ。ギーシュは苦笑するしかない。

「まあ、そういうわけじゃから、タバサどん。ちと近くの林まで……。あれ？タバサどん？なげに杖を振り上げて……。うご！？い、痛い！！タバサどん、そ、それは痛い……。ちよ、ま、その尖つてる部分はさすがに……。うぎゃあああああつ！」

大次郎はタバサに話しかけるも、なぜか機嫌の悪いタバサに杖攻撃を受けた大次郎は、しばらく殴られた後止めの突きを食らい倒れた。そしてタバサはそのままさっさと食堂を出て行った。
キュルケが呆れたように大次郎を見て、

「はあ……。まあ、いまのは大次郎が悪いわね。明らかに」

「お……。おいが何をしたというんじゃ……………」

「…………それは自分で見つけるのね」

キュルケは食べ終わったのか、席を立ち教室へと向った。タバサが怒った理由……。まあ、わかる人はわかるかも知れないが、ようは大次郎がタバサそっちのけでギーシュと話をしていたからだ。

「う、う…………何かなんだかわからんが…………。とにかくこれから近くの林にいつてくるわい」

「あ、ああ、済まないね…………。ところで大丈夫かい？」

「な、なんとか」

そういつて大次郎はよろよろと、食堂から出て行つた。ギーシュや大次郎に稽古を頼んだ人物達はその場で…………、

『なぜ、あんなに強いのにミス・タバサの攻撃が避けられないんだろっ？』

それははたしてなぜか…………？それは、本人すらわからない。

第七話（後書き）

次回に続きます。

第八話（前書き）

初日後半です。どうぞ。

第八話

くく 近くの林くく

「く……まだ腰が……」

大次郎は痛む腰を左手でさすりながら、右手に持った鉋（薪割り場のを拝借）で邪魔な草や蔓を切り開いている。

「しかし、なぜにタバサどんは怒っていたのじやろうか……？」

未だ原因がわからない大次郎。大次郎は、自分のことに関してはものすごい鈍感なため、なぜにタバサが怒っているのかわからないのだ。大次郎はタバサが怒った理由を考えながら、ちょうどいい木を探している。

「ユスがあればええんじやが……なさそうじやのう」

ユスとは野太刀自顕流においては最高に木刀にあつた材質だ。現在は確保が難しいため、櫟や椿などの木が代用されている。しばらく大次郎が歩いていると、ちょうどいい木を見つけた。

「お、こいは櫟か？ ちょうどええのう」

大次郎は目の前に群集している櫟に近づき、ちょうどいい太さと長さの櫟を探した。

「む……、こいが中々ええのう」

そのうちの一本が気に入ったのか、木の根元に鉋を当てて何度か叩きつける。何度か叩きつけた後、その檜は切り取られた。

「長さもちょうどええし、太さも合格じゃ」

長さは大体切先から柄頭が自分の乳房のあたりがその人物にちょうどいい長さだ。

大次郎はその後も横木のための木を切り出す。そのときだ、

「へぶしゅ！むにゃむにゃ・・・・・・・・・・」

「うごわ！？」

どこからともなくくしゃみ（というか突風）が聞こえたと思ったら、急に吹き飛ばされた。今日はよく吹っ飛ばされるのう……。思いながら、大次郎が感慨に更けていたが、

「て、感慨に更けてる場合じゃなか！！第一なんじゃ！？くしゃみの癖に突風が飛んでくるとは・・・・・・・・！！」

何がむにゃむにゃじゃ！と、キレ気味に辺りを見回す。すると、

「む・・・・・・・・？なんじゃあの蒼いのは・・・・・・・・？」

林の隙間からチラチラと蒼く光っているものが見える。なんだろうか？

好奇心の塊みたいな大次郎はすぐに近づいて、確認にいった。

「こいは……また……」

しばらく歩き、見つけたもの。それは、

「ん〜、もう食べられないのね〜」

「……巨大なしゃべる蒼い竜、つまりシルフィードだ。大次郎はまだシルフィードと面識がないため、まだ知らない。」

「ほう……こいは珍しかぁ生き物じゃ……」

しかし大次郎は竜とわかってない、大次郎が知っている竜といえば、もつと蛇のような体をしている。

大次郎は興味深くシルフィードの周りを回った。

「くんくん……ん〜？お姉さま？」

顔の位置に來ると、鼻をヒクヒクさせて寝ぼけ眼でシルフィードは目を開けた。

「きゅい。お姉さま、私お腹空いた！お腹空いた！だからお肉頂戴！ーるる」

シルフィードはどうやら大次郎についていたタバサの匂いに反応したか。急に起き上がり、食事を要求し始めた。

「……が、

「きゅい？・・・あなた誰？」

そこにいたのは、見た事もない服を着て、奇妙な剣を腰に差している男だった。

「え、あゝ、おいは高倉大次郎じゃ」

「あ、ご丁寧にどうもなのね。私はシルフィードね。きゅい」

「「・・・・・・・・」」

互いにしばしフリーズ。最初に目を覚ましたのはシルフィードのほうだった。

「（きゅ、きゅい！挨拶してる場合じゃないのね！お姉さま以外の人と喋っちゃったのね！）」

そう、シルフィードはただの竜じゃない。風韻竜と呼ばれる絶滅したとされる古代種の一種なのだ。もし、バレたら・・・。

アカデミーに連行。

←
解剖・薬物実験のフルコース

←
DEAD END

←
お肉が食べられなくなる

「（きゅ、きゅい！？大変なのね！！まだ美味しい物食べたいのね！！！！）」

死ぬことよりも、食べ物が食べれなくなることに恐怖するところは流石というべきか……。それよりもシルフィードはその頭脳（あるのか？）を生かして対策を練っている。

「（お、落ち着くのね！私の頭脳を生かせばこの場を乗り切れるはず！きゅい）」

シルフィードは頭の中で対策を練った。しかし、いい案が浮かばない。そこで自分が空腹であることに気づく。

「……………（じーーーーっ）」

「な、なんじゃ？急に見つめてきて……………」

大次郎は何やら嫌な予感がした……………まさしくそうなのだが。

「ここは……………仕方ないのね。背に腹は変えられないのね……………」

「え？ちょ？どついう……………」

ガブッ

大次郎が言い終わる前に、シルフィードは大次郎を頭から食べた。

～～使い魔の広場～～

使い魔の広場で、手に大量の肉を抱えてるタバサがいた。今はちょうど昼ごろ。どうやら大次郎が材料集めに夢中になっていて完全にタバサのことを忘れていたらしい。だから、タバサは今でもご機嫌斜めだ。

「・・・・・・・・」

その顔は無表情ながらも、ものすごい怒気を出しているのがわかる。実際、ここまでする途中大抵のものは道を譲ったぐらいだ。そんなタバサだが、彼女がなぜここにいるのか？それはもう一匹の使い魔で風韻竜であるシルフィードに餌を与えるためだ。タバサが口に指を当てて、指笛を吹く。しかし、こない。

「？」

タバサは不思議に思い、もう一度指笛を吹く。・・・・・・・・しかし、こない。普通なら

『きゅい！お姉さま！ごはん、ごはん！私お腹すいた！』

と、いつて現れるのに・・・・・・・・。タバサは不機嫌顔をさらに不機嫌顔にさせて、自分のシルフィードが寝床にしている林に向った。

～～林・シルフィードの寝床近く～～

タバサが森に入ること十分。彼女が変に伐採されている樫を見つけた。

「？」

首を傾げる。櫛の切り口を見た。何やら刃物で切った後だ。タバサは首を傾げながら辺りを見回す。

「（おそらく、大次郎がやったこと……）」

彼が林に行くと言っていた為、多分そうだろうと、確信した。同時に、シルフィードの住処の近くでもあると思い出した。

「……………」

まさか、一緒じゃないだろうか？と思いながら、タバサはシルフィードの寢床に向かった。

〳〵シルフィードの寢床〳〵

タバサがシルフィードの寢床に行くとシルフィードはいた……………が、なぜか縮こまって何か一生懸命に頭を動かしている。

「？シルフィード？」

タバサは不思議に思い、呼びかける。シルフィードはビクンと震えると、そのままの状態で、

「おへいふあま！？ふお、ふおうしふあのね！？（訳・お姉さま！？ど、どうしたのね！？）」

何やら口に咥えてるらしく、喋り方がおかしい。．．．なんだかタバタという音も聞こえる。タバサは怪訝な顔になり、覗き込もうとしたが、

「（チラッ）」

「（グルンッ!）」

「（バタバタ!）」

「（チラッ）」

「（グルンッ!）」

「バタバタッ!）」

おかしい．．．いつものシルフィードではない。そう思ったタバサはある作戦を思いついた。

「シルフィード。今日のお昼持ってきた。滅多に食べられないガララワニの肉」

もちろん嘘。今日持ってきたのはただの豚の肉だ。しかし、たとえ嘘でもシルフィードはバク．．．．．そういう嘘に引っかかりやすいため、ビクリと動いた。

「ふあ、ふあららふあに?（訳・が、ガララワニ?）」

「そう、しかも六十年もののガララワニの胸肉。普通に買うと十キ

口百エキューする」

「・・・・・・・・!!!!!!」

振り向こうとするが、振り向かない。ガラワニなんて滅多に食べられないのに、さらに六十年ものの肉ときた。しかし今振り向けば『口から飛び出している物体』を見られてしまう……。動かないシルフィドを見かねたように、

「そう……。いらないのなら私が一人で全部食べる」

「ああ、まつふえおふえふあま！ふあはしにもふようふあい！！（訳・ああ、待つてお姉さま！私にも頂戴！）」

グリーン！と振り向いた。それと同時に口に咥えてるものも発見。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・（汗）」

「・・・・・・・・（バタバタッ！）」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・（汗汗）」

「・・・・・・・・（バタバタバタバタッ！！）」

シルフィードの口から飛び出していたのは人の足だった。しかもここ三日で見慣れた足だ。

「・・・・・・・・大次郎？」

「・・・・・・・・！！！！（バタバタッ！！！！）」

どうやら声が聞こえたらしく、足だけ見える大次郎は両足を上下に振った。

そしてしばしの沈黙・・・・・・・・。

「お、おふえさま？こふえにふぁじふようが・・・・・・・・（訳・お、お姉さま？これには事情が・・・・・・・・）」

「エア・ハンマー」

「ギヤイン！！」

「ふごあッ！？」

タバサはエア・ハンマーをまるで右フックの要領でシルフィードの顎に叩き込んだ。そのままシルフィードは吹き飛ばされてしまった。その衝撃で、大次郎も一緒に吹き飛んでしまった。

「ぐは！？た、タバサどん！やはりおいになんか恨みがあるんかえ！？」

「・・・・・・・・ない？」

「だからなげに疑問符がつくんじゃ!？」

シルフィードの唾液でベツチヨリと濡れた大次郎はタバサと一緒に漫才をしていたが、すぐさま隣で目を回しているシルフィードを見つけて、

「・・・・・・（怒）」

ゲシッ!

「い、痛いよね!」

「なーにが、『痛いよね!』じゃ!?!こちらおまんの歯がちよつと腹に食い込んだじゃぞ!?!」

「確かに。別にわざわざ食べなくてもよかったと思う」

「うつゝ、でも知らない人に知られたからゝゝきゅい?」

二人に叱られながら縮こまっていたシルフィードはそこで不思議に思った。

「お姉さまとその知り合いなの?」

そこでタバサはあつ、という顔で頬を掻いた。

「きゅい?お姉さま?」

召喚されたとき、二人は面識があるはずだが、そのとき大次郎はどこののか戸惑っており、シルフィードはお腹が空いていたためお互いに気付かなかったのだ。

・・・結論、どっちも馬鹿だったということ。

「二人とも五月蠅い。静かに」

「こいが静かに・・・！」

「これが静かに・・・！」

「エア・ハンマー」

「「うぎゃあああああッ！！！！！！」」

大次郎、本日三度目のエア・ハンマーを食らった。吹っ飛ばされた大次郎は宙を舞いながら、

「ああ・・・、今日は厄日じゃ」

そう呟き。地面に落ちて気を失った。

くく時刻くく

「……ん？ここは」

大次郎がタバサの『エア・ハンマー』を食らい、気絶してかだいぶ時間がたった。

「起きた？」

こちらにきてまだ時間が立ってないが、聞き及んだ声が聞こえた。

「タバサどん？おまはん、なぜにここに？」

「その後、あなたとシルフィードが気絶したからそのまま見てた」

「……つまりは授業を休んだと？」

「平たく言えばそうなる」

大次郎はため息をついたが、それよりも嬉しかった。別に恋愛感情はない。しかし、嬉しかった。その嬉しいのはおそらく家族愛みたいなものだ。大次郎は思った。

「きゅい」。あ、あれお姉さま？それに……。誰だっけ？」

こ、こいつは。ズルツと大次郎は滑ってしまった。

「人のこと頭から食ったくせに忘れるとはいいい度胸じゃのう……。」「

「きゅ、きゅい！？そ、そうだったのね！あ、あれは悪かったのね……。」「

顔を伏せ、ちよつと目に涙を溜めている。大次郎はうつと、よろめいた。女にしても動物にしても、大次郎はそういった類に苦手なのだ。そしてすぐにそれを許してしまう。

「ま、まあ、次から気をつけるのじゃぞ……」

「わかつたのね」

そこで互いに改めて挨拶をすることにした。

「おいは薩摩藩士・高倉大次郎じゃ。今はタバサどんの使い魔をしちよる」

「私は風韻竜のイルククウ。今はお姉さまの使い魔でシルフィードなのね」

「ああ、よろしくのう。シルフィード」

「こちらこそなのね。ダイジロウ」

ここに一人の主のもとにきた一人と一匹の使い魔の友好が強くなった。

第八話（後書き）

どうでしょうか？何か誤字脱字とつがあらご連絡ください。

あと、みなさんにお尋ねしますが、この空白の一週間のうちに『タバサの冒険』を書く予定です（あくまで予定ですのでなくなる場合もあります）そこでアンケートを取りたいと思います。

？原作通りに翼人の話を書く。

？作者が考えたオリジナルの話を書く。

原作がよければ？を、オリジナルがよければ？のどちらかを選び、7月21まで感想にご記入下さい。

ご協力のほどをよろしくお願いします。

第九話

〱トリステイン魔法学院・早朝、ヴェストリの広場〱

空白の一週間（作者銘々）の三日目。まだ朝靄が広がるヴェストリの広場。その広場に数人の人が集まっていた。みな手には木の棒を持っている。そして彼らはその広場の中央に設置された三つの木の束・・・横木を見ていた。

「・・・・・・・・」

いや、正確にはそのうちの一つの横木の前にいる男に視線を集めていた。その男は周りの者と同じような木の棒、つまりは木刀を手に持ち、立っていた。

そして男はスツとしゃがみ、横木に一礼する。そして、素早く右蜻蛉の構えを取る。すると急に男の顔が陰しくなり、

「キエエーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」

猿叫一闪、横木めがけて袈裟に切り下ろす。パアン、と木刀は横木を激しく打ちつけられ、撓しならせる。そしてすぐさま左蜻蛉に構え、振り下ろす。

「キエエーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

パアン！パパアン！！！！

打ち終え、また右に構え振り下ろす。そしてまた右左右左右左。左右の蜻蛉から同じように袈裟を振り下ろす。

野太刀自顕流『続け打ち』

野太刀自顕流の基本稽古だ。横木の前に蜻蛉に構え、一気に振り下ろす。これを左右交互に行うのだ。初心者はもちろん、玄人もこの稽古をかかさず行う。なお、この際に横木を狙って打ってはいけない。この稽古はもちろんだが野太刀自顕流の剣は『地軸の底まで叩き斬る』ことが大切なのだ。ゆえに稽古を行う際は、横木の下、つまり地面に打ち込みように打つのだ。横木はあくまでそれを止めるためのものだ。過去にはこれを『朝に三千、夕に八千』を毎日行うものもいたらしい（現代は社会的や環境的にやりにくい）。

「チエーイツ！……！」

数十振りして男は最後に右蜻蛉から一撃を繰り出す。よほど強かったのか、横木は今までの中で一際高く跳ね上がった。そして、男はまたしやがみ横木に一礼した。立ち上がり数歩下がり、くるりと後ろで見ていた『門下生』たちに微笑みかけ、

「どうじゃ？こいが野太刀自顕流基本の技『続け打ち』じゃ」

全員目を見開いている『門下生』のうちの一人である金髪の少年はすぐに目覚めたように手を上げ、

「す、すごいよ！ダイジロウ！前見た技みたいな地味だけど迫力は変わらないね！」

「はは、まあ地味なんはしょうがなか。こいは稽古用の技みたいなもんじゃからの」

ダイジロウ、と呼ばれた男は苦笑しながら金髪の少年、ギーシュに返した。しかしギーシュは興奮して捲くし立てる。

「稽古用とはいえ、すごい実戦的だよ！狭い部屋の中ならあの駆け寄って斬る技よりかなり使えるよ！」

大次郎は少し面食らった。確かに続け打ちは稽古用な技ではあるが『稽古用の技』ではない。野太刀自顕流の技はそれすべてが実戦なのだ。続け打ちはその場から動かないだけで『一撃必殺』の斬撃を生み出すにはかわりはない。ギーシュのいった様に狭い部屋なら動かずに一撃必殺の攻撃を繰り返す。これはこれで恐ろしいことだ。

……案外考えてるんじゃない。

「よし、ほいじゃ次はおまんらがやってみい」

「ああ、もちろんだとも！」

まずはギーシュが横木の前に立つ。ほかの横木のもすでに人がついている。

「ええか？さっきも言ったが横木を打つんじゃないか、その下の地面を切り割る様に振り下ろすんじゃない。だからと言って力任せに振り下ろしたらいかん。刃筋を通しながら振り下ろすんじゃない」

「ああ、わかってるとも！それじゃ……」

ギーシュは大次郎がやったように蹲踞をとる。しかしたどたどしい。ほかの二人も似たような感じだ。そして立ち上がる。

「おつとと」

ふらついた。まあ、足腰がちゃんとしていればそうはならないが、生憎ここにいるのは今までまともに体を鍛えたことのない貴族の子供たちだ。そうなくても可笑しくないと苦笑して見守る。そして最初に木刀を振り下ろしたのはギーシュだった。

「きえー！ーうおッ！！！！？？？」

横木に木刀を振り下ろすし、木刀が横木にあたる。ギーシュはそのまま木刀を話してしまった。そのまま手を押さえ、その場に蹲る。

「ど、どうしたんだギーシュ！？」

「手、手が……」

「手？」

急に蹲ったギーシュにマリコヌルをはじめとした生徒が近寄った。

ギーシュが手がといたので怪訝な顔になりギーシュの手を見ると、

「な、痙攣している？」

「なんで？」

ギーシュの手は小刻みに震えていた。しかし、周りのものは不思議でしようがない。なぜいきなり蹲ったのか？その場に大次郎がさも

当然のように現れ、

「当たり前じゃろ。束ねてあるとはいえ木の束を木刀で全力で叩くんじゃ。逆に今まで体を鍛えなかった自分に叱咤するええ機会じゃ」

「で、でもダイジロウは思いつき叩いていたじゃないか」

「おいおい、こっちは五歳のときからこん稽古をとるんじゃぞ？もう慣れてしまったわい」

続け打ちに限らず、野太刀自顕流の技は大抵は横木に叩き込む。打ち込みが終わった後、あまりの衝撃でしばらく文字がかけなくなる。

「まあ、ようは慣れじゃ慣れ。何度も何度も繰り返し、初めて成功する。こいは剣術に限らずおまんらの魔法も同じじゃろ？鍛えないのと鍛えるのでは成長の度合いが違うじゃろ」

「確かに……そうだね」

その場の全員が頷いた。おそらく前までなら全員が全員『貴族の魔法と平民の剣術を同じにするな！』と叫んでいたところだが、大次郎に剣術を教えてもらい際に大次郎に言い渡されたことがあったのだ。それは、

『おまんらの常識。つまり貴族の常識は捨てる。こいから教えるものにそげなもんは必要なか』

最初言われたときはみんな目玉が飛び出るかと思ったが、この男が

いうと妙な説得力がある。全員がその場で二つ返事のように頭を縦に振った。

そしてそれが行われたのは昨日のこと。大次郎が集めて作った横木と木刀を参考に森に木を伐りにいった。そしてその際の伐採は一切の魔法の使用禁止だった。だからみんな手に鉋やら縄やらを持って（マリコヌルはなぜか自分の体を縛っていた）森に入っただのだ。

最初こそ不満はあったが、木を集めているうちにそんなの吹っ飛んでしまった。そして気づいたのだ。楽しいと、しかもとてつもなくさらにそれを組み立てるのも楽しいと思ったのだ。ギーシュなどは鉋で器用に犬を作ったのだ。

余談だが、一緒にいた眼鏡をかけた少年、レイナールは工作に目覚め将来有名な彫刻家になったのはまた別の話だ。

～～～教室～～～

「う、うう……………」

「大丈夫かえ？ギーシュ」

「正直……………キツイ」

隣に突っ伏しているギーシュを苦笑しながら大次郎は見つめた。

「すごいことになってるわね、ギーシュ……………周りの人もそうだけだ」

「屍累々」

大次郎の隣に座っているタバサとキュルケが教室を見渡す。そこには机に突っ伏し、呻いている者もいれば痙攣しているもの。中には寝ているものもある。そのほとんどが今朝大次郎が稽古を教えた者たちだった。

「まあ、最初はみなこげんもんじゃ」

大次郎は自分が入門したときのことを思い出していた。今となつては細く、短い木刀をふらつきながら構え。横木を打ちまくり、手を痙攣させて横木の前に蹲ったこと。疲れて家に帰ってすぐに泥のように寝たこと。次の日の朝、筋肉痛でまともに歩けなかったこと。おそらく、いま自分の目の前にいる『門下生』が強くなつていくのが楽しみではない。

「まあ、最初はそんなもんじゃ。こいからが本番じゃからのう。気張れよギーシュ」

「あ、ああ・・・もちろん・・・さ・・・くう」

「あ、寝ちゃった」

起こそうとしたが、爆睡していて起きなかった為ほっとくことにした。しばらくしてシャブルースが現れたので授業が始まった。

～～アルヴァーズの食堂～～

「ダイジロウ」

食事をしながらタバサはナイフとフォークでステーキを切り分けながら、ナイフとフォークでステーキをスプラッタなものを作っている大次郎に聞いた。

「ん？なんじゃ？」

ステーキをなぜか挽肉みたいな状態にしている大次郎はタバサに聞き返した。

「あなたは剣以外の武器って使える？」

タバサは以前の決闘で大次郎が槍を振り回していたことを思い出したのだ。無茶苦茶ではあったが槍は使えるのだろうと思ったからだ。

「ん、まあ大体の武器はできるが……」

大次郎は怪訝な顔をしながら答える。

大次郎はほとんどの武器を使えるといっても過言ではない。刀剣はもちろんのこと、槍、薙刀、柔術、鎖鎌、弓矢、分銅鎖、手裏剣、棒術、はたまた鉄や鉄扇などの暗器などといった類の武器も使える。刀剣以外はほとんど我流のためそこまで得意ではないが、戦闘では困らない程度の腕前だ。

なぜ剣客である彼がこんなにも多種多様な武器を扱えるかというところ、彼曰く『実際の戦闘では何が起こるかわからんからな』だそうだ。もちろんそんなことを知らないタバサは話を続ける。

「あなたが知っている武器の中で私が見えるような武器はある？」

「？どういう意味じゃ？」

やっと切り分けた挽肉（という名のステーキ）を食べながら大次郎が聞き返した。

「私も何か教えてほしい」

「おい．．．がかえ？」

コクツと頷くタバサ。それを見てううむ、と唸る大次郎。正直な話、大次郎が知っているのは暗殺術に近い。護身としても使えると思うが．．．．どうだろうか？

唸る大次郎とそれを見るタバサを見てキュルケがタバサに加勢した。

「あら、いいじゃない大次郎。この子だって教えてって頼むこともそうなのよ？」

「キュルケどん。しかし．．．．」

「．．．．」

じーと、大次郎を見つめるタバサ。それを見てうつと、なにやら罪悪感が噴出す。無表情、無感情な視線だが女子の視線を真に受けるのはものすごい辛い。

「．．．．」

「あ、えーと、その」

「．．．．」

「あ、ううむ．．．」

「・・・・・・・・・・」

「うう・・・・・・・・わかった」

「よかったわね♪タバサ」

「（コク）」

嬉しそうに頷くタバサ。それを見て、嬉しそうにタバサの頭撫でるキュルケ。そしてどうするか？と頭を捻る大次郎。

「まあ、それは良しとして・・・・・・・・ダイジロウ」

「なんじゃ？キュルケどん」

キュルケの呼びかけに反応する大次郎。

「どうやったらステーキが挽肉みたいになるのかしら？」

キュルケが指を指しながら言った。大次郎の前にある皿にあるものだ。

「いや、どうもこの『ふおーく』と『ないふ』とやらの使い方がイマイチ・・・・・・・・」

大次郎は頭を掻きながら答えた。大次郎ははまだ西欧の食器が苦手なのか、肉、魚、野菜、デザート、関係なくスプラッタな物を作り上げているのだ。

「ダイジロウ・・・ちようつと食器の使い方を身に着けないとね」

「・・・はい」

やはり西欧の食事作法はわからん、と一人愚痴り後で箸を作ろうと決心した大次郎だった。

〳〵放課後・ヴェストリの広場〳〵

「さて・・・どがいするか・・・」

大次郎は木を叩く音と猿叫、そして呻き声をBGMに目の前に立っている小柄な己の主を見やる。

「やはりここは妥当に短刀じゃろうか？・・・刀は無理じゃろうな」

タバサはかなりの小柄だ。大次郎は身長170センチ。大次郎がいた世界では150センチが平均身長だったため大次郎はかなりの長身に入る。余談だが彼と同じ薩摩藩士である西郷隆盛は身長180センチという巨漢だったと言われている。おそらく刀を振らしたら刀に振らされるだろう。

「何でもいい。あなたが知っている武器の中で、私が使えそうな武器を教えてくださいればそれでいい」

そういう注文が一番大変なのだが・・・と思ったが、それを振り払う。まあ、別にいいやと思った。

「ふむ、そいじゃ短刀を……ん？」

考えた末、大次郎はタバサに短刀を教えようと思ったが、そこで見に入るものがあつた。それはタバサの杖だ。

「タバサどん。すまんがその杖を貸してくれんかえ？」

「？ん……」

タバサはちよつと怪訝な顔をして杖を渡した。大次郎はその杖を握り、確かめる。

「（ふむ……。握りは悪くない。そいに強度も十分じゃ。長さもおいには短いがタバサどんには十分なぐらいじゃ）」

大次郎はそこで考えた。この杖で杖術を教えられるのではないかと。

「うん、決めた。タバサどん、おまはんには杖術と短刀術を教えよう」

コクリと頷くタバサ。そして大次郎とタバサの稽古が始まつた。

〳〵二時間後〳〵

「（こいはなかなか……）」

大次郎はさきほどと比べて減つた猿叫と増えた呻き声をBGMに夕

バサと実戦的な訓練をしている。教えたのはごくごく一般的な技法と応用技だ。

「・・・・・・・・おっと!!」

タバサの杖が横薙ぎに振られる。それを屈んで避ける。ブンツ!という音が頭の上から聞こえた。そしてタバサが近づき、左手に持った木製の短刀を突き出してくる。

「ふんっ!」

大次郎はその突きを避けて、手に持った小太刀位の長さをした木刀をタバサの肩口目掛けて振り下ろす。

「・・・・・・・・!!」

タバサはすぐさま横っ飛びに飛ぶ。そして地面を一回転して立ち上がる。両手で杖を中段の構えを取り構える。口には木製短刀を咥えている。

大次郎は正直にタバサが強いと思った。最初、杖術を教えたのだが思った以上に上手だったので舌を巻いてしまった。

「ふむ・・・・・・・・なかなかじゃのう・・・・・・・・が」

大次郎は小太刀を構え、走り出す。タバサはそれを迎撃しようと杖の先端を大次郎に向けたが、

「ふんっ!!」

「!？」

小太刀を投げつける。タバサはもちろん驚いた。己の唯一の武器を投げつけるとは普通は思わない。しかし、大次郎は投げつけた。タバサは咄嗟に杖で飛刀してきた小太刀を払う。しかしそれで隙が出来てしまった。

大次郎は即座に近づき、タバサの上着の襟と袖を掴んだ。タバサは杖を捨て、口に咥えた短刀を掴み切りつけようとしたが、遅かった。

「でりゃああつ！！！！！」

背負い投げ。知る人ぞ知る柔道の有名な技だ。

「！？」

タバサはまさか投げ技が来るとは思わなかったらしく、受身を取るのを忘れてしまった。

ドンッ

もちろん大次郎はかなり力を抜いている。しかし受身を取らなければそれなりに痛い。

「うっ」

「大丈夫かえ？タバサどん」

「……投げ技は聞いてない」

「聞かれんかったからの」

恨めしげにこちらを見るタバサ。大次郎はさも当然という風に腕を組みながら立っている。そしてそのまま地面に座る。

「ええか？タバサどん。実戦では何が起こるかわからん。さきほどのように武器を投げつけてくるかもしれんし、組み打ちにくるやもしれん。はたまたもつと別の方法でくるやもしれん」

大次郎は過去に同じように刀を投げつけてきた相手の刀を払った瞬間、吹き針で目を潰されかけたことがあるのだ。幸いそのときは助かったが、それからというものの、大次郎はその技を参考に同じような技を作り上げたのだ。

「今度それも教えてほしい」

「ん……機会があればの」

正直、これは教えようとは思ってない。これは相手を確実に殺せる技だ。さっきの投げとて本来は……。

「まあ、そいはまた別の機会にして……おいはしばらく稽古をしとるが……どがいする？」

「見てる」

大次郎はそうか、といって立ち上がり愛用している木刀を握り、横木に打ち込んだ。

「キエエーーーー！！！！！！」

ただただ、一撃一撃に『必殺』の思いを込めて打ち込む。そして打ち込みながら大次郎は疑問に思った。

「（なぜ、タバサどんはあそこまで力を欲するのだろうか？）」

とてもただの女子が欲するものではない。ましてやあの貪欲さ・・・何か裏があるような気がした。聞こうかと思つたが、やめた。人には聞かれたくないことの一つや二つはある。大次郎とて似たようなものだからだ。

大次郎はその疑問を振り払うかのように、最後に刀を高らかに上げ、

「キエエーーーーッ！！！！」

一撃。真剣ならば間違いなく人を両断する一撃を叩き込んだ。百本ほど打ち込んで、大次郎は蹲踞して横木に一礼した。

そしてタバサの元へと向かい、座っているタバサに手を差し出し、

「部屋へ戻ろつかえ、タバサどん」

差し出した手をちょっと驚きながら見たタバサだが、すぐさま顔を軽く染めてその手に手を置いた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

二人はそのまま部屋へと帰っていった。

そして大次郎は知る。なぜタバサが力を求めるのか？なぜタバサがあそこまで無表情で無感情なのか？その理由を……。

第十話

くくトリスティン国境近く上空くく

トリスティン国境近く上空にて、一匹の風竜が飛んでいた。そしてその風竜に二つの影が動いていた。

「すごいおう！！まさか鳥のように空が飛べるとはのう！！」

「当たり前なのね！！私は偉大なる韻竜なのね！！褒め称えるがいいのね！！」

「・・・・・・・・」

空を飛んでいる風竜は風韻竜であるシルフィード。終始無言で本を読んでいるのはその主であるタバサ。そしてシルフィードと話しているのはこれまたタバサの使い魔である高倉大次郎。大次郎は初めて空を飛んでいることに終始感動している。

「うむ！おまんはすごい竜じゃ！おいの国とは違う竜じゃがすごい竜じゃ！」

「きゅいきゅい！もつと褒め称えるのね！」

「おお、おまんはすごい・・・」

ガチッゴチッ！

「「ぎゃふんッ!」「」

「うるさい」

「きゅい、いきなり殴るなんて酷いのね!そう思うでしょ!?!大次郎?」

「・・・・・・・・!!(ボタンボタン!)」

「きゅい!?どうしたのね!?大次郎!?!」

「ひ、ひたはんら(し、舌嚙んだ)」

「・・・・・・・・(ふう)」

タバサは正直後悔していた。大次郎を連れてきたことを…………。

〳〵時間は一時間前に遡る〳〵

タバサの部屋で小太刀の手入れをしていた大次郎は部屋の窓の枠に止まっている梟を見つけた。

「ん?なんじゃこん梟は?」

小太刀をしまい、大次郎は右手で顎を擦りながら梟を見つめた。すると、横からタバサが現れ、

「・・・・・・」

「？」

タバサは梟の足についていた物を外した。すると梟はそのまま飛び立っていった。大次郎はタバサの手元を覗き、

「なるほど、伝書鳩ならぬ伝書梟か」

伝書鳩なら大次郎も幾度となく使ったことがある。任務の際いち早く情報を手に入れるのに便利だからだ。

「なんて書いてあるんじゃない？」

大次郎はタバサの手元を覗き込んだはいいものの、こちらの字が読めないためタバサに聞いたが、

「なんでもない」

そういつて手紙を懐にしまつとタバサは杖を握り、なにやら支度を始めた。

「？どこかに行くのかえ？」

「あなたには関係ない」

その言葉にちよつとムツとした大次郎は、タバサに近づき、

「関係ないは酷いんじゃないか？おいはおまはんの使い魔じゃぞ？」

タバサの眼前でおのれの左手を見せる。その手には『イーヴァルデ
イ』と古代ルーン文字が書かれていた。タバサは相変わらぬ無表
情だが、どこことなく戸惑いの色がある。

「それでもあなたには「関係ない、などとは言わせんぞ」……………」

「

先に言われる前に遮る大次郎。そして珍しくタバサが困惑した顔に
なった。

タバサは見られたくないのだ。己の『裏の顔』を。知れば嫌われる
と思ったからだ。だから、同伴を断った。

「…………何があるかは知らん。じゃっどん、何があってもおい
はタバサどんを裏切らん」

タバサは顔を上げた。そこには真剣な顔をした大次郎がこちらを見
ていた。真っ直ぐな、純粋な目だ。絶対に裏切らない目。自分のこ
とを信頼している目だ。タバサはしばらくその目をしばらく見て、
決断した。

「わかった」

「ふむ、ではいこうか」

大次郎は立て掛けてある刀を腰に差してドアに歩いていった。しか
し、タバサは窓のほうに歩いていった。

「なぜに窓？」

「こっちのほうが早い」

タバサは窓を開けて口笛を吹いた。するとどうだろうか？バツバツサと音を鳴らして窓の外に、

「きゅい〜」

「おお、シルフィード」

大次郎は窓の外にいるシルフィードを少し驚いたように見ていた。タバサはシルフィード目掛けて窓から飛び降りた。大次郎もそれに習って飛び乗ると、

「きゅい！〜！」

重かったのか、シルフィードが変な声を出し大次郎を睨んだ。

「ん？悪い悪い。重かったかのう？」

「きゅいきゅい！」

どうやら重かったらしい。なにやら抗議するようなことを言っているのは確かだろう。

「それよりも、行つて」

タバサはそんなものを無視するかのようにシルフィードに指示を出した。シルフィードは少し不満顔をしながらもそのまま飛び立った。

くくガリア国境近くくく

「きゅいきゅい！お姉さまおなかすいた。おなかすいた」

さつきから喋りつ放しのシルフィードは飛んでいるのも相まってか、食事を要求しだした。しかし、タバサはまったくのがん無視。大次郎はそれを苦笑しながら見ていた。

「タバサどん、シルフィードが飯を要求しているが……」

「……」

ちらつと、大次郎を見て、ふう、とため息を吐いてシルフィードに言った。

「城に着いたらご飯上げる。それまで我慢」

「きゅい、今食べたい」

「我慢」

シルフィードの要求をあつさり切り捨てた。シルフィードはなにやらブツブツ呟いていたが、その立派な翼を羽ばたかせて城へと向かった。

くくプチ・トロワ中庭くく

「ほう……こいは変わった城じゃのう」

大次郎は城をまじまじと見た。城にあまり興味はないが、大次郎が知っている城とかなり違うので興味が沸いた。なにより、

「城の城壁が青いとはのう」

城壁は白。それが大次郎が知っている一般的な城壁の色だ。しかし、どうだろうか。大次郎の目の前にある城は城壁が己の主の髪のように青いのだ。

しばらくすると、一人の衛士がやってきて

「お帰りなさいませ、シャルロット様」

敬礼していった。しかし、大次郎はそこで疑問に思った。

「（シャルロット？タバサどんのことか？）」

どことなく偽名ではないかとは思っていた大次郎だが、異国の文化を知らないためそれが本名だと思っていた。しかし目の前の衛士は『シャルロット』と確かに言った。

「タバサどん。シャルロットとは……」

聞こうとしたが、タバサはそのままスタスタと歩いて行ってしまった。大次郎は慌ててその後を追った。

〳〵プチ・トロワ 宮内〳〵

タバサを先頭に、大次郎はきよろきよろと周りを見ながら歩いていく。そしてある部屋の前で止まった。

「ん？なんじゃこいつら？」

大次郎は目の前に立つ二人の衛士を眺める。最初はこの城の主の家来みたいなものか？と思ったが、なにやら人らしい気配がまったくない。瞬き一つしないのだ。おまけになにやら大次郎を見て動こうとしない。

「なんじゃ？喧嘩売っちゃよんのか？」

大次郎は比較的穏やかな性格だ。しかし、如何せん、短気なところがある。だからこのように意味もないように見られているとムカムカするのだ。

衛士は答えず、ただじつと見つめるだけだった。

「何か言ったらどうじゃ？」

「・・・」

それでも無言を貫く衛士に痺れを切らしたのか、大次郎が一步踏み出そうとしたら、

「彼は私の使い魔。問題ない」

タバサがいきなり衛士に話しかけた。大次郎はタバサがなにやら取り次いでくれているのがわかったので、そのまま引き下がった。

「・・・」

二人の衛士は交差させている杖を解いた。どうやら説得は成功したらしい。

「すまんのタバサどん」

「……かまわない」

大次郎はちよつと怪訝な顔になる。さきほどからタバサの態度に木になったからだ。まるで知られたくないことを暴露されるような、そんな顔をしている。そして部屋の中に入ろうとしたら、

「タバサどんっ!!」

なにやら飛来してくるものを見た大次郎は、タバサを抱え横っ飛びに飛んでかわした。元いた場所からバシャバシャッという音が響いた。

「何避けてんだい!!」

怒鳴り声を聞いて声をしたほうを向くと、そこにはタバサと同じく蒼い髪をしたタバサより年上だと思われる女性がいた。

大次郎は女性の言い草にムカついたのか、立ち上がり

「なにをするんはこっちの台詞じゃ!!いきなり物を投げつけるとはなにごとぞ!!」

大次郎の通った声が当たりに響く。その気迫と声量に驚いたのか、蒼髪の少女はビクツと軽く震えたが、すぐに立ち直り、

「ふ、ふん!うつさいわね!その小娘に何をしようと私の勝手だろ!!それよりもあんたはなに者だい!?!」

少女は驚いたが、威厳を出しながらすぐに切り返す。『王女』としての彼女だからこそ出来る芸当だろう。しかし、だからといって大次郎は引かない。

「おいは薩摩藩士・高倉大次郎じゃ！いまはゆえあつてタバサどんの使い魔をしちよる！！」

「・・・はあ？」

王女は呆気に取られた。いま目の前にいる男は聞き間違えていなければ、自分の従姉妹の使い魔だと言った。しかし確か彼女には風竜がいたはず。今日だってそれできたはずだ。

「ちよつと待ちな。あんたがその人形娘の使い魔あ？笑わせるんじゃないわよ！！」

「ちゃんと証拠もあるぞ！！こいが証拠じゃ！！」

大次郎は己の左手を見せた。そこには確かにルーン文字で刻まれた手がある。王女は一瞬呆けた顔をして笑った。

「ははははっ！！！！ちよつとあんた達聞いたかい！？あのガーゴイルが平民を、それも見たことのない服を着た蛮族を召還したわよ！！ほほほっ！！ほら、あんた達も笑いなさい！！」

そういわれ、仕方なくといった感じで周りに控えていた者達が笑う。大次郎はさらに腹を立てて、腰の刀に手を伸ばし、静かに呟いた。

「それ以上、おいの主を侮辱するならば・・・・・・斬る」

周りは一瞬にして静まった。そして、全員が全員冷や汗を出す。大次郎は意識して出している以上の殺気を無意識に垂れ流しているのだ。その殺気にやられ、気絶しているものもいるぐらいだ。その大次郎の鞘を握っている手にぽんつと置かれた手がある。その手はここ数日で見慣れた己の主の手だ。

「・・・タバサどん」

「私は大丈夫。だから心配しないで」

タバサの目を見て大次郎は殺気を弱める。そして完全に殺気を消したところで、大次郎は入り口近くの壁に寄り添い玉座にいる少女を見る。

「今回はタバサどんに免じて見逃しちやる・・・じゅが、次はなか」

しかし、玉座の少女はもう大次郎を無視することにしたらしい。そしてタバサと王女のやり取りが始まった。

「（なるほど、あん小娘はイザベラちゅうんか・・・。しかし・・・）」

大次郎はもう一度イザベラとタバサを見た。そこではイザベラがタバサにいろいろと暴言を吐いている。しかし時折、

「まあ、あんたはよほどのことがない限り、死なないからね」

だの、

「しかしちよつとは喋ったらどうなんだい？これじゃ私がバカみたいじゃないか」

だの、

「まあ、死なない程度にがんばりな」

と、最後にそう締めくくりなにやら紙の束を投げつけてた。大次郎はなぜかイザベラがタバサを口でいうほど嫌っていないような気がしてならないのだ。先ほどはいきなりの物的攻撃を受けてしまい怒り心頭していたが、いま冷静になって見ると、どこことなくそんな気がしてならないのだ。

「ふん！そらさっさと行ってきな！」

そういわれ、タバサはさっさと出て行ってしまった。大次郎もその後を追う。残された部屋では安堵の息を吐くものがほとんだった。心臓に悪いものが消えたので息を吐いたのだろう。しかし、イザベラは少し心配顔をしながらも

「あの男・・・強そうだったね・・・風竜もいるし安心だね」

そう呟いた。本当は、自分の従姉妹がかわいくてしょうがないイザベラだったが、ここでは北花壇騎士団の指揮を下すもの。その思いは封じなければいけない。そして自分は恨まれてもしょうがないのだ。と、割り切ってしまったもいる。何せ自分はある子の仇の娘なのだから・・・と。

「ふん、おい紅茶を用意しな」

近くにいた従者に頼みほかのものは下げさせた。そして持つてこられた紅茶を啜りながら従姉妹との遊んだ思い出に浸る。

くくリュティス上空くく

上空を飛ぶシルフィード。いつもならマシンガントークを繰り広げるのだが、今の空気の重さに喋れないでいた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あたりには風が吹く音しか聞こえない。二人は終始無言だった。二人は城から出た後、ずっとこんな感じなのだ。

「きゅ、きゅい！二人とももうすぐで目的地なのね！降りる支度をするのね！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

タバサはなんの返事もなく。大次郎は軽く頷いただけだった。シルフィードはそのまま黙ってしまった。ふっと視線をあげると、

「あ！お姉さま、大次郎！あれあれ！」

シルフィードがそういうと二人はちらりと下を見る。

「人……か？」

ところどころに紅く輝く松明が光っている。そして怒声が響いてきた。大次郎はタバサを見て、

「いくぞ」

「……」

表情がいつもより暗い。しかし、コクツと頷いてシルフィードを降下させた。

大次郎の異世界の異種族との初めての戦いが始まる。

第十一話

くく”黒い森”近くエギンハイム村上空くく

「……なんじゃ、あれは？」

大次郎は目の前にいる人間……いや、『亜種』に驚いていた。

「きゅい、翼竜人なのね。人間は『翼人』と呼んでいるのね」

「なるほど、翼が生えているから翼人……か。おいの国では天狗みたいなもんか？」

もちろん違う。天狗とはカラスが人間になった妖怪で、いうなれば『鴉人間』だ。

「まあ、そいはどうでもよか、問題は……」

大次郎はそういいながら下を見る。怒声を上げながら矢を放つ人間たち。しかし、翼人が風を使い矢を返したり、その羽を活かして避けたりして攻撃をやり過ごす。明らかに振りだ。

「もちつと、用心棒を雇うつ、ちゅう考えはなかったのかえ？」

「傭兵を雇うにはお金が必要」

タバサが短く告げた。大次郎はなるほど、と頷いてまた下を見た。屈強そうな男が手に持った斧で指揮をしているが、それも時間の問題だろう。形勢は明らかに不利だ。

「む？なんじゃ、あれは……」

翼人がなにやら念仏見たいのを呟くと、地面の枯葉が舞い上がった。

「あれも魔法か？」

「そうなのね。」精霊の力”って言うんだけど、人間たちは”先住魔法”って言うてるのね」

ふーん、と気のない返事をして魔法は便利で面白いと思ったが、どうせ自分には使えないのでどうでもよかった。

見ていると舞い上がった木の葉が人間に襲い掛かった。それを見たタバサが杖を振るい、雪風を吹かした。

木の葉は風で吹き飛ばされ明後日の方向に飛んでいき、翼人たちはこちらに視線を移した。タバサはそのままシルフィードから飛び降りた。

「なっ……！！！！」

いきなり飛び降りたタバサに驚いた大次郎は追うように飛び降りた。シルフィードが何か言っていたが気にしない。タバサが驚いたようにこちらを見る。

「タバサどん！下じゃ！」

「！？」

下から先ほど同じように木の葉が飛んできた。タバサは即座に”フライ”を使い軽快に避ける。対する大次郎は……、

「うおっ!？」

魔法を掛けられてないのでそのまま絶賛落下中であった。このままじゃ、スプラッタなものが形成されてしまう。しかも、木の葉が襲い掛かってきている。

「ちいいいっ!!!!!」

大次郎は飛んでくる木の葉を体を捻って抜いた大刀で切り払う。さすがに、火花が出たときは驚いたが、これも魔法なんだろうと理解して、そのまま飛んでくる木の葉を切落とす。すると、今度は木の枝が伸びてきて大次郎たちを襲った。タバサは風の刃を生み出しそれを切り払う。大次郎も手に持った大刀でその枝を切り払う。ほとんどきり終えたところで、大次郎はそのまま森の中に落下した。

「ダイジロウ!!」

タバサは地面に降り立って大次郎を呼んだが、反応がない。まさか・・・?と思っているものの、目の前の翼人から目を離せない。すると、

「やめて!みんな森との契約をこんなことに使わないで!」

羽の生えた、一人の女性が現れた。ぱつと見は、まるで天使のようにも見える。

「アイーシャ様!」

翼人たちの間に動揺が走る。タバサはそれを見逃さない。即座に呪

文を唱えようとするが、

「お願いです！お願いです！杖を収めてください！」

一人の青年がタバサの杖に掴んだ。それを見てか、アイーシャと呼ばれた女性は大仰に手を振り、

「ひいて！ひきなさい！争ってはいけません！」

タバサとにらみ合っていた翼人たちはアイーシャの剣幕に押されて、そのまま飛び去ってしまった。タバサを抑えていた青年はほっとしたような顔をした。しかし、タバサにとって今大事なのは・・・、

「ダイジロウ！」

フライどころか、レビテーションすら掛けてない状態で落ちたのだ。高さはゆうに50メートルはあった。まともに落ちたので、もしかしたらバラバラに吹き飛んでいるかもしれない。タバサは大次郎が落ちてであろう辺りを調べる。すると木陰のほうから、

「う、いててて・・・」

大次郎と思わしき人物の声が聞こえてきた。タバサはすぐにその近くに駆け寄る。すると、そこにはタバサの探し人がいた。

「ダイジロウ！」

「お、おお。タバサどん。無事かえ？」

大次郎は腰を擦りながらタバサに聞いた。タバサは滅多に崩さない

表情を崩して大次郎に問い返した。

「私は大丈夫。あなたは？」

「腰を少しばかり強く打ったが・・・問題はなか」

大次郎は落ちる際、身体を回転させて落ちる際のエネルギーを分散させて、地面に叩きつけられるときに柔道という横受身を取ったのだ。途中の木の枝がクッションになったのも助かった理由の一つだ。実際に三、四十メートルの高さから落ちて受身を取って助かったという話も残っている。

「せいよりも・・・」

大次郎は己の右手に持った柄を見た。目線を刀身に移すと、

「こっちのほうが重体じゃ」

「あ・・・」

大次郎の愛刀が、刀身半場から折れていた。さっきの枝を切った際に折れたのだろう。近くに月光を受けて鈍く輝く折れた刀身が輝いていた。

「ま、折れてしもうたもんはしょうがなか」

そういつて大次郎は折れた刀をそのまま鞘に納めた。周りから村人が近づいてきたのが見えてきた。

「さて・・・『任務』の続きをするかのう、タバサどん」

「・・・・うん」

タバサは『任務』と聞いて少し顔を背けた。忘れかけていたものを思い出してしまったからだ。そして二人は村人たちと合流した。

〃村長宅・大次郎に宛がわれた部屋〃

「・・・・・・」

大次郎は床に座り、座禅を組んでいた。これは大次郎の趣味の一つで、考え事や悩み事がある際はこのように座禅を組むのだ。そして今大次郎が座禅を組んでいる理由は、

「（タバサどんに・・・・おいのことを話すかどうか・・・・）」

隠し通せるとは思っていない。もしかしたらバレてるかもしれない。気づいてないのか、それとも気づいていて、あえて無視しているのか。謎は深まるばかりだ。

「（いつそのこと喋るか？いや、それだとタバサどんに捨てられるやもしれない）」

大次郎はかなりの人間を殺している。そのことを話せば、タバサがどんな顔をするだろうか？軽蔑、畏怖、今までさまざまな視線を受けた。まるでゴミを見るような目で見られることもあった。己の主にそんな目で見られて平気でいられるだろうか？

しかし・・・・やはり、話しておかねばならないような気がして

ならない。

「やっぱり……話したほうがよか……」

大次郎は意を決して己の主がいる隣の部屋に向かった。

〃村長宅・タバサに宛がわれた部屋〃

「ん？」

タバサの部屋の前まで来て大次郎はなにやらタバサの部屋が騒がしいのに気がついた。シルフィードが騒いでいるのか？と思ったが、なにやら気配が違う。

「……」

大次郎は腰の小太刀を引き抜く。大刀は折れて使い物にならないのと、狭い室内では短い小太刀が有効なのを知っていたからだ。そして、部屋の扉を開ける。そして大次郎の目に飛び込んできたのは、

「おまん！何をしちゅう！！」

「！？」

大次郎と同じくらいの青年だろうか？その青年がタバサの首に手をかけ、絞め殺そうとしているではないか。大次郎は一瞬にして頭に血が上った。二人に近づき、青年の顔を殴り飛ばす。本来なら突き殺しているが、もしタバサを盾にされたら一溜まりもない。

吹き飛んでいった青年に小太刀を突きたてようと駆け寄ったが、

「お願いやめて！ヨシアを殺すのなら私を変わりに殺して！」

いきなり目の前に現れた女性に目を見張った。別に綺麗だからとか
そういったものではない。大次郎の視線はその女性の背中に生えて
いる羽に目がいつている。

「おまんはさつきの……………」

大次郎が軽く殺気を飛ばす。女性は「ひっ」と悲鳴を上げると、そ
の場に崩れそうになった。しかし、その場で震えながらたっている
すると、大次郎の小太刀を持った手に小さい手が置かれた。

「タバサどん？」

大次郎の手に手を置いたのは、己の主であるタバサであつた。そし
て、一言

「それでいく」

「は？」

大次郎はきょとんと、タバサを見た。何がそれで行くのだろうか？
二人の青年と女性もポカンとタバサを見ている。

「あの、タバサどん？話の内容がさっぱりわからんのじゃが……………」
「」

タバサに問いかけるが、なぜか答えてくれない。変わりにシルフィ

ードが答えてくれた。

〃〃シルフィード説明中〃〃

「と、いうわけなのね」

「なるほどのう．．．つまりは、こん二人みたいに村人と翼人を仲良くさせたいと．．．．．」

「そういうことなのね」

ほつか、と短く大次郎が答えて後はタバサが考えた案を聞いていた。そして聞き終わった後、翼の生えた女性、アイーシャというらしい、は森へと帰り、タバサの首を絞めていたヨシアという青年も帰っていった。

残されたのはタバサと窓から頭を出しているシルフィード。そして大次郎の三人（一匹？）だけになった。

「．．．．．」

「．．．．．」

「（ま、またこの空気なのね．．．．．）」

シルフィードはこのように辛気臭い空気が嫌いだった。もともとが能天気で楽天的な正確なためもあるが、おそらく楽天的じゃない人間がみてもこれは辛気臭いといわざる終えないだろう。そしてその空気を最初に破ったのは大次郎だった。

「少し……話があるんじゃない……おいのことについて……」

タバサは驚いたように大次郎を見た。そして大次郎のその顔を見た。そしてさらに驚いた。普段は笑ったり怒ったり、喜怒哀楽がはつきりした顔を見せるのだが、今は違った。悲しみと寂しさ、あと何かわからない”感情”が入り混じったような顔をしている。タバサはコクツと軽く頷いた。そしてそのままベットに二人腰掛ける。シルフィードがその場を離れようとしたが、大次郎に止められてその場に残った。

大次郎は一呼吸置いて語りだした。

「おいが……薩摩という国で生まれたのは知っちやるよな？」

タバサが頷く。これは前にも話したことだ。

「そこでおいは下級郷士として生まれた。おいが生まれた所は幸いにも肥沃な土地だったため、下級郷士の中ではそこそこえ暮らしをしとった」

三食ちゃんと出る食事。今では当たり前で江戸時代でも当たり前だった。しかし、貧しい者たちにとってはそれもまた叶わないときもあったのだ。

「おいはそんな土地で一生を過ごすつもりじゃった。好きな剣術をして、好きな女と一緒に暮らして、そして畑を耕す。こいがおいの当時の夢じゃった」

今思えばチンケな夢じゃ。自嘲的に笑って大次郎は続けた。

「しかし、ある日のことじゃ。幕府からの指令で京に上ることになったのが、おいの人生を大きく変えた」

幕府とは何か？タバサが聞こうとしたが、聞けなかった。大次郎を見て息を吞んでしまったのだ。

「ある日、おいは非番を利用して街中を歩いていたんじゃ。そのときにの、たまたま敵対している長州藩の人間とばったり会ってしまったんじゃ」

それが、大次郎の人生を大きく変えた。

「そん男はおいの喋り方を聞くなり、斬りかかってきたんじゃ」

大次郎が京に上ったときはまだ、薩摩と長州の仲は悪く。長州の侍は草履の裏に『薩摩』や『西郷』と書いて踏み歩いたという。タバサとシルフィードは静かに聴いている。大次郎は話を続けた。

「急じゃったからのおいは一瞬で目の前が白くなった。気づいて目を開けると……」

「相手を……斬っていた？」

大次郎は無言でコクリと頷いた。大次郎の脳裏にそのときのことが鮮明に描かれる。

「誰かに呼ばれ気がついたら、目の前が真っ赤になっていた。そして地面に視線を移すと、肩から臍のあたりまで真っ二つにされた斬りつけた男じゃった。最初は誰かが切ったのかと思った。しかし、己の右腕に馴染んだ感触と重さがあつたから見てみれば……」

大次郎はそこできろ。そして苦々しく、

「ポツキリと、鰐元から綺麗に折れて血に塗れたおいの愛刀じゃった」

それが初代の大次郎の愛刀だ。

「そいからはまた大変じゃった。仲間を殺されたということで、長州のサムライ共が毎日のようにおいに斬りかかってきた」

あるときは道を歩いているとき。あるときは茶屋で休んでいるとき。様々なところから刀が、槍が、矢が弾丸が、大次郎を襲った。

「向かってくるやつらを斬り殺した。そのうち、おいの腕が確かだとわかれると上の者が『任務』を渡してくるようになった」

「暗殺の任務？」

「ああ、薩摩に敵対するもの、また薩摩の利にならないようなものなどの……な」

『任務』は毎日のようにやってきた。次から次へと、多くの敵を闇へと葬った。そんな毎日を送っていつて、心が狂わなかったのは一重に『仲間』のためだっただろう。

「そして、斬って斬って斬りまくって、気づいたら『人斬り大次郎』などというあだ名がつけられていた……」

これもまた自嘲気味に言う大次郎。タバサはそんな大次郎を静かに

見つめていた。シルフィードも騒がず、静かに聴いていた。

「タバサどん。おいは『人斬り』じゃ。数え切れないほどの人間をこの手で葬ってきている……。もしも……。おいのことがいらんというなら……。シルフィードがおる。じゃから……」

そこまで言って大次郎は言葉を切り、

「おいを……。捨てても構わんぞ？」

大次郎の顔には寂しさが広がっていた。口では捨ててくれといっているが、本当は捨てないで欲しいという顔だ。タバサはそんな大次郎を見て、無言で抱きついた。

「タバサど「シャルロット」……。え？」

「私の本当の名前……。シャルロット・エレーヌ・オルレアン」

そしてタバサはポツリポツリと、自分のことを話し出した。

自分が王族であること。

父を殺され、母の心を薬で狂わされたこと、

その心を狂わせた自分の伯父に復讐すること、

そして、力をつけるために、多くの危険な『任務』をこなし実力をつけるために……。人を殺したこともあることを。

大次郎はタバサの話を聞いて、憤慨した。腹の底がグツグツと煮え

たぎる感じた。もし、この場にタバサの伯父であるジョゼフがいれば、間違いなく斬殺するだろう。

「私も・・・人を殺したことがある。それも、たくさん・・・だから、私もあなたと似たようなもの・・・」

「タバサどん・・・」

大次郎はその無骨な手で、タバサの頭を撫でた。そして、決心した様な声で続ける。

「タバサどん・・・一つ頼みがある」

「何？」

大次郎のあまりにも真剣な声と表情を見てタバサも真剣な表情になる。

「もし・・・おまんの伯父に復讐をするとき・・・おいにも手伝わして欲しい」

タバサは驚愕の表情になる。大次郎にとって、ジョゼフがタバサに行ってきたことは許せないことだ。別に義侠心とか正義なんかのためではない。これは本当に許せないことだからだ。

「だいじょ」「なんとわれようと、おいはおまんの仇討ちに助太刀するからの」・・・」

タバサの言葉を遮り、大次郎はタバサの頭をゆっくりと撫でた。

「もう……一人で抱え込んでもええんじゃぞ？」

そう微笑みながらタバサの頭を撫でた。タバサは少し……ほんの少し、顔を綻ばした。

「おまんには……仲間がある。キュルケどんに、シルフィード……そして、おいもおる。じゃからもう一人じゃなか。つらいことがあれば相談すればよか。挫けそうなときは言えばよか。おいたちは決しておまんを見捨てん。じゃから……一人で抱え込んでもよか……」

「う、ひぐ、うえエ……」

大次郎がそういうと、タバサは大次郎に抱きつき、泣いた。今までどんなものも受け付けなかった雪風のベールが、大次郎がぶち破ったのだ。そして、タバサは泣きながら確信した。

「（やっぱり、ダイジロウは私の勇者……）」

タバサはそのまま、深い眠りに付いた。大次郎もタバサの横で眠りに付いた。二人とも久しぶりの深い眠りに付いた。

〳〵翌日・広場〳〵

「ぼ、暴走ガーゴイルだア……」

「おなががすいたのーッ！おなかーッ！ーッ！」

「こりやまあ……見事な暴れっぷりじゃのう……」

頭を掻きながら窓の外を見る大次郎。その横では顔を少し赤らめて大次郎の腕に巻きついていているタバサがいた。

「おいは村人を先導するだけでええんやったの？」

「そう、巻き込まれないようにしてね？」

「ははは、安心せい。巻き込まれたとしてもそう簡単に死なんわい」

笑いながら答える大次郎。タバサは確かにと思った。五十メートルから落ちてでも死なない男だ。そう簡単には死なないだろう。

すると、階段からドタバタという音が鳴る。どうやら村人たちがタバサを呼びに来たらしい。タバサのほうをチラリと見る。タバサはコクリと頷く。そして名残惜しそうに大次郎の手から離れる。

「騎士様！騎士様のガーゴイルが大変なことになっています！！」

「何とかしてください！！」

その言葉を聞いてか、精神統一（の振り）していたタバサが立ち上がり、重重しく口を開いた。

「共のガーゴイルが暴走するなど、武人として恥の極み」

その歌舞伎みたいな言い回しに大次郎は思わず苦笑してしまう。

「お願いです！なんとかしてください！早く！」

「精神集中、一呪入魂、仇敵殲滅、雪風魔法」

「いや、殲滅したらあかんじゃろ」

タバサの言葉に思わず突っ込みを入れる大次郎。しかしタバサは軽く睨んだだけで言葉を続ける。

「あなたは村人の避難をお願い」

「御意」

大次郎も重重しく答える。もちろん演技だ。村人を一箇所に集め、避難させる。その間にタバサと暴走した（設定の）シルフィードが対決する。

「最強呪文！風棍棒！」

「なぜに棍棒？」

大次郎がツツコムが、この距離じゃ聞こえないらしい。その後も、タバサは氷の矢や風の塊、風の刃を散々にシルフィードに襲い掻かせた。

「さっきは痛かったのー！ー！」

シルフィードは翼を動かし、攻撃をする。タバサは上下左右と動いてその攻撃を避ける。

「騎士様！早く呪文を！じゃないとやられちまいます！」

「今は『フライ』の呪文を唱えている。別の呪文を唱えることは出来ない」

大次郎は初めて知った。あのように空を飛んで矢なり鉄砲なり打てばかなり便利だと思っていたのだが、案外不便だなと思った。そして、シルフィードのタックルがタバサを襲う。

「ああ、騎士様！」

「騎士殿！」

大次郎が駆け寄る。レビテーションでフラフラと降りてきたタバサを受け止める。なぜかタバサが顔を紅くしたかは謎だが、今はこの『演技』に付き合わなければいけない。

「騎士様！大丈夫ですか！」

「ふ、不覚……、かたじけない……」

緊張感がまったく感じられない『かたじけない』だな。と、大次郎が思ったがいまは口にださない。村人もちよつとしたパニック状態なので気付いてないようだ。

「騎士殿。あんガーゴイルには弱点はなかか？」

大次郎が聞く。タバサは先ほどより若干ではあるが顔を紅く染めている。そして、

「足の裏に矢が刺さっている……。踏んづけたみたい……。あれを抜けば正常に……。ガク」

普通、ガクツと言いなから気絶する奴はいないと思うが……。

そう思いながらタバサをそのまま抱える。

すると、ヨシアと呼ばれる青年が現れ、アイーシャと呼ばれる少女が現れた。

「（さて……、おいはもうお役御免じゃの……）」

大次郎はタバサを横抱きにして（所謂お姫様抱っこ）近くの木陰に連れて行った。そのときのタバサの顔が蛸みたいに真っ赤になっていたのは秘密だ。

それからは翼人と人間の連係プレーで見事にシルフィードの足に刺さっている矢を引っこ抜かれた。

〃〃それから三日後〃〃

「本当にええんか？タバサどん」

「いい。それよりも早く帰る」

大次郎の問いに素っ気無く答えるタバサ。大次郎は肩を竦めながら広場のほうに目を向ける。そこには翼人の礼服というものを着たヨシアと、純白のウエディングドレスを身に着けたアイーシャの姿があった。

それを見てから大次郎とタバサはシルフィードに乗ろうとした。すると、こちらに気付いたのか、村長の息子であるサムがこちらに駆け寄ってきた。

「騎士さま、剣士さま。ありがとうございます」

「わたしは何もしていない」

「おいは本当になんもとらんからのう」

ははは、と笑う大次郎を見て苦笑するサム。しかし、その瞳には確信の文字があった。

「今回、筋書きを書いたのは騎士さまでしょ？剣士さまはそのお手伝いをしてらっしゃんですね？ヨシアはいい奴だが、頭はよくねえ。こんな絵図面を書けるわけねえ」

タバサは無言だった。大次郎もまた、無言だった。

「弟がかわいくないわけじゃないですが、俺は村長の息子だ。だから村人たちの立場に立たなきゃならねえ……。つまり心を鬼にしなきゃいけないときもある。立場が、気持ちに従うことを許さねえんで。ま、騎士さまと同じでさ」

サムはほっとしたように、にっこりと笑い。頭を下げた。

くくトリスティン国境くく

さきほど、ヨシアとアイーシャが飛んできて、花束を渡されそれをタバサが風の魔法でわっかにしてシルフィードの頭に乗つけていた。

「結婚式、綺麗でしたわね！お姉さまも誰かと結婚なさればいいの

に！そしたらシルフィードも着飾るの！花でいっぱい着飾るの！きゅいきゅい！ああ、まずは恋人ね！恋人って素敵！お姉さまも早くおつくりになつて！こいびと！こい！び！と！きゅいきゅい！」

「花で着飾ったシルフィード……」

後半の言葉が（なぜか）気になるが、前半の『花で着飾る』と聞いて大次郎は花で着飾ったシルフィードを創造した。……結論。

「似合つてない」

「似合つてないの……」

タバサと一緒にユニゾンしたダブルツツコミに「ひどいのね……！」「いいながら騒ぐシルフィード。残念ながらまだ人間版シルフィードを見てないため竜の状態のシルフィードしか知らないのだ。

「でも、相手にするなら誰がいいかな？誰がいいかな？そうだギーシュさまなんてどう？あのかた、ハンサムですわ！」

「ばか」

「頭の中は空っぽじゃ」

「そうね！ちよつと頭がゆるくてらっしゃるわ！あっはっは！」

「おまんもいい勝負じゃぞ……」

大次郎の小声は聞き取れなかったらしくシルフィードはさらに続け

る。

「あ、そうだ！お姉さま、大次郎わ？優しいし、強いし、何よりお姉さまに絶対の信頼を得てますわ！そんな人が恋人なんて文句の付け所がありませんわ！」

「んなつ！？」

「！？」

シルフィードの発言に大次郎とタバサは驚いた。大次郎は顔を赤らませ、タバサにいたっては茹蛸みたいになっている。

「あのなあ、シルフィード。おまんはほんに頭のネジがゆるいのう．．．．。第一、タバサどんがおいを好きになるわ『ボコッ！』ごばあ！？」

「．．．．．」

大次郎がタバサになんか言おうとしたがなぜか、背中から黒いオーラを出しているタバサに、口を噤んでしまった。

そして、タバサはそのまま大次郎を睨んだのち、シルフィードの上で立ち上がり、大次郎のところまで歩いて、

ポフッ

大次郎の膝の上に座った。

「あゝ、タバサどん？こいはいたい……」

「……………」

パラッと、本を捲る音しかない。どうやら先ほどの発言で拗ねたらしい。シルフィードはそれをニヤニヤしながら見ている。

大次郎は空を仰いだ。普段よりも近く感じる空がなんだか憎らしい。

「やれやれ……………じゃのう」

大次郎は呟く。でも、その表情には微かな笑みが浮かんでいる。シルフィードはそのまま魔法学院まで飛んでいった。

第十一話（後書き）

ん、何かいつもにまして駄文なような気がする……（汗）
でも、挫けません！次回は遂に主人公新たな刀を入手します！どうぞお楽しみに！！

第十二話（前書き）

相変わらず好き勝手やってます（笑）

どうぞ、ご覧下さいー！！

第十二話

くくトリスティン魔法学院・タバサの部屋くく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ペラ、ペラ、

静寂。いまタバサの部屋はまさに静寂に包まれていた。タバサはベツトの上で本を読み、その使い魔である大次郎は床に座り、座禅を組んでいる。部屋に響くのは、タバサが本のページを捲る音だけだ。もともと、タバサは騒がしいのが苦手であるし、大次郎も騒ぐのは好きだがそこまで好き好んで騒がない。

ついでに言うと、本日この二人は町まで刀を探しにいくつもりである。シルフィードを使えばすぐに付くので昼食を取って行けばいいと思っているのでいま二人は思い思いの時間を過ごしている。

「・・・・・・・・」

ピクリ、と座禅を組んでいた大次郎が少し身じろぎ、片目を開ける。まだ遠いが・・・・・・・・なにやら足音が響く。しかもこちらに近づいているようだ。少し、荒々しいがどうやらキュルケのようだ。大次郎はタバサに告げる。

「タバサどん。もう少ししたらキュルケどんが来っど。しかも何やら急用のようじゃ」

「・・・・・・・・？」

そういうと、タバサは軽く、顔を上げ首を傾げる。なぜ、そんな遠くにいるのにわかるのだろうか？すると、しばらくして

ドタドタドタ、ドンドンドンッ！！

「ちょっとタバサ！！お願いがあるの！！開けてくれる！！！」

大次郎の予想通りキュルケがやってきた。タバサは驚いて大次郎を見ると、大次郎は先ほどと同じ座禅を組んでいた。しばらくして、大次郎はのっそりと立ち上がりドアに近づき、壁越しにキュルケに話しかける。

「キュルケどん。どがいした？そげん慌てて・・・・・・・・」

「あ、ダイジロウ！ちょっと入るわよ！」

大次郎を押しつけ、キュルケは室内に入ってきた。そして、キュルケはタバサに何やら頼みごとをしている。

しかし、生憎と所々に大次郎のわからない言葉が出てくるため、頼み事の内容がいまいちわからない。

しばらく話し、どうやらキュルケの願いが通ったらしい。タバサは本を閉じ、ゆっくりと立ち上がる。

「出かける」

「どうじゃ？」

「たぶん、街」

「わかった」

大次郎は腰に折れた刀と小太刀を差して、窓に向かって歩き出す。窓を開けたタバサがピー、と指笛を噴いて、飛び降りる。キュルケと大次郎もその後続く。ここは三階。普通なら飛び降りたらただじゃ済まないのだが、

「よつと……今日も頼むぞ、シルフィード」

「きゅいきゅい！」

窓の外にはタバサのもう一人（一匹？）の使い魔であるシルフィードが待ち受けていた。三人をそのシルフィードに跨り、飛び立った。

「相変わらずあなたのシルフィードは惚れ惚れしちゃうわね」

キュルケはシルフィードを見ながら呟いた。大次郎はキュルケのフレイムも中々だと思うが、確かにシルフィードもそれなりにいい。そんなことを思っていると、タバサがこちらに視線を向けてジッと見ている。

「ん？どうしたんじゃタバサどん」

大次郎はそんなタバサを見る。いったいどうしたのだろうか？そんな風に聞いてみると、

「さっき……」

「ん？」

「さつき、キュルケが来たとき……なんでわかったの？」

「ああ、あのときのか」

大次郎はタバサが言っている意味がさきほどのキュルケを見つけた
ときのことを言っていることがやっとわかった。

「え？何の話をしているのよ？二人とも」

キュルケも加わり、さきほどのことを説明することにした。

「おいはさつき座禅……床に座って目を瞑っておったろう？あれは精神修行の一つなんじゃが、おいは座禅を組みながら回りに『
気』を張つといたんじゃ。そいでわかった」

「『き』？」

「何それ？」

二人の言葉にうむ、と唸る。どう説明すればよいか……。そして飛行中のシルフィードの蒼い鱗とタバサの蒼い髪を見て、思いついた。

「そうじゃのう、例えばじゃ。おまんらは湖の中心に立っていると
しよつ」

「沈むと思うんだけど……」

「例えじゃ例え。そいで、おまんらが立っている湖に別の誰かが入ってきたとする。そうすると、水面はどうなる？」

「どうなるって……そりゃ波立つに決まって……」

そこで二人はハッと気づく。この二人の理解の早さに本当に感心する大次郎。

「そう、つまりは水面が波立つように、己の『気』が相手の『気』で揺れる。それでわかるんじゃ。これを極めたものは、相手が何人でどの位の距離にいるのかわかるんじゃ。さらには達人はこの気を消せることも出来るからの。すごいもんじゃ」

大次郎も気を張れる。しかし、大次郎の気はよくて半径二メートル。キュルケに気づいたのは座禅を組み、精神を落ち着かせさらにはかなり静かな環境だったからだ。

「まあ、そいより街はあとどれ位で付くんじゃ？」

「後一時間ぐらい」

微妙な時間と思いながら、大次郎は空を見る。雲に近く、移動しながらなので雲もかなり近くに感じるし、なにより空がさらに近く感じた。

〳〵トリスタリア大通り〳〵

「せまい……」

大次郎がトリスタニアに入って一言。確かに狭い。京都の町も狭かったが、こっちはまた格別にせまい。というより京都よりも狭いのは・・・？と思う大次郎。キュルケとタバサもウザったそうに歩く。

「まったく・・・なんでこんなに狭いわけ？おかげで服がクシャクシャよ!!」

「歩きにくい」

「おまけに臭いしの」

表通りだから臭いはそこまでもないが、臭い。おまけにこの人ごみ。そして屋台や店の食べ物の香りが交じり合い変な臭いを発している。

「肥溜めよりかはまし・・・か？」

「・・・たぶん」

「・・・そう思いたい」

三人はそんなことを話しながら、道を進んだ。

〳〵武器屋・入り口より離れた木箱の影〳〵

「さて・・・キュルケどんは確か・・・『だーりん』とかいう奴を探し、おいとタバサどんは刀を探しにきたわけじゃが・・・」

」

「どうやら目的地は一緒だったみたいね」

三人は木箱の陰から武器屋を覗いている。先ほどサイトを引き連れてルイズが入っていった店だ。ついでに言うと、大次郎は『ダーリン』とは誰なのか今わかった。

「何よ、あたしが狙ってるのをわかって早速プレゼント作戦？きゅー！！！」

「いや、違うと思うぞ？」

「なんでそう思うのよ？」

キュルケは大次郎を入り口を見ながら聞いた。大次郎は臭いに鼻を曲げながら答える。

「以前のギーシュとの決闘騒ぎでサイトどんは剣を振るっていたじやろっ？下手くそな剣筋ではあったが、それなりに武の心得があるんじゃないっ？。しかし、その後サイトどんが剣を持っちよるのを見たかえ？」

「ない・・・わね」

「じゃろっ？まあ、おそらくなんらかの理由で剣を買っくんじゃろ」

そういつて、大次郎は立ち上がる。

「さて、おいたちも行くかえ」

「うん」

「え、ちょ、ヴァリエールが出て行っただけでもいいじゃない!!」
キュルケがそう言ったが、タバサと大次郎はキュルケのほうに顔を向け、

「だって、めんどくさい（じゃろ）」

そういつて二人は武器屋に入ってしまった。キュルケは慌てて後を追った。

〳〵武器屋・店内〳〵

「ん？あら、タバサにその使い魔・・・それにツエルプストー！
なんであんたがここにいるのよ!？」

入って早々、怒鳴りつける桃色をした頭の少女を見て、大次郎は呆れた表情を見た。

「いきなり怒鳴りつけるとは穏やかではないのう」

「うつさい！平民風情が黙ってなさい!!」

ものすごい睨んできたが、大次郎にとってそんな子供だまし以外のなんでもない。京都にいたときはそれ以上に狂ったような目をした人間や、死を覚悟した者たちと戦っていたのだ。大次郎にとってルイズはそこらへんの子犬となんらかわらない。

大次郎は肩を竦め、武器を物色し始めた。タバサもその後に続く。キュルケは……ルイズといまだ言い争っている。サイトは完全に忘れ去られている。

くく物色中くく

「うつむ……」

大次郎は目の前に広がる武器を見て唸る。どれもこれも見たこともない武器ばかりだ。剣などは見たこともなくもないが、ロングブレードといった剣や戦斧といったものはまず見なかった。

「あつた？」

「いや、まったく……」

後ろでいまだやいのやいのやっている二人の声をBGMに、大次郎は目的である『刀』を探す。タバサも一緒になって探してくれる。

「第一、見たこともない武器ばかりじゃ。生憎と、ここにはおいが欲しい刀は置いておらんようじゃ」

「どうするの？」

ふむ、と唸る。どうすれば……と、頭を悩ましていると、

「……む？」

部屋の隅っこのほうに見覚えのある細長い箱を見つけた。大次郎は

その箱に近づいた。

「こいは・・・刀箱」

「かたなばこ？」

一緒に近づいたタバサが聞いてくる。

「ああ、おいの国ではこん風に刀を保管する箱があるんじゃ。これはまさしくそうじゃが・・・ちと長いの」

箱の長さは目算で四尺（120cm）はある。持った重さもかなりずっしりする。軽く傾けると、ガタリと音が鳴った。どうやら刀箱より少しばかり短い刀が入ってるらしい（それでも十分長い）。大次郎は試しに箱を開けようとしたが、

「ん？開かんな・・・」

紐で結ばれてるわけでもなし、何やらカラクリがあるわけでもなし。しかし、開かない。なぜだろうと箱を物色すると、

「ん？これは・・・」

箱の表面に文字が書いてあった。しかも大次郎が見慣れた文字・・・漢字だ。そこには『封』と書かれている。

「・・・どうやら封印され取るらしいの」

「封印？この箱が？」

ああ。と大次郎が答える。できれば中を見たい。でもそれは叶わない。普通ならここで元の場所に戻すのだろうが……。なぜか大次郎は手放せなかった。

「タバサどん……。こいを買おう」

「別に構わないけど……。いいの？」

「ああ、なぜか手放したらいかんような気がするんじゃ」

タバサはわかったと言うと、店のカウンターまで歩いていった。大次郎も後に続く。

「これ」

「へ？それでいいんですかい？」

どうやら店主も驚いているようだ。

「それでしたら五十エキューでいいでさア」

「安い」

タバサが驚く。正直この時代の通貨がわからない為、そんなに安いのだろうか？と頭を捻らせる。まあ、安いといってもそれなりに高いのだが……。

「いやですね。この箱はこの店始めてからなぜかずと置いてあるんですあ。この店はあっしの親父の代からありましてね。親父が『この箱は捨てたら駄目だ。そのうちこの箱は開けられる人物が現れ

る』といわれて、捨てようにも捨てられないし、かといって今まで箱を開けたことがある人間がいらないんでさあ」

なるほど、確かにそうだ。タバサは先ほど試しに箱にディティクト・マジックを掛けたのだ。しかし魔法の反応はない。ほかに何か力ラクリがあるのか調べたが何も出てこなかった。

しかし、だとしたらいったいどうやって開けるのだろうか？そんなことを思っていると

「うむ・・・どうやらこの『封』という文字に秘密が・・・！？」

「どうした・・・！？」

タバサは大次郎の言葉が途中でやめたので気になって見て、驚いた。

「こいは・・・いつたい・・・」

大次郎はいま自分の目の前で起こっている事に見開くしかなかった。大次郎の左手が『封』の文字に触れて輝いているのだ。そして何かを待っているかのように輝きを増している。

大次郎はもちろん、タバサも店の主人も驚いてその文字を眺めている。ルイズとキュルケはそれにすら気づかずに言い争いを続けて、サイトは壁の剣に見ほれている。

そして大次郎は喋るかのように、

「『開』」

そう呟いた。すると、箱がカタリと開いた。大次郎は息を呑んで箱を開ける。

「これは……薩摩拵の大刀！」

「すごい」

「こりゃ……また」

大次郎が箱から出したのは、己の腰に差してある大刀の拵えと似たような黒い薩摩拵えの大刀だった。長さは大体三尺七寸（約110センチ）、柄だけで十寸（約30センチ）はある。まさに長刀を振り回す、薩摩武士にピッタリの薩摩拵えだ。

「では……拝見」

刀を軽く掲げる。本当ならもつと本格的にやればいいのだが、大次郎はその作法を知らない。刀を鞘から引き抜く。そしてその刀身を見てまたため息をつく。

刀身は定番の鎬作り。反りは全体的に均一に反っている中反り。切先は堅物を断ち切るのに適した猪首切先^{いくびきつさき}。重ねが厚く、身幅も広い。刃は厚く、蛤刃と呼ばれる刃だ。

まさに、敵を『斬る』ために造られたような刀。世間では大太刀と呼ばれる部類に入る刀だ。大次郎は確信する。これは戦国時代、敵を鎧ごと叩き斬るために造られた剛刀だと。

「店主……」

「へ、へい。なんでございましょう？」

そこで大次郎がポツリと呟く。店主は慌てて返事を返す。そして大

次郎は店主に頭を下げ、

「こんに、こんにええ刀を売ってもらい……真に感謝いたす」

「え、いや、そんな……」

店主も慌てる。今までそれなりに礼を言われることもあったが、ここまでする客はいなかったからだ。

「いやいや、おんしのおかげでおいはこげん素晴らしか、刀を手に入れることが出来たんじゃ。こいは感謝してもしたりん。ほんいありがたか……」

大次郎のその態度に店主は相当慌てふためく。そして、そっぽを向き言い放つ。

「ま、まあ、いいさ。こちらら邪魔な道具が処分できたんだ。ほら、さつさと金置いて出ていきな！」

店主のそれが照れ隠しだとわかった大次郎は多少の含み笑いを浮かべる。

「ああ、そうするかの」

そういつて大次郎は懷に手を入れる。そして、袋を取り出した。これは大次郎が元いた世界から持ってきた金ではない。これはこの前大次郎と一緒にタバサの任務をこなして、報告に行った際、

『ふん、あんたみすばらしいったらありゃしないね。ほら、この金をやるからそれで服でも買いな』

そういつてエキュー金貨が詰まった袋を投げ渡した。まあ、意味的には『これからも従姉妹のことをよろしく』という意味だろう。その袋を受け取り、タバサと共にその場から去る際イザベラに向かって口パクで

『もう少し素直をなったらどうじゃ？』

と伝えたら、顔を真っ赤にさせて何かを叫んでいた。その時には大次郎はすでにその場にいなかったが。

さて、話を戻そう。正直な話。この袋の中にいくら詰まってるかわからない大次郎。金貨五十枚、と言われてもイマイチピンとこない。だから適当に五回ぐらい引つつかでカウンターの上に置く。店主は数える。そしてどうやら二十枚ぐらい余ってたらしい。

「ああ、そいも取っというて構わん。どうせ、おいには価値がイマイチピン、とこないからの。それに礼代わりじゃ」

「まあ、そういうのなら喜んでいただきますがね」

そういつて金を仕舞う店主。何だかんだいつて金に困ってるからだろう。大次郎は腰の折れた大刀を引き抜き、新たに手に入れた愛刀を腰に差す。鞘の鏝（いじり）が若干地面に擦れる。『抜き』を行う際、今までより若干遅くなるだろうが問題ないだろう。それに大次郎は元々抜刀術が得意ではない。

「それでは店主、またその内顔を出すぞ」

「へ、今度来たら、飛んで日にいる何とやらにしてやるぜ」

「ははは、まあそうならんように気をつけよう」

大次郎が外に出る。その後にタバサが続く。キュルケは……まあ、その内回収する。

大次郎はその場で伸びをして、タバサの方に向き

「さて、キュルケどんはまだ時間が掛かるだろうし、小腹が空いてきた。それでどうじゃタバサどん。飯にでも食いにいかんか？もちろんおいの奢りじゃ」

そういう大次郎。しかし、タバサはちょっと不機嫌な顔をしている。何か気に触るようなことを言っただろうか？そう思っているとタバサがポツリと呟いた。

「シャルロット」

「ん？」

「二人のときはシャルロットと呼んで欲しい」

顔を若干赤らませ、タバサが言う。大次郎は多少なれど驚いたようにしたが、次には顔を綻ばせ、微笑しながら、

「ほうか。そいではシャルロットさあ。おいと一緒に昼餉などいかがかな？」

「喜んで」

二人はそのままトリスタニアの街を歩いた。空は……どこまでも蒼い。

しかし……大次郎は気づかない。自分たちに、己と同じ『同類』が……この世界に來ていることを。

そして、腰の刀がまるで意思を持っているかのように揺れたことを・
・・・・、

大次郎は、まだ気づかない。

第十三話（前書き）

この前パソコン弄っていたら、自分の好きな歴史上の人物・中村半次郎（後の桐野利秋）を主人公にした映画が放映されるそうです！
！これは見なければ！！

というわけで、今回もどうぞ！！

第十三話

くくトリスタニア郊外くく

静けさが支配する空間。そこで、二人の男が佇んでいた。

「た、頼む・・・い、命だけは・・・」

いや、正確には片方の男・・・着飾り、肥え太った男、この世界では貴族と呼ばれる男が相對する敵の強さに腰を抜かしてしまい。その場から動けないでいたのだ。

「・・・・・・・・」

対する男はこのハルケギニアでは見ない、服を纏い、見たこともない奇妙な剣を右手からぶら下げている。身の丈は180はあるう巨漢だ。

一言でいうなら平民。そう思っていた。しかし、その考えも簡単に吹き飛ばされてしまった。なぜか？それは佇んでいる男の足元に転がるものを見たからだ。

「・・・・・・・・弱い」

男が呟き、足元に転がっているものを蹴った。

「ひ、ひいつ!!」

その男が蹴った物・・・それは先ほどまで貴族の男を護衛していたメイジだ。そのメイジは真っ先にこの男に斬られたのだ。蹴ら

れた衝撃で、斬られた際に開いた腹から残りの臓腑と血が溢れ出てきた。

「弱い」

そして、その隣に転がっているもう一人のメイジ……トライアングルのメイジだったが、その男も、腹を両断され絶命したメイジを蹴る。

「弱すぎて……話にならん」

男は周りを見る。周りのは、蹴った二人を合わせて五人の杖を持ったメイジが転がっていた。もちろん、全員すでに事切れている。

男は貴族の男にゆっくりと近づく。

「た、頼む！金ならいくらでも払う！！だ、だから助けてくれ！！」

しかし、男は手に持った片刃の剣を……八相に構えた。貴族の男は戦慄した。先ほど、この男は同じ構えで五人の護衛を斬り殺したのだ。逃げねば、そう思い、動こうとしたとき、

「弱い」

「う、ギャアアアアアアッ！！！！！！！！」

男は一言呟き、逃げようとした貴族の男に駆け寄り、振り下ろした刀で男の腹を両断した。貴族の男は断末魔を上げその場に立っていた。何とか逃げようと思ったのだろが、体を捻らした瞬間、

ゴプッ……ドサッ

両断された腹から臓腑と血が溢れ出し、貴族の男はその場に倒れた。そして、絶命する。片刃の剣を振り払い、血振いをした男は宙を見た。闇夜に輝く二つの月、男は双月を見ながら呟く。

「やはり……お主以外の者は弱すぎてならぬなあ……
『人斬り大次郎』よ……」

男はそのまま、ゆっくりと歩き出した。

――同時刻・トリステイン魔法学院ルイズの部屋――

「……なぜにこうなった？」

「……さあ」

大次郎の疑問に軽く答えるタバサ。いま目の前ではルイズとキュルケが何やら言い争いをしている。なぜこうなったか？簡潔に説明しよう。

1、先ほどの武器屋で言い争いをしている途中、剣に話しかけられた。

2、サイトがそれを気に入リルイズに要求。ルイズは渋々（金もなかったので）承諾。

3、二人が出て行った後キュルケが店主に店一番の業物を要求。そしてかなり値切って購入。

4、そしてその剣を持ち、タバサ、大次郎と合流（その間に二人は昼餉を食べた）

5、そしてその剣を持ちサイトのいるルイズの部屋へとやってきた。

以上、現在までの状況説明でした。さて、現在にいたるのだが、先ほどからルイズとキュルケが言い争いを続ける。

「第一！サイトにはもう剣があるからいらないのよ！」

「あら、そんなボロ剣よりこっちの剣のほうが断然いいに決まっているじゃない。ねえ、ダーリン。剣も女もゲルマニアに限るのよ？トリステインの女はだめよ？このルイズみたいに嫉妬深くて、気が短くってヒステリックなんだもの」

「どういう意味よ！ツエルプストー！」

「あら、そのまんまの意味よ。ヴァリエール」

「へ、へんだ！あんななんかただの色ボケじゃない！なあに？ゲルマニアで男を漁り過ぎて相手にされなくなったから、トリステインに留学してきたんでしょ？」

「………言ってくれるわね、ヴァリエール」

「……何やら雲行きが怪しいのう」

大次郎はキュルケが纏う気配が変わったのに気づいた。そして咄嗟に襟に隠してある棒手裏剣に手を掛けた。

「あら？本当のことじゃない」

二人は少し睨み合い、互いに杖を引き抜いた。しかし、その瞬間

カカアンッ！！

甲高い音と共に、二人の杖が落ちる。そしてそれと同時に二本の黒い短い金属棒が転がる。大次郎が投げた棒手裏剣だ。

「ええ加減落ち着け、二人とも。こげん狭い部屋で魔法を使ったら、相手はもちろん自分もただでは済まんじやろが。やるなら外でやってこい」

呆れながら大次郎が言う。その隣では大次郎のあまりの早業に驚いているタバサが大次郎を見ている。

その二人を見て、ルイズが眉を顰めながらキュルケに聞いた。

「なんでこの二人がいるのよ？」

「あら？二人は私の友人よ、いても別にいいじゃない」

ルイズが何やらギャンギャン騒いでいるが、大次郎とタバサはほっといて自分たちの世界に入る。

「そついえば大次郎」

「ん？なんじゃ、タバサどん」

タバサに話しかけられ大次郎がタバサの方に向く。すると、タバサは刀を指差し、

「『固定化』と『硬化』の魔法を掛けとく？」

「なんじゃ？その『固定化』と『硬化』ちゅうのは」

そう言うと、タバサが丁寧に馬鹿でもわかるように説明してくれた。固定化は物質の酸化や腐敗から守るために掛けるもので、『硬化』はその物質をさらに硬くするためのものらしい。それを聞いた大次郎はさっそく掛けてもらう事にした。

「じゃあ、早速頼む」

「わかった」

そうして大次郎はタバサに『固定化』と『硬化』を掛けてもらい、満足した。タバサは大次郎の満足した顔を見て、満足した。

すると、先ほどまで言い争いをしていた二人が、矛先をサイトに向けた。

「こうなったらサイトに決めてもらいましょう」

「え、おれ？」

「当たり前でしょ。あんたの剣で揉めてるんだから」

「じゃったら最初からそうしたほうが早かったんじゃないか？」

大次郎の呟きに二人は軽く反応する。キュルケはハハハ、と明後日のほうを向いて口笛を吹き、ルイズは大次郎を軽く睨む。しかし、いまはそれどころではない。二人はサイトに向き直り同時に聞いた。

「さあ、どっちの剣を使うの？」

「あ、えつと、その……」

サイトがこちらに助けて！、という視線を寄越したが大次郎は明後日のほうを向き、刀を撫で始める。タバサは……助ける気などサラサラない。二人の薄情さに沈むサイト。しかし残念ながらそこまでサイトと友好関係を結んでいない二人にとってはどうでもいいことだ。

そして、サイトの下した決断は……、

「りよ、両方使うつてのは？」

「……」

二人は無言でサイトに蹴りを叩き込む。急所に（特にルイズの蹴りが）決まってその場で転げ回るサイト。大次郎はまあ、当たり前じやの。と、納得してサイトを見る。

「ねえ、ヴァリエール」

「なによ」

「そろそろ決着をつけない？」

「そうね」

「私はね、あんたのことが大っ嫌いなもの」

「私もよ」

「気が合っわね」

キュルケは微笑する。ルイズもない胸を張る。そして二人同時に叫ぶ、

「決闘よ！」

「やめとけよ」

「……やるなら外でやるんじゃぞ」

サイトと大次郎は呆れながら呟く。貴族は決闘好きが多いのだろうか？思わずそう思ってしまう大次郎。そして、二人はそのまま外に出た、大次郎はタバサの方を向く。すると、タバサはコクツと頷き本を閉じ、歩き出す。すると、その後からサイトも付いていく。大次郎は一応剣を持っていいこうと思い、ボロ剣とキュルケの買った剣を掴み、歩き出そうとしたとき、

「こいつはおでれーた！おめ『イーヴァルディ』か！ー！」

「うお！？いきなり喋んなやー！ー！」

いきなり剣が喋り出したので驚いてしまった大次郎。喋るとは聞いていたし、話もしたが、いきなり話しかけられたので驚いたのだ。しかし、剣は構わず続ける。

「んなのいちいち気にすんなよ！に、してもおめ、『イーヴァルデイ』とはねえ。しかも腰に差してある『刀』もあるってことは・・・
・て、まだ『覚醒』はしてないみたいだな」

「おい、待てボロ剣。なぜ西洋剣であるおまんが『刀』を知っているんじゃない？そいに覚醒とはなんぞ？」

「ボロ剣じゃねえやい！デルフリンガー様だ！！」

そうは言ってもボロはボロ。確かにいい剣なのは間違いないだろう。しかし、いまはそれよりもさっきの発言が気になる。

「わかったわかった。そいでデルフとやら。なぜにおまんが『刀』のことにしているんじゃない？あと、『覚醒』とはなんぞ？」

大次郎が聞く。もしかしたらこの未知なる刀のことがわかるやもしれないと・・・が、

「あゝ・・・．．．．．忘れた」

「・・・．．．．．」

大次郎は静かに腰の刀を引き抜く。それを見たデルフが慌てて言い繕う。

「ま、まてまてまてまて！！！！しょうがないだろ！おれっちはこう

見えて数千年生きてんだ！さっき思い出したことが消えるなんてよくあるんだよ！！」

「ほーう、遺言はそれだけか？ならば・・・」

「わーわーわー！！！！ちよ、相棒！助けて！お願い！久しぶりにシャバに出たと思ったら、出てきて数時間で終わるなんてやだー！！！」

「ちよ、高倉さん！それはマジ勘弁してください！それ折ったら俺が怒られるんで！本当に勘弁してください！！」

「ち・・・命拾いしたの」

大次郎は刀を腰に戻し、部屋から出てく。デルフとサイトはほんとその場でため息を吐いた。

「なあ、相棒・・・」

「・・・なんだよデルフ」

「あいつ、すんげええええ怖いな」

「ああ、俺もまだ慣れない」

「・・・・・・はあ・・・・・・」

二人のため息が辺りに響いた。

〃〃本塔・広場〃〃

「おーい、お前ら本気か？」

サイトの情けない声が当たりに響く。サイトは今、タバサの提案した『吊るしたサイトの紐を魔法で切って落としたら勝ち』という勝負で、空中で逆さまに吊るされているのだ。下でいまだ言い争っている二人はもちろん、その空中で待機しているタバサと大次郎も助ける気など毛頭ない。空中でタバサと話をしている。

「え？先ほどの手裏剣術を教えて欲しい？」

「そう。あと、あなたが知っている武器術をすべて教えて欲しい。もちろん私が使えるものだけでいいから」

「ふ……む、そうじゃのう……」

大次郎は考える。タバサにいま教えているのは町の道場での高段者が使っている技だ。最初はそれしか教えないつもりだったが、タバサの生い立ちを聞いて少し内容を変えようと思っていたところだ。教えるのはタバサが使えるそうな自分の知っている技、普通の武術から暗殺術までを教えようと思っていたからだ。しかしどれもこれもハードになるからどうしようかと思ったが、今のタバサの目を見れば大丈夫そうだと判断した。そして、いざとなれば自分が体を張ればいいとも思ったからだ。

「内容が今までと比べてかなりキツクなるぞ？それでもええか？」

「構わない。それで強く慣れるなら」

意思の強い目。絶対に曲げない信念を持った目だ。大次郎はその目

を見て、思わずタバサの頭を撫でようとしたら、

チュドーンッ！！！！

「……………空気を讀まん奴らじゃのう」

「……………」

口にはしないがタバサも同じことを考えてるようだ。下の方を見るとルイズが悔しそうに唸っている。すると、今度はキュルケが杖を構え、呪文を唱える。

「うぎゃあああああッ！！！！！！！！」

キュルケが放った炎は見事にサイトを吊るしている縄を焼け切り、サイトはそのまま地面に落下を始める。タバサが億劫そうに杖を振るい、サイトにレビテーションの呪文を掛ける。

「おまんも大変じゃのう」

「まったく」

大次郎の問いにため息をつきながら答えるタバサ。気のせいか、前より話のバリエーションが増えつつある。

地面に転がっているサイトの縄を解きに行こうとすると、急に影が大次郎たちに覆いかぶさった。

「ん？なん……………じゃこりゃ！？」

「ゴーレム。しかもトライアングルクラスの」

大次郎が絶句した。いま目の前にいるのは、この魔法学院の本塔並みにでかいゴーレムが立っていたのだ。そして、ゴーレムが拳を振り上げ、本塔に拳撃を加える。

いったい、何がしたいのか？そう思っていると、タバサが、

「あれは宝物庫。それに、あのゴーレム……最近有名になった『土くれのフーケ』かもしれない」

土くれのフーケについては大次郎もギーシュ経由で聞いたことがある。何でも金持ちの貴族からしか物を盗まないとかどうとか。まあ、大次郎にとってはどうでもいいことだ。

「ふむ……しかし、こいではどうしようもなか。ここは一旦引こつ」

「同意、退却」

烈火の如き攻めを得意とする大次郎だが、それは人との対決だけだ。こんな化け物染みた者は専門外だ。二人はその場を離れ、戦線を離脱した。

大次郎は気づかない、己の『刀』がどのような力を持ち、先ほどのデルフリンガーの『覚醒』と言う言葉を

まだ、
気づかない。

第十四話

くくトリスティン魔法学院・宝物庫近くくく

各国の子息・子女が集まるトリスティン魔法学院。普段は穏やかな空気が流れているが、今朝は違った。本当にある宝物庫は壊され、壁の一部に、

「『破壊の杖』確かに貰い受けました 土くれのフーケ」

「まったく！衛士は何をしていたのだ！！」

「所詮平民だ！あてにならん！！それよりも当日の当直は誰だったんだね！？」

「・・・醜いの」

「醜いわね」

「醜い」

教師達が言い争いをしているのを見ながら大次郎とタバサ。そしてキュルケが感想を述べた。

「第一、平民云々の前にあの石人形をどうやって魔法を使えないものに倒せと言っくんじゃ？普通の魔法使いでも辛いじゃろ」

「相手はそれこそ戦術の達人よ。正々堂々正面からの魔法勝負しか

考えず、平民をただのゴミとしか思っていないトリスティンの貴族にとつてはそんなのわかんないんじゃない？」

キュルケの言葉を聞いて大次郎は呆れたようにため息をつく。そんなんでこの国は持つのか？と思つたぐらいだ。

「まあまあ、落ち着きたまえ皆の衆。第一、このなかにマトモに警備をしたことがある人間がおるのか？ん？おらんじやろ。じゃつたら責めることはできませんじゃ。もし誰かが責任を取るとしたらここにいる教師全員じゃぞ」

魔法学院の長・オールド・オスマンの一声で辺りが静まり返つた。確かにそつだ。誰も彼もがまともに警備をまともにやっていなかったのだから。

「それで？犯人を目撃したのは誰かね？」

「この三人です」

オスマンの前にルイズ、キュルケ、タバサが並ぶ。どうやら大次郎とサイトは勘定に入つてないらしい。

「うむ、そのときのことを詳しく教えてくれないかね？」

オスマンの一言にルイズがでて説明する。大次郎は興味がないため、タバサに教える練習メニューを考えている。すると、一人の女性が現れた。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたのですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

「申し訳ありません。朝から調査していた物ですから」

「調査？」

そこで大次郎も聞き耳を立てる。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居所がわかりました」

「なんですと！それはどこですか！？」

大次郎は耳を傾けながら不思議に思った。

「（なぜにこん短時間で居所がわかるんじゃ？）」

事件自体は昨夜のことだが、それでもこのように騒ぎ出したのは今朝のことだ。そんな短時間になぜ相手の居所・・・さらに言えば有名な怪盗だ。そんな簡単には捕まらないだろう。

「ふむ、それではこれより討伐隊を編成する。我と思うものは杖を掲げい」

オスマンはそういったが、周りの教師は杖を掲げようとしな。大次郎はそこでさらにあきれ返る。

「（さっきまで散々文句ばかり言いおつていたくせに、いざ戦えとなるとで駄目な権力をかさにした武士そのものじゃな）」

あきれ返っていると、一人の女が杖を掲げた。……ルイズだ。

「ミス・ヴァリエール！！あなたは生徒じゃないですか！！ここは教師に任せて……」

「誰も上げ取らんぞ？」

大次郎がツツコムと、シユブルーズが黙り込む。反論できないのだ。すると今度はキュルケが杖を掲げる。

「ミス・ツエルプストー！」

「ヴァリエールに遅れを取るわけにはいけませんわ」

キュルケが行くことにした。と、いうことは大次郎は隣の主人を見る。するとやはり、

「ミス・タバサまで！！」

やはりな、と思いながら大次郎はタバサを見る。

「タバサ、あなたまで来なくてもいいのよ？」

「心配」

タバサが呟く。するとキュルケは薄く笑う。オスマンもそれを見て笑う。

「フオフオフオ。それではその三人に行ってもらうかの」

「オールド・オスマン！彼らは生徒ではないですか！！」

「ならば君が行くかね？ミス・シュブルーズ？」

「い、いえ、私は少し体調が良くないですので……」

シュブルーズがそのまま引き下がる。オスマンは三人のほうを向き、

「彼女たちは敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシュバリエの称号を持っていると聞くが？」

それを聞いて周りの教師が目を見開く。キュルケとルイズも同じような形相で見ている。大次郎とサイトはよく分からなかったので、スルーすることにした。

「それにミス・タバサの使い魔はあのトライアングルメイジであるミスタ・アーツを負かしたそうじゃないか？」

それを聞いて教師陣が息を呑む。アーツのその残虐性と強さは計り知れない。実際、教師の中でも被害がいくつかでたほどだ。

その男を、この男は剣一振りで勝ってしまったのだ。教師陣は多少心が軽くなったが、やはり平民という偏見があるらしく、見下している。

その後キュルケ、ルイズの紹介があつたが……ルイズのときになぜか言いよどんでいたのは分からなくもなかった。

「ま、まあ、不安要素もあるが、お主らの努力と貴族の義務に期待する」

「杖にかけて！」

三人が直立して杖を掲げながら答える。大次郎は一応直立した。サイトは……なにやら奇妙なポーズを取っている。

「それではミス・ロングビル。案内を頼みますぞ」

「わかりました、オールド・オスマン」

一向はロングビルを先頭に目的地へと向かった。しかし、大次郎はまだ腑に落ちないところがあつてしうがなかった。

「（なげにあそこまで詳細に情報が分かったんじゃ？本来盗人や暗殺者などは人にまず見つからないようにするのが常識じゃ。ましてや、素人同然の農民に分かるはずがなか）」

しばらく考えたが……やめた。元々細かく考えるのが苦手な大次郎にそれを求めるのは酷なことだろう。大次郎は一向と共に目的地へと向かった。

〳〵目的地・小屋〳〵

「さて……ここまで来たはええ……が、どうする？」

一向はいま、フーケがいると思われる小屋の近くにある茂みに隠れている。大次郎が隠れながら様子を伺いながら作戦を考えることにした。

「もちろん正面から行くに決まってるじゃない」

そういつたのは何かと大次郎に「平民」を連呼するルイズだった。真正面から攻めてこそ貴族、と考えているルイズは真つ先にその案を出したのだが、

「却下、それ以前に論外じゃ」

「な、なんでよ！？平民の癖に貴族に楯突くつもり！？」

自分の案を考える素振りもなく、大次郎はルイズの案を即座に却下した。プライドの高いルイズはそれが我慢がならないらしい。

「何を当たり前のことを……ええか？こいは互いに認め合
つて行ふ決闘とは違うんじゃ。まして相手は有名な盗賊じゃ。それ
に見た感じ土を得意とする相手じゃぞ？小屋の周りに堀が掘つてあ
つたり、小屋に入つた瞬間小屋を土で埋めることも可能じゃろう。
そげな相手に真正面から戦つたところで土に埋もれるか、昨日の巨
大な土人形に潰されて終わりじゃ。もう少し、そういうことを学ん
でから前線にでてこい。じゃなきゃ、おまんは真つ先に死ぬぞ」

「名、な、な、……！！？？？」

言葉にならないらしく、顔を怒りで真っ赤にさせながら何か喚きたてようとする。しかし、

「いま騒いだら敵に気づかれるぞ？そしたら、ここにいる全員全滅じゃ。そんなことも考えられるのか」

軽く殺気を飛ばしながらルイズを黙らせる。殺気に当てられたせいでか、軽く顔が青くなっている。

しかし、大次郎は気にせず、作戦を立てる。

「まずはあの中を確認することが先決じゃ。すばしっこい人間が望ましいが……」

全員の目がサイトに向けられる。

「俺かよ……」

「ギーシュ戦の際に見せた素早さで行けばなんとかなるわい。というわけで頼んだ」

「よろしく」

「がんばってね、ダーリン」

「がんばってくださいね」

いまだ反応のないルイズを除いて、軽く声援を送る。サイトは背中に背負った二本の剣の内、キュルケから貰った剣を手にとって小屋に向かった。

中を覗き、サイトが手を振る。どうやら誰もいないらしい。

「よし、いくぞ」

小さく呟き、小屋に向かう。途中で罠がないのはサイトのときで分かっているので心配はしていない。

タバサが杖を軽く振り、ドアに罠が仕掛けられていないか調べる。

「罠はないみたい」

「そいじゃ、探してみるか」

「私は辺りを搜索してきます」

ロングビルはさつさと森の中に消えていった。大次郎はなんとも釈然としないが……まあ、いいだろうと小屋の中を探した。

「しっかし……埃臭いのう」

「ケホケホ、同意」

タバサが咳き込みながら答えた。大次郎はそんなタバサを心配しつつ、探す。

「大丈夫かえ？タバサどん」

「ケホッ、……大丈夫」

タバサは咳き込みながらも探す。大次郎も探す。そこで違和感を感じた。

「（ん……？なげにこのイスはこげん新しいんじゃ？）」

さつきまで埃を被っていたため、よく分からなかったが埃を払うとまるで『ついさつき作られたような』イスだ。

「（それによく見たら、周りのもんもそれなりに新しい……なぜじゃ？）」

そんなことを考えていると、

「破壊の杖」

タバサの抑揚のない声が聞こえた。

「（あないにあっさり？ 普通はもつとわからんように地面や……
まさか！？）全員、外に出ろ！！」

「！？」

「え？」

「は？」

大次郎が叫ぶと、タバサがすぐさま反応して飛び出し、それに気づいたキュルケが一拍遅れて飛び出した。サイトは何があったのかよく分からなかったらしく、その場に固まっている。

「チイ……！！！！」

大次郎がすぐさま駆け寄り、サイトを抱え小屋の外に飛び出す。すると、

ドガシャアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！

間一髪、大次郎とサイトが飛び出した次の瞬間に小屋が踏み潰された。タバサが駆け寄ってきて安否を確認した。

「ダイジロウ！！大丈夫！？」

「ああ、なんとかの……………」

飛び出した際に足を捻ったのか、足首を擦りながら立ち上がる。痛みはあるが、問題にするほど度でもない。

「しかし……………これは」

「土くれのフーケ……………昨日見たので間違いない」

大次郎はそのままの状態で己の何十倍もあるゴーレムを見上げる。すると、ゴーレムは拳を振り上げ、

「つつ！？逃げい！！タバサどん！！」

「っ！！！」

タバサはその場を離れる。大次郎もその場を離れようとする。しかし、

「何をしとるサイトどん！！はよ逃げい！！！」

サイトがその場で腰を下ろした感じでヘタリ込んでいる。

「こ、腰が抜けて……………」

「……………ちい！！！」

普段なら見捨てるところだが、しょうがない、といった感じでサイ

トのところへと急ぐ。

「タバサどんシルフィードで助けるんじゃー!!」

大次郎が叫ぶと、タバサが口笛でシルフィードを呼ぶ。シルフィードはすぐさま飛んできた。

「シルフィード!! サイトどんとおいを引っ張って逃げてくれ!!」

「きゅいきゅい!!」

「了解なのね!」と言ってるかのようにシルフィードはサイトと大次郎目掛けて飛んできた。拳はあと少しで届きそうだ。

「ほれ、立てサイトどん! じゃなきゃツブされっど!!」

「ちょ、ま、マジで腰に力が入らない……!!!!!!」

シルフィードがあと、数秒で飛んでくるというのに、目の前に迫っている拳に腰を抜かして、立てないでいた。

そして、シルフィードが迫ってきた。しかし、サイトはいまだ立っていないでいる。しかも目の前には先ほどよりも近くなったゴーレムの拳が迫ってきている。

大次郎は舌打ちをして、ある決断をした。

「チィ!! しかたなか。シルフィード! 受けとれい!!」

「きゅ、きゅい!!」

「うわあっ!!」

サイトはまるで子供が投げられるように大次郎に投げられた。シルフィードも突然のことだったので、サイトを口で咥え、体制を崩してそのまま飛んでいった。

「ダイジロウ!!」

あまりのことに驚いたのか。滅多に大声を出さないタバサの声が聞こえた。大次郎はそちらを見て、軽く微笑む。そして、

「すまんの……シャルロット」

タバサの本名……シャルロットと呟き、迫るゴーレムの拳に向き合う。それでタバサ以外のものも気づいた。

サイトを助けるために自らを危険に晒すことを。

ゴシャアアアッ!!!!!!

ゴーレムの拳は大次郎をなぎ払うように振りぬかれた。

「ぐはっ!!!」

気休め程度に刀を抜いた状態で……大次郎は吹き飛んだ。そして吹き飛んでいった先の木に激突してそのまま地面にズルズルと崩れ落ちる。

遠くで、タバサの声が聞こえたような気もしたが……今の太

次郎には何も理解できなかった。
そしてもう一度大次郎は口の中で呟く。

「すまんの・・・・・・・・シャルロット」

そのまま、意識を手放した。

第十五話（前書き）

いや、最近『ゼロ魔』のほかに『学園黙示録』と『緋弾のアリア』にハマりだしています。

最近は面白い漫画や小説が多くて大変だね！！（笑）

それでは今回はいつもより短めですが、どうぞ！！

「（……………ここは……………どこじゃ？）」

高倉大次郎はいま、暗いまるで深海にいるような感覚に囚われている。

「ここは……………ああ、そういえばサイトどんを助けるために庇って……………」

ならば、ここは地獄か？と思い、何とか立ち上がり辺りを見回したが、

「はて……………地獄なら鬼なり閻魔なりいると思ったが……………おらんの」

大次郎は己が極楽に行けるとは思っていない。数多くの人間を殺したのだ。極楽に逝けるとは思っていない。

「ならばここは……………」
『ここは君の貴殿の深層心理の中だ』
「っ、誰じゃ！？」

声が聞こえたので、構える。どうやら刀はどこかへいつてしまったらしい。

『ははは、そう構えるな。我^{われ}は貴殿に危害を加えるつもりはないよ』

「ならば、姿を見せてくれんか？姿の见えない相手を信用できるほど、おいはできた人間ではなか」

そう大次郎が言うと、『誰』かが呟く。

『ふむ、残念ながらそれはできん。我は貴殿であり、貴殿は我であるからな』

「……どういうことじゃ？」

言っている事がイマイチ分からない。『誰』が続ける。

『まあ、分かりやすく言えば我は貴殿が手に入れたルーン……いや、正確には刀だ』

「あの刀かえ？」

ふむ、相違ない。と頷いたように感じた。大次郎は構えを解く。どつち道、見えない相手では戦いようがない。それになぜかは知らないが親近感？に似たようなものを感じた。

『そう、以前、我は持っていた主が死んだとき。我は悟った。これからはるか未来、大きな戦^{いくさ}が始まると、そして我は己をあの箱に封印し、そのルーンを持った者が現れるのを六千年も待った』

「六千年……こん国が出来たときか」

『左様。我は以前の主と共にブリミル殿と一緒に戦った。その際、ブリミル殿から与えられたのが……そのルーン『イーヴァルディ』だ』

大次郎は己の左腕に書かれた『イーヴァルディ』のルーンを繁々と見つめる。

「そいじゃ何かえ？おまはんはこの『イーヴァルディ』のルーンを

持ったものが現れるまでずっと待っていて、そいでおいが現われた．．．．と」

『そういうことだ』

現われなかったらどうしたんだろうか？と思いながら大次郎は呆れ返す。

「しかし、残念じゃったの。おいは今さっき死んだばかりじゃ。また別の主を『いや貴殿はまだ死んでおらんぞ』．．．．は？」

大次郎は気の抜けた声を出す。．．．いま、なんといった。

『いや、だから貴殿は死んでいない。いや、正確には死んでいるが死んでいない．．．．所謂仮死状態にいるのだ』

「なぜじゃ？あのときあの土人形に殺されたはずじゃが．．．．」

『それは我が防いだのだ』

それを聞いて大次郎が眉を寄せる。何のために己を救ったのか、よく分からなかったためだ。

「なぜじゃ？なぜそんな面倒なことを．．．．」

『見極めるためだ』

「．．．．見極める？何をじゃ」

見極める。いったい何を？大次郎が考えていると、

『見極めるのは、貴殿が我の真の主になれるかどうかだ』

「……つまりは、おまはんをいかに扱えるかということか？」

『似ているが違ふ。我は貴殿の『覚悟』を見たいのだ』

「『覚悟』……？」

それは大次郎が常に持つていていると思つてゐるもの。しかし、それは違つらしい。

『貴殿が持つてゐる覚悟はいわば『戦う』ための覚悟だ。我が求めてゐるのは何かを『守る』ための覚悟だ。それを見極め、我は貴殿に従ふ』

「何かを……守るための覚悟……」

『そう、我の以前の持ち主も何かを守るために剣を振るつた。ゆゑに貴殿がなんのためにその剣を振るうのかを問いたい。嘘偽りのない言葉を……な』

そういわれ、大次郎が考える。以前は、『国を守る』ためと胸を張つて言えた。しかし、人斬りとして働き始めてからは『新たな時代』を作るためと言つて、剣を振るつた。

ならば今は？

国を守るために剣を振るうのか？

新たな時代のために剣を振るうのか？

それとももっと別の、それ以上に大切な何かを守るのか？

なんだ？

いつたいなんだ？

いつたい何のために剣を振るうのか？

「・・・あつ」

考えて、考えて。考え抜いている途中、大次郎の頭に蒼い髪を持つた己の主を思い出した。いついかなるときでも、本を読みいつも無表情の己の主。しかし、とても強くしかし、まるで折れやすい木の様な身体を持ち、鋼鉄のように硬い心を持った己の主。その主とほぼ毎日を行動を共にする赤い髪をした友人、キュルケ。

そして次に浮かんだのは毎日のように稽古に励み、強くなるうとしている自分の『門下生』であり『友人』たち。

「ふふふ・・・なるほど・・・。確かにこれなら剣を振るう理由だな」

『どうやら、見つけたようだな』

「ああ、おいは……己の主を……シャルロットを守りたい。その友人でもあるキュルケを守りたい。おいの友人であるギーシュ、マリコヌル、ギムリ、レイナールやその他の友人を守りたい。そして、おいの剣の届く範囲にいる大切な者たちを……守りたい。だからおいは剣を振るう。その者達のためにおいは……剣を振るう!!そいがおいの『守るための覚悟』じゃ!!」

『ふはははは!!!!よかろう!!新たな主よ!!貴殿のその心意気、しかと受け止めた!!我は貴殿に力を貸そう。そしてその力を貴殿の、そして貴殿の大切な者たちを守ろう!!!!さあ、呼べ!!今なら呼べるはずだ!!我の名を!!!!我が名は……!!!!
「!!!!!!」

「『虚空!!!!!!』」

いまここに、新たな真の『イーヴァルディ』が誕生した。

第十六話（前書き）

最近『ネギま！』か『学園黙示録』の小説を書いてみたいと思っている今日この頃。

第十六話

もう……だめだ。

キュルケはそう思った。フーケのゴーレムが現れ、戦闘が始まった。これはまだいい、予測の範囲内だったからだ。しかし、ルイズの使い魔であるサイトが途中で腰を抜かしてしまい、それを庇った大次郎が……やられた。

それで戦力がほとんど削られた。そのせいでタバサは半狂乱状態になり戦闘不能。サイトはまだ腰が抜けている上に自分が庇ったせいでやられた大次郎を見て戦意喪失。ルイズは……元から戦力に入っていない。頼みの綱であるロングビルは今はいない。実質、いま戦力になるのは火のトライアングルであるキュルケ以外いない。しかし、だからといってキュルケが勝てるわけではない。元々、土と火は相性が悪いのも原因の一つだ。

「打つ手なし……ね。こんな状態ならダイジロウはどうしたのかしら？」

大次郎は戦術にもそれなりに長けていた。そんな大次郎ならこんな時どうするのか、そんなことを思いながらキュルケは自棄糞的な笑みを浮かべながら魔法を放つ。効果は……ない。

ゴーレムはキュルケの攻撃をまるで八エが身体にぶつかっているかのように手を払うだけだ。

そして、杖から火が出なくなる。

「……打ち止め………終わりね」

キュルケは杖を無造作に捨てる。精神力が切れたメイジは平民より

弱い。つまり今のキュルケはそこらにいる町娘と変わらない。キュルケは逃げようとも思った。しかし、逃げるための体力は微妙でしかもタバサ、ルイズ、サイトを連れて一緒に逃げるなどまず不可能だ。

「ま．．．短い人生だったけど、それなりに楽しかったわね」

クツクツと、今度は本当に楽しそうに笑う。もう、この世に未練はない物言いだ。そして、いまだ虚ろな目をして大次郎の名前を呼ぶタバサを抱きしめ、

「タバサ．．．あなただけでも生き残りなさい。それが大次郎の心から望んだことでしょうし、．．．なにより、私のお願でもあるの」

「．．．．．」

タバサは反応しない。もう魂の抜けた人形のように動かない。キュルケはそんなタバサを見て、心が痛んだ。

「．．．．タバサ」

立ち上がらせようにも立ち上がらない。おぶって以降にも体力はないし、残りの二人を残すことになる。そしてキュルケは頭のなかに過ぎっては欲しくないものが過ぎる。

「このまま．．．ダイジロウのもとにみんな揃って行くのも悪くないかもね．．．．．」

目の前のゴーレムが拳を振り上げ、振り下ろす。キュルケは目を瞑

り、タバサをキック抱きしめる。
しかし、奇跡は起きた。

「死ぬのは・・・まだはやか！『ライトニング・クラウド！』」

ガシャアアアアアッ！！！！！！

突然の雷光。それはスクウェアクラスのメイジが放てる『ライトニング・クラウド』だった。誰か救援に来たか？と思ったが、今の呪文を唱えた声、何よりあの独特な喋り方。最初に気づいたのは、廃人のようになっていたタバサだった。

「ダイジロウ・・・？」

そこに立っていたのは、この国ではまずお目にかからない着物を身に纏い、髪を長く伸ばし後ろに一つに纏め、刀を持ったタバサの使い魔・・・高倉大次郎だ。

「ふう、危なかったのう」

『まったくだ』

大次郎が目を開けると、そこにはタバサを抱きしめ目を瞑るキュルケとそれを拳で潰そうとしている巨大なゴーレムだった。

「しかし、おいにも魔法が使えるようになるのはのう……
それもこのルーンのおかげか？」

大次郎は右手にゴーレムに突き出すように持った『帯電』している
刀を見て、そして己の左手の甲を見る。そこには薄くではあるが、
光り輝くルーン……『イーヴァルディ』が輝いていた。

『うむ、これが以前のわが主が授かったルーンの手だ』

『イーヴァルディ』の能力。それは『持ち主に魔法を使えるように
する力』だ。かつて『虚空』の持ち主であった主がブリミルより授
かった力だとかどうか。しかも呪文の詠唱なしで魔法が放てる
というのだ。

「さて……本当ならここでタバサどんやキュルケどんを助ける
のじゃが……」

『先ずは、こやつだな』

ゴーレムの方を向く。するとそこには吹き飛ばされた頭がなくなっ
たゴーレムだったが、虚空と話しているうちに回復したらしい。
しかし、それは逆に大次郎の『練習台』にされるだけだ。

「どれどれ……『カッタートルネード』！」

構えた刀に渦巻くように風が纏わり付いたと思ったら、その渦が徐
々に巨大化してゴーレムに向かう。

ズゴアアアアッ!!!!!!

鎌鼬の竜巻はゴーレムを包み込むように覆う。全身が少しずつ削られていく。大次郎はそれを見て。

「うむ．．．ちとムラがあるのう。ならば．．．『アースニードル』・『ウィンディ・アイシクル』・『フレイムボール』」

三種類の魔法が一齐にゴーレムを包む。『アースニードル』はゴーレムを貫き、固定する。数本の『ウィンディ・アイシクル』がゴーレムを貫きダメージを与える。．．．といってもこれは一本一本が『ジャベリン』並みの威力なのでたまったものではない。『フレイムボール』はまるで活火山のマグマのような熱を放ちながらゴーレムを『溶かし』ている。

「しかし．．．これはちと反則ではなかか？確かすべての系統を操れるのは誰もいないと聞いて取ったんじゃが．．．．？」

「まあ、普通はな。しかしこの力をくれたのはプリミル殿だからな。あのお方も四系統すべてを使うことができたし、主も使っていた。それにそれぞれに威力の違いはあるだろう。貴殿はどうやら風に特化したようだな」

そう、イーヴァルディは持ち主に『四系統すべての魔法』を使わせるというあまりにもチートすぎる能力を持っているのだ。だが、もちろんそれなりのリスクはある。それは一つの魔法を放つたびに精神力が通常よりかなり削られるのだ。

だから、本来はそんなに魔法をポンポン撃てないのだが．．．。

「『ファイヤーボール』『エアブロー』『アースキャノン』『ウオ

「ターニードル」

大次郎はもとも精神力が高いためか、トライアングル、スクウエアクラスの魔法を連続でポンポン撃てる。しかもそれほど疲れが見えない。

「ふむ、こんなもんでよからう」

『ああ……というかむしろやりすぎなような気がするが……』

「あゝ、なんかやってたら面白かったからつい……」

ゴーレムはもうその原型を留めているのがやっとなのか、身体のところどころが崩れている。

「ならば……これで最後じゃ」

刀を水平に構え、腰溜めになる。いわゆる『突きの構え』大次郎が刀も振りかぶれない狭い部屋にいるときによく使う構えだ。そして刀身に風を付き纏わせる。そして、

「行くぞ……『突風』」

オリジナルの魔法を放つ。突くと同時に切先から魔法が飛ぶ。発想としては『エア・ニードル』と『エア・カッター』を混合させたものだ。『エア・ニードル』は杖に小さな竜巻みたいなものを作り、それで相手を抉り、突き破るものだが、その威力は『カッタートルネード』に匹敵する。

「終わりじゃ」

『お見事』

『突風』はゴーレムを容易く突き破り、ゴーレムは崩れ去った。大次郎は刀を腰に戻し、タバサの元へと歩いていった。

「心配させてしまつて済まんかったの……タバサどん」

タバサはいろいろと言いたい事があつた。

なぜあの時サイトを庇つたのか？

なぜ魔法を使えるようになったのか？

それとも最初から使えたのか？

聞きたいことは沢山ある。しかし、いまはそれよりも……。

「ダイジロウ……!!!!!!」

タバサは泣きながら大次郎に抱きつく。大次郎はそれを受け止め、タバサの頭と背中を撫でてやった。

「よしよし……済まんかったの心配させて……」

タバサはただひたすらに泣いた。泣いて泣いて泣いて泣きまわった。大次郎は慈愛に満ちた顔をしながらタバサを撫でている。

「落ち着いたかえ？」

「うん……ごめん」

タバサは目を真っ赤にさせながら大次郎に抱きついている。その横でキュルケが何か聞いたそうに立っている。

「ん？なんじゃ、キュルケどん。何か聞きたいような顔をしているが……」

「そりゃダイジロウ……決まってるじゃないの。それに私だけじゃなくてタバサも聞いたがつてるわよ？」

後ろの二人はどうでもいいけど。とキュルケが呆れ混じりに後ろを見る。そこには目を怒らせこちらを睨んでいるルイズと居心地が悪そうに頬をかくサイトがいた。

「ん、まあ、それはおいおい話そう。それより今は……」

そこまで言って、大次郎は左手を林のほうに伸ばし

「『アース・ハンド』」

詠唱なしに呟く。すると、地面から手が伸び林の中に飛び込む。しばらくして、

「きゃああああああっ！！！！！！」

悲鳴と共にアースハンドが戻ってくる。そして地面にベチャツと落ちてきたのは……。

「これはこれもどうもロングビル殿……いや、ここはあえてこう呼びましょうか？『土くれのフーケ』殿？」

「なっ」

「本当なの大次郎？」

大次郎は地面に転がっているロングビルを見ながらいう。ルイズは何言っているの？と言いたそうな顔をして、キュルケはちよつと驚いた感じで聞いてくる。タバサは声に出していないが、やはり驚いている。

「な、なんの事ですか？私はフーケでは……」

「ない、とは言わせんぞ？おまはんは一番最初から怪しいと思っていたからのう」

その後大次郎は淡々と語る。

「まず最初に怪しいと思ったのはおまはんが隠れ家を見つけたところじゃ。歩いて半日馬でも四時間掛かるのにおまはんは騒ぎが起きてしばらく経った後にきた。時間的におまはんが隠れ家を発見して、戻ってくることは不可能じゃ。そいにフーケは男女どちらか分からずそう簡単に見つからない盗人じゃ。たかが農民に分かる

はずもないし、性別なんぞもつとわからんじやろ。小屋もそうじやの。見た目はかなりのボロじゃったが、なかにあつた家具はそれなりに新しいものばかりじゃった」

「つまり、あたしは自分で墓穴掘っていたというわけかい」

「ま、そういうことじゃな」

ロングビルはふうつと諦めたようにため息を吐く。大次郎は土を練成して手枷を作り、フーケの腕に取り付けた。

「さて、これで一件落ちや……!？」

ぞくり、背筋に冷たいものが通る。大次郎は即座に振り向き、腰の刀に手を掛け、前方の林を睨む。

「ど、どうしたの大次郎？」

「ちくつとだまっちよれ」

全員が息を呑む。ずぶの素人でも分かるくらい大次郎は殺気を出しているのだ。

「ええ加減できたらどうじゃ？そこにいるのはわかつちよるんじや」

大次郎がそう言うと、林の中から何かが出てきた。それは大次郎と同じ着物を纏い、髪を後ろで一つに束ね、腰には刀を差している巨漢の男が立っていた。

「久しいなア……『人斬り』」

「こっちは会いとうはなかったがの……『腹裂き』」

これから始まるのは過酷な幕末に生まれた獣同士の喰らいあいだ。

第十六話（後書き）

大次郎のルーン的能力ちよつとやってしまったと思うが・・・
後悔はしない！！面白ければそれでいいと思う！

第十七話（前書き）

『半次郎』見に行ったぜい！！いやゝいい映画だった！！後半ちよつと泣いちゃった。

まあ、それはさておき十七話目ですどづぞー！！

第十七話

その昔、日本が幕末と呼ばれた時代。たくさんの人斬りが生まれた。幕末四代人斬りを初めとした新撰組の隊士。有名な”人斬り”は幾人もいる、

しかし、『隠れた人斬り』もたくさんいるのをご存知だろうか？

決して名前を明かしてはいけない。

決して存在を明かしてはいけない。

決して目立つてはいけない。

そして・・・決して失敗してはいけない。

そのような者達もいた。そしてそのものたちは倒幕、佐幕関係なく恐れられた。

そして、いまここに・・・ハルケギニアの大地にその『隠れた人斬り』同士の戦いが始まる。

「なぜおまんがここにおる・・・『腹裂き』」

片や国を変えるためにと剣を振るった『人斬り』

「さあなあ……気づいたらここにいたんだよ。知らないところだから強い輩がいるかと思ったら一人もおらんでつまらなかったぞお……『人斬り』」

片や人を斬る快樂に溺れた『腹裂き』と呼ばれる人斬り。『人斬り』同士の戦いが……。いま始まる。

「誰……ダイジロウ」

タバサが、大次郎に聞く。大次郎は構えを解かずに返す。

「元肥後藩士・仁示心刀流剣術原田信介……通称『腹裂き伸介』」

仁示心刀流剣術とは……。構えは常に八相として構え、袈裟なし上段から振り下ろす剣術だ。流れとしてはタイ捨流の流れを汲んでいる流派だ。

「はらさき……?」

「ああ、あやつは刀を構え、低めの袈裟を振り下ろし相手の腹を斬るのが得意としている……。故に『腹裂き』」

現代ならいざしらず……。当時の医学で腹を両断されてしまったらまず絶対的に助からない。臓物が洩れ、血が大量にあふれ出す。とてもじゃないが確実に死ぬだろう。

しかし、腹を両断するとは簡単に言ってしまうが、実際のところ腹を両断するのはかなり難しい。止まっている敵を斬るのなら問題な

いだろうが、相手が大人しく斬られてくれるとは思わない。

「相手が動いていようと鎖帷子を着込んでいようと、確実に真つ二つにしてしまう……人を斬ることではか快楽を得れなくなつた男、それが原田伸介だ」

「人を斬ることのみに……快楽を得る……」

その場にいるものすべてが戦慄する。元々その場にいるのは魔法を使うメイジと平和な近來日本で生きてきたサイトだけが、おそらく誰でも分かるだろう。目の前の男は只者ではない……と。原田はそれを聞いて肩を竦めながら答える。

「おいおい、人のことが言えるのかね？人斬り。君とて人を斬つて喜んでいのではないか？」

「ほざけ、おいが人を斬るのは国を変えるためじゃ。おまんのように快楽を得たいからではない」

「しかし、貴様とて感じるであろう？人を斬つたときの肉を裂き、骨を断つ感触！ああ、思い出しただけで身体が疼く！！」

原田は両手を大きく振りながら答える。その顔は快楽に浸っている表情になっている。おそらく人を斬つたときのことでも思い出しているのだろう。それを聞いた大次郎は顔を歪ませながら答える。

「ああ、しかしあまりいい感触ではないがの……そいで貴様はなぜ来た？なぜおいの目の前に姿を現した？」

それを聞いた原田がおお、そうだ。といいながら手を打つ。

「いやない・・・最近妖術使いの小娘が変わった服と剣を手にした滅法強い男を召還したと聞いてな。それで学院とやらに行ってみようと思ったら・・・おぬしがいたというわけじゃ」

にやアと嫌な笑みを浮かべる。大次郎はそれを見て苦虫を噛んだ様に睨み付ける。

「おまんの性癖に付き合うつもりはなか。そこらの獣とじゃれあつてろ」

「だから目の前にいるではないか・・・獣が、しかも飛び切りの猛獣が」

抜かせ、と大次郎は呟き、刀を引き抜く。先ほどの臨戦態勢ではなく、完全に戦闘態勢だ。それを見た原田も刀を抜く。二尺九寸（87センチ）の大刀・・・拵えは元肥後藩士とあってか肥後拵だ。

「・・・タバサどん」

「・・・なに？ダイジロウ」

大次郎はタバサに声を掛けた。そして、一言呟く。

「見とけ・・・こいが『人斬り』の『獣』同士の喰らいあい・・・殺し合いじゃ」

「・・・」

タバサの目に動揺の色が浮かぶ。それを聞いていたキュルケも動揺

する。ルイズとサイトは殺し合いという言葉だけわかったらしい。

「話は済んだか？『人斬り』」

「ああ……『腹裂き』」

二人はにらみ合う。そして

「野太刀自顕流・高倉大次郎」

「仁示心刀流・原田伸介」

「『推して参る!!』」

大次郎は蜻蛉に構え、原田は八相に構える。……そして沈黙。互いに構えたまま沈黙を続ける。

「……止まった」

「……」

そこにいる者たち全員が息を呑む。

「な、なんでよ？さつさと斬っちゃえばいいのに」

ルイズが答える。二人の殺気に当てられてか、若干声に震えがある。すると、それにタバサが答える。

「・・・・間合い」

タバサは以前大次郎に教えてもらったことを思い出していた。

『ええかタバサどん。”間合い”とは剣術に限らずすべての武術、武器に当てはまることでこれは使う流派、得物によって違う。刀なら刀の、槍なら槍の間合いがある。達人同士の斬り合いでは相手の”間合い”を潰し、己の”間合い”にするかで勝敗を喫する』

『それはどのくらいのタイミング・・・拍子でやるの?』

『・・・・わざわざ分かりやすいように言い換えてくれて感謝じゃ・・・・。まあ、自分の動きやすい間合いに入ったら攻撃を仕掛ける。もちろんそこで尻こまないのも大切じゃ』

「ダイジロウはまだ自分の間合いに入ってない・・・だからまだ仕掛けない。でも二人とも徐々に自分の間合いを作ろうとしてる」

大次郎が得意とする掛かりは敵より5～6 m離れた位置から走り出し、2 mのところで飛び込む。

それに比べ原田の得意としている技は駆け寄るという点では似ているがこちらは1 mのところで相手に踏み込む技だ。飛び込みと踏み込み、似て非なる剣技を使う二人はどう戦うのか？

そして互いに間合いに入り、斬り込む。

「キエエエエエエエツ!!!!!!!!!!!!!!」

「うおおおおおおッ！！！！！！」

獣同士の咆哮。まさにそれ以外の言葉がない。互いに駆ける。そして2mのところで大次郎が飛ぶ。

「キエエエエエッ！！！！！！」

その勢いのまま刀を振り下ろす。しかし

「うおおおおおおッ！！！！！！」

原田は予測していたかのように大次郎と同じ2mの間合いで斬りかかる。原田の刀が大次郎の腹に迫る。

「キエイ！！」

大次郎はそれを払い落とす。

野太刀自顕流『長棒』

本来は薙刀などの長物相手に行く技。横から薙いできた薙刀を払い落とし、その勢いを失くさず斬りかかる。

「うむっ！！」

しかし原田もそれを予想していたのか払われた刀を捨て、腰の長脇差に手を伸ばし大次郎の首目掛けて斬りつける。

「くっ!!」

大次郎はそれを後ろに飛ぶことで回避する。そして間合いを開ける。原田はいつの間にか大刀を手に持ち、長脇差を腰に納める。たった三合。しかしその三合は常人では瞬く間に斬られる激しい斬り合いだ。

そしてまた膠着。

「……相変わらずやりおる」

「……そっちもの」

互いの身体を見る。原田は首筋に薄い切傷を負い、大次郎も首筋に薄い赤い線を作っている。互いに後ちよつと深ければ危ないところだった。

「くつくく、やはりお前は中々の腕前だ」

「ふん、お前に褒められても何も嬉しくないわ」

互いに皮肉りながら言う。大次郎は蜻蛉の構えを取る。

「……次で決めちやる。こい」

「ふ、ふふふ。いいだろう…….といたいところじゃが」

原田は実に悔しそうに肩を竦ませ、刀を鞘に納めた。

「残念ながら今回の『仕事』はここまででの…….残念だが戻るとする」

「……逃がすと思うか？」

『仕事』というのも気になったが……今の大次郎にとってそのことよりこの男を切り殺しといたほうが得策に思えた。

原田は肩を竦めながら右手を懷に入れ、

「ふむ……もちろん見逃してはくれんとは思うが……これが相手でもそういえるかな？」

そういつて原田が懷から出したのは……、

「っ！！短筒……しかも異国の連発式か」

「うむ。確か『こると』なる拳銃らしい」

原田が手に持っていたのはコルト・ピースメーカーというリボルバーだ。西部劇ではお馴染みの六連発式の拳銃だ。

「ちょうど弾丸はお主を含めて六人。おまんなら分かるじゃろ？」

「くっ……」

そう、原田は剣術の腕もさることながら砲術の腕も一流だ。百メートル離れている直径十センチの的を火縄銃で撃ちぬけるほどの腕前だ。原田にとっては大次郎たちはただ動く的に過ぎないのだ。

「さあ……どうする『人斬り』。俺を斬るか『仲間』を撃ち殺されるか……好きなほうを選ぶがよい」

大次郎に選択肢はない。

「わかった……ゆけい。さつさとおいの前からその不快の顔を消せ」

「酷い言われようだな……まあいいが。それではのう『人斬り』」

原田はゆつくりと後ろ向きのまま歩き森のなかへと消えていった。
大次郎はそこでため息を吐き地面に座る。

大次郎は袂から手を出す。その手には棒手裏剣が六本。弾丸と同じ数だ。

「やれやれ……あやつめまさか短筒を取り出すとは思わなかったわい」

タバサが大次郎の下へとかけてきて大次郎の身体に触る。

「大丈夫？怪れない？」

「ああ、大丈夫じゃ。少し肝が冷えただけじゃからのう」

それを聞いてタバサはほっとして大次郎にもたれかかる。大次郎はその頭を優しく一撫でして立ち上がる。

「さて……原田を逃したのは痛いが……それは後々なんとかなるじやろう。本来の仕事は無事解決したらしいしの」

フーケを捕まえ、破壊の杖を取り返した。本来の任務は完遂されて

いる。

「さて……戻るとしようか……学院に」

「うん……」

周りの者達も大次郎に続く。

「（それにしても……原田の仕事とは………いつたい？）
」

なぜ原田がここにいたのか？

原田の言った『仕事』とは何か？

何一つ情報は掴んでない。しかし、過ぎてしまったことはしょうがない。

「（あの男のことじゃから……まず間違いなく姿を現すじやろう。その時は………）」

腰の”虚空”を掴む。虚空はそれに答えるが如く震える。

こうしてフーケ騒動が終わりを告げた。謎の多い敵を残したまま・
・・。

第十八話（前書き）

一巻完結です！

第十八話

〽フリッグの舞踏会〽

「……準備はええか？ギーシュ」

「ああ、いつでもいいよ」

賑やかな席の端つこで、大次郎とギーシュは机を挟んで睨みあっている。それを周りのものは囲むように固唾を呑みながら見ていた。

「それじゃ、両者構えて……………」

審判役だろうが、レイナールが手を両者の真ん中におき……………
合図をかける。

「はじめ!!」

「うおおおおおっ!!!!!!!!!!」

「はあああああっ!!!!!!!!!!」

二人は合図と共に掛け声を上げ、目の前の瓶を掲げ、

「それぞれ負けるなギーシュ!!!!!!!!!!」

「無理は止めるよダイジロウ!!!!!!!!!!」

「ギーシュが勝つほうに三エキュー!!!!!!!!!!」

「ダイジロウが勝つほうに七エキュー!!」

飲み比べをしていた!!

くく遡ること数時間前くく

「目的のものは回収した。あと魔法が使えるようになった」

学院長であるオールド・オスマンを前に、大次郎はそう言い放った。最初こそ驚いていたが実際に魔法を見せると納得された。

周りにいた教師陣は「ありえない、ありえないありえない」と呟いたり、スクウェアレベルの魔法を放ち「・・・辞表書いてきます」という教師がいたり、四系統すべての魔法を放つと「なんだそれわ!？」と驚かれたり、その中でも風魔法が得意と言うと一人の教師の目が光ったり（ように見えた）。

その後ギーシュたちに魔法が使えるようになったと伝えたと、

「なに!？それは本当かいダイジロウ!？なら宴だ!!」

「くくくうおおおおおおおッ!!!!!!!!!!」

以前なら妬んだり罵詈雑言を吐いていたであろうが、ここにいるギーシュたち門下生たちは大次郎の気風というか性格を受け継いで細かいことは気にしない性格になっている。

そして飲むこと三時間近く。いまだ誰も潰れん所をみたギーシュたちは「飲み比べだー！！！！」と酒の勢いで飲み比べを始めたのだ。

くく以上・説明終了・現在に戻るくく

「うぷ・・・！！」

「うお！？ギーシュが潰れたぞ！！」

「ダイジロウの勝ちだ！！」

「ああ、負けた・・・！！」

さすがに飲みすぎたのかギーシュは口を押さえその場に蹲る。それを見た周りの者達は歓声を上げたり嘆いたり・・・とにかく愉快的な連中が机の一つを囲っているのだ。

「ふふふ、まだまだじゃのうギーシュ」

「うぷつ・・・大次郎は平気なのかい？」

ギーシュは口を押さえながら聞く。何やら吐きそうな勢いだが・・・大次郎たちは気にも留めない。

「ああ、こつちに来る前は友人と飲み比べをして巻けたことは無いからのうく。そいにこげん酒よりもちつとキツイ酒を飲んじよつたわい」

薩摩は芋焼酎でも有名で大次郎も薩摩にいたころは芋焼酎以外は飲んだことがなかった。芋焼酎はワインよりもアルコール度数がキツイのでワインぐらいなら文字通り『ジューズ』のように飲める。

「ふ、ふふ・・・僕もまだまだね・・・うぷっ!!」

「おい誰でもいいからギーシュを連れてけ!!」

「やれやれしょうがないのう・・・」

今にも吐きそうなギーシュを抱え、大次郎は外にある木の茂みに置いた。

「ほれ、おまはんが看病してやれ」

「!？」

後ろの、入り口の近くでこちらを覗いていた金髪の女に大次郎は言った。その女はバレたのがわかったからか、顔を真っ赤にさせながら出てきた。

「おまはんは確か・・・モンモランシー・・・じゃったか？いつもギーシュがいつておったわい」

「え？」

大次郎が茂みの中で吐いているギーシュを指差しながら言う。

「『以前僕は誰でも可愛い子なら好きになってしまった。でも、今

は違う。僕が本当に好きなのはモンモランシーだけだ！』とこの前飲んでいたときに豪語しちよったわい。実際ココ最近おまほんのところに通い詰めだったらしいからのう」

「だから最近女遊びの噂がなかったんだ……」

ここ最近、ギーシュの女遊びの噂がパタリとやんだ。周りのものがどうしたのだ？と聞けば、

『僕が本当に愛しているのはモンモランシーだけだからね。だからさ』

そつ気障に言つてその場を去るのが最近のギーシュの言動だった。さらには今までならお茶に誘われたらほいほい付いて行つてたが、最近では全部断りモンモランシーと過ごす時間に当ててるらしい。

「まあ、もともとこやつは一途なところがあるからのう……大事にしてやれ」

「ええ、わかつたわ……それと……ありがとう」

モンモランシーが礼を言う。普段の彼女ならそんなことはまず無いのだが……、大次郎と関わってからギーシュが変わったのもまた事実だ。そこところに彼女は感謝しているのだろう。

「ない礼には及ばん……それじゃのう」

大次郎はその場を後にする。モンモランシーは大次郎の背中を見ながら、

「本当・・・不思議な人だわ・・・」「うぷっ!!」ああ、もうギィシュ!! 飲みすぎよまったく!!」

大次郎が魔法学院にやってからまだほんの数十日。しかしそれでも十分なほどこの学院のごく一部だけだが・・・変わっている。モンモランシーもまた、その一人だ。

～～会場・料理場近く～～

「ん」と・・・おお、タバサどん見つけた見つけた」

「・・・ダイジロウ」

料理が並ぶ机の一角、大次郎はそこで食事をする己の主を探し、見つけた。タバサは目の前に並んだ料理を次々と口に入れ胃の中に放り込んでいる。

「相変わらずすごい食欲じゃのう」

「これでも普通」

ははは、そうかえ。と大次郎は笑いながらその隣に立つ。大次郎は目の前にある食事を摘む。二人は黙々と食事を取る。するとタバサが話し出す。

「ダイジロウ」

「なんじゃ？タバサどん」

「あの男・・・またくると思う？」

タバサがいうあの男とはおそらく原田伸介のことだろう。それを聞かれた大次郎は、

「来る、必ずのう・・・あやつは強い者と『斬り合い』をするのを悦楽にしている男じゃ。少なくともこん世界のもんで満足するよな男ではなか」

大次郎は京都にいたことを思い出した。強きものと戦い、そして斬り殺す。それが原田の唯一にして最高の悦楽。そしてコチラの世界に来て見つけた元同業者・・・しかもかなりの凄腕を持った男と再会した。原田が見逃すわけがない。

「じゃが・・・もしかた来るようなことがあれば・・・」

大次郎は腰の刀の柄を軽く叩く。

「そんな時は・・・おいが原田を叩つ斬る」

「・・・無茶はしないで」

大次郎の顔に浮かぶ決死の表情・・・タバサはその顔を見て一言呟いた。大次郎はタバサのその呟きを聞きタバサを見る。

「今日みたいな無茶だけは今後しないで・・・いなくなっちゃいやだから」

「……わかった」

大次郎はタバサの頭を撫でる。タバサはそれを顔を紅く染めながら受ける。周りではちょうど音楽が流れ始め、踊りを始める男女が現れた。

「ほう、西洋の踊りは不思議じゃのう……やはり異国は違うのう」

「ダイジロウの国では違うの？」

「おいの国じゃ一人で踊るのほとんどじゃ……音楽もこげん楽器で奏でるもんじゃなか」

「そう……」

それを聞いたタバサがどこかしら落ち込んだ表情になる。それを見た大次郎はバツが悪そうに頬を掻き、

「あゝ、タバサどん」

「なに？」

「もしよければ、おいに西洋の踊りを指南してもらってもよろしいか？」

大次郎が頭を下げながら聞く。タバサはそれを驚いた顔で見る。しかし、すぐに喜々とした表情になり、

「喜んで」

タバサは大次郎の手をとり踊りに参加した。

この日、例年のブリップスの舞踏会に異様な組み合わせの男女が二組できた。しかしその内でさらに異様な組み合わせがあった。足つきが危うく、全然踊ってるようには見えないが真剣にやっている変わった服を着た男。そしてその男に色々と注意をしながらも楽しく踊っている蒼髪の少女。

この物語はまだ始まったばかり。物語はまだ続く。

第十八話（後書き）

長かった・・・一巻やつと終わったよ。

さてさて、やつとこさ一巻が終わり二巻に入りたいと思いますが、
次回はちよつと閑話みたいのを書きたいと思います。

今後とも異世界のサムライをよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8885/>

異世界のサムライ

2010年10月24日10時29分発行